
ヒトハネ

坂本伊能

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒトハネ

【Nコード】

N8302I

【作者名】

坂本伊能

【あらすじ】

40年前を境に、人類は目に見えない翼を持つ様になった。

当初は何の影響も与えないと思われていた翼だが、技術の発達により具現化される様になると、翼の持つ力が徐々に明らかになっていく。

そして、翼の持つ力がハッキリと人々に知られる様になった頃、その翼の力を使った者達によって、国家は崩壊した。

日本政府が力を失い、日本が分裂してから1年が経った所から、物語は始まる。

序章：寒色（前書き）

作者の他の作品と異なり、縦書きにて執筆した作品です。

その為、PCやケータイで読む場合、改行が少なく読みにくい場合があります。

ご了承下さいませ。

序章：寒色

「オイ、今度捕まえた奴はどうだった？」

「へえ、小翼の桃色が五枚でさあ」

下卑た声が、虚空に響いていた。

廊下に居る人間達が、そうして話しているのだ。

「小翼で五枚か」

「桃色でもなければ、使い所の無い翼ですかね？」

「そうだな」

対して、その下卑た声に耳を傾けている少女は、部屋に押し込まれていた。

何もない部屋だ。四畳はあるだろうが、しかし生活感のあるモノは何も無い。布団すら。ただコンクリートの壁と床があるだけ。

少女は、男達によつて監禁されていた。

「丁重に扱えよ、兵藤。今はこんな場所に置いているが、後には我々の民になるんだぞ」

少女は幼かった。

十歳に、恐らく届いてないだろう。ショートヘアーは茶色がかつていて、目は丸い。頬は膨らんでいて、ほんのり赤い。

着ている服も子供サイズのラグランシャツで、こんな所に閉じこめられてさえないなければ、普通に町を親や友達と一緒に、元気よく歩いているであろう子供。

違和感があるとすれば、それは背中から、淡い桃色の羽根が五枚生えている事だけだった。

「わかつてまさあな、旦那。オレっちも子供をいたぶる趣味は持つてませんぜ」

「なら、良いがな」

羽根は、別段珍しくもない。

少女が兵藤と呼ばれた、だみ声の男によつてここに監禁されたが、

その前に。

少女は羽根の生えた男達しか見なかった。
一メートル近い大きな羽根や、五〇センチ程度の羽根、色々だった。

それに少女は、二〇センチほどの小さな羽根を生やしているだけだ。

兵藤にだって、二枚の小さな赤い羽根が生えていたのだから、違いは無いと言っても良い。

「ハア……」

兵藤が、小さなため息を漏らす。

「この子だって、”翼事変”^{つはさじへん}さえ無けりや、普通に暮らしていたでしょうに……」

躊躇のある声色だった。

それを聞いて、旦那と呼ばれる男が制する。

「言うな、兵藤。”翼事変”は、我々が引き起こした様なモノだ。だからこそ、我々が責任を持って、平和な時代に戻さなければならぬんだ」

「ですが……」

「彼女は、その礎だ」

ハッキリと、旦那と呼ばれる男は断じた。

「罪業は我々が背負う。願うのは、彼女がこの後、幸せに暮らしてくれる事だけだ」

「へい……」

難しい事は、少女にはわからなかった。

二人が話してる内容すら、六割方は理解していない。その詳細な
ど、及びも着かなかった。

だから、気付いていた。

足をする様でいて、僅かに何かが地面に着く様な、そう、足音に。
「勝手な言いぐさだな」

三人目の声が割って入った時、外の二人は驚いた様だった。

兵藤が呻いて、旦那と呼ばれた男はすぐに構えに入ったらしく、ズザザ、という音が僅かに聞こえた。

「きさ……！」

ゴツ。声を遮り響く、鈍い音。

バスッ。再び。驚いて少女は飛び退いて、今までもたれ掛かっていた扉から遠のくが……。

コンコン

「……ッ！」

突然、扉がノックされた。鉄製の扉で、重く頑丈だった。

「大丈夫か？」

その向こうから、声が掛けられた。

優しい声色だ。冷たいだけの旦那と呼ばれた男の声色とは違う。

同時に、澄んでいた。兵藤の発していただみ声とも違った。二人と同じ、男の声なのに。

「君を助けに来た。今、扉を開ける」

言い終わると、扉の蝶番が破壊された。

何が起こったのか少女にはわからなかったが、それで扉は呆気なく開け放たれた。

いたのは、一人の男。

真っ赤なコートに身を包んで、日本人が持つ黒い髪を好き放題に伸ばした、少年だった。

歳の頃は十五を過ぎた所だろう。顔立ちは大人数に見えるように見え、まだあどけない。

身長は一七〇に達していて、コートを着ているからか体格も良さそうだった。

「助けに来たぞ。お父さんとお母さんの所へ、戻ろう」

少年は、ニコリと微笑んで、優しく語りかけてくる。

男達には無かった優しさ、暖かみ。それを感じ取った少女は、泣き出した。

第一章 「玉虫色」 1

1

少年は少女を抱きかかえ、速やかに建物を脱出した。

何の事は無い事務ビルの一つだ。周囲には似た様なビルが建ち並び、その中では小さい部類。探偵事務所の入っていきそうなビル、と言えはわかりやすいだろう。

外には人通りだつてあつた。翼のある人間と、無い人間とが混ざり合っている。

道路もアスファルト、日本の道路だつた。車も幾らか駐めてある。その駐めてある車の一つに、少年は駆け込んだ。

深緑のジープだ。日本の道路には、似つかわしくない車である。

「夜津季^{やつき}、保護対象は？」

先に乗車していた男が、少年”夜津季”に声を掛ける。

几帳面にオールバックに髪を撫でつけた、中年の男だ。背中に翼は見えない。

だが少女は、その中年の男に見覚えがあつた様だ。

「おじさん！」

おじさん、と呼ぶ程に親しい間柄。父とよく一緒に居て、時々家にも訪れていた人物だつたのだ。

「小翼の桃色五枚羽根、それに紺色と白色のラグランシャツ、特徴は一致していました」

「うむ、確かに空ちゃんだ」

夜津季は端的に報告し、少女、空をジープの助手席に座らせた。

男は空に顔を近づける。

「空ちゃん、おじさんの事は憶えてるね？」

「うん、和泉おじさん！」

「よしッ。これからおじさんと一緒に、お父さんの所に帰るからな」

和泉は空の頭を優しく撫でると、空にシートベルトを締めさせて、ジープのハンドルを握った。

「夜津季、お前も早く乗れ」

「オレは後ろに。追っ手が掛かるかも知れませんから」

「そ、そうか……」

断った夜津季の言葉に、和泉は幽かに怖じ気づいた様だ。

そんな和泉を見て、空も何か察した様に顔を強張らせた。子供は勘が良い。思いながらも、夜津季は軽く空の頭を撫でた。

それから、サッと軽い身のこなしで、ジープの荷台に飛び乗る。運転席から夜津季を確かめると、和泉は車を発車させた。

アスファルトはあちらこちらが砕け、酷い状態の為、ジープはぐらぐらと揺られる。そのせいで、スピードは出せない様だった。

それが、酷く和泉を焦れさせる。

「空ちゃん、三十分ほどで無事に帰れるから、心配するんじゃないぞ」

和泉はそう言っていたが、むしろ自分に言い聞かせている様にも聞こえた。

コクリと頷きながら、空は窓から後ろの夜津季を見やった。

夜津季の背中には、空の背中の羽根と同じくらいの大きさの黒い羽根が、八枚も生えていた。

だがそれは、どこか黒と言い切れず、淡く濁っている様にも見える。

やがて、十五分が過ぎた。結局十五分の間何も無く、ただ車で揺られるだけの時間が過ぎていた。

が。

「け、検問だ！」

慌てて、和泉は袋小路に入ってから、車を止めた。中々冷静なモノである。

夜津季がこっそりと壁越しに見てみると前方、二〇〇メートルほど向こうに、人だかりがあり、コーンが立てられている。簡単な検

問だった。

和泉は車を飛び降りて、後ろの夜津季に駆け寄る。

「どうする夜津季ッ!？」

「厄介な位置で検問してますね。もう少し行けば、仲間がいるんですが……」

落ち着き払った様子で、夜津季は答える。表情、声色共に平静その物。

「簡単な検問だから、突破できん事も無いだろうが……」

「やめた方が良いと思います。突破できても、その後の集中砲火にジープが耐えられる保証がありませんからね」

「むぐ……」

言われて、和泉は口をつぐんだ。

それを横目で見て、夜津季は荷台から飛び降りる。次に目を細めて、人だかりを見やった。

「赤が二の他は、黄、青、黒が一人ずつ。大翼は無し、中翼が二で小翼が三……」

翼の生えた人間が、五人居た。どの人間も若く、二十代半ばからそう外れていない様だ。

「バンデットは、いるのか？」

「いませんね」

声を震わせ和泉は訊ねたが、返ってきた答えにホッと胸をなで下ろした。

「でも、いると思いますよ。バンデットはリーダー格ですから、ヤツらが何か行動を起こす時には必ずいます」

「そ、そんな……」

がつくりとうなだれる和泉。なら、とジープから地図帳を取り出して、迂回路を探そうとする。

それを見て夜津季は、不敵にニヤリと笑った。

「そう言えば、和泉さんは翼を持つ人間の戦いを見るのは、初めてでしたか？」

「ん、ああ、まあな……」

うつむいて、和泉は答える。

「今回は運転手という事もあって、君に協力してるが、本来はしがないトラック運転手だ。歳も四十二になる。四十年前を境に生えたという翼を、私は持っていない」

四十年前、その時に何があったかは、今年で十六になったばかりの夜津季には、近代史という形でしか知らない。

だが四十年前、太平洋を襲った巨大地震があった。それを境に、翼が生えた人間が世界各地、洋の東西を問わず生まれる様になったのだ。

四十年前までに生きていた人々は、そのままに。

「翼など有っても無くても、同じだと思っていた。そこに差など無いと、信じていた」

当然の意見であつた。

翼は当初、そこに謎の力が働いている、という程度の認識に過ぎなかった。

医学的に見て、生命活動に一切依存していない部位と証明され、生物学的に見て、一応人体の一部だと証明された、そんな存在。

特別何かが起こる訳ではないと、皆思っていた。

「カルネル技術」が普及し、君達の様な翼持ちが、異能の能力に目覚めるまでは」

それが、二年程前の事だった。

エルリツヒ・カルネル博士によって開発された、翼具現化技術、カルネル技術。

シュテンタイトと呼ばれる特殊な鉱石を触媒にし発生した光線を当てる事で、翼を具現化するというモノであつた。

翼は、大中小の三つの大きさ。赤色、青色、水色、淡い緑色、濃緑色、黄色、桃色、白色、黒色の基本九色によって、具現化された。実際、夜津季も一年ほど前に、その技術を使って翼を具現化している。恐らく、前方に居る人間達もそうだろう。

「そして”翼事変”。一年前のあの事件を境に、私の様な人間まで非日常に連れ込まれてしまった……」

「”翼事変”……」

夜津季にとって、懐かしい響きであつた。

翼事変。

それは世界的規模の、社会革命だつた。

翼を持った人間に、”能力”が宿つた事が明らかとなつた事件である。

赤色の翼を持つ人間は、何故か炎が出せる様になった。同じ様に、青色の翼を持つ人間は、水を出せる様になった。中には、単独で戦車すらも凌駕する程の、高い戦闘能力を有する能力もある。

突然、そんな能力が職種や人種、年齢や性別を問わず、人に宿る。それは、銃や大砲が配られた様なモノだつた。

反政府運動の根強い中東、アフリカ地域を中心に、混乱は世界へ広がり、日本においても反政府活動が活発化した。

結果、一応日本国政府の崩壊は免れているが、地方自治機能は完全に麻痺してしまっている。

それを境に、日本の……。否、世界的規模で治安は悪化してしまつた。治安状況の悪化は、翼持ち以外にも影響を及ぼし、現在に至る。

「何が翼だ、何が能力だッ。そんな下らない力のせいで、空ちゃんの様な子供まで巻き込まれてしまっている……」

「”バンデット”のせいですね」

”バンデット”、山賊を意味する単語だ。だが現在においては、この言葉は次の意味合いで使われる。

「そう、”翼獲り”だ……！」

他人から翼を奪い取り、自分のモノとしてしまう人間達。皮肉な事だが、それもまた翼の能力を使って行われる事だつた。

「オレの同級生にも、翼獲りをした人間がいましたよ。そいつはスポーツができたんですが、しかし翼のせいでプロスポーツ選手への

道は絶望的になってしましましてね。翼の数も少なく、それを思い悩んでの事だそうです」

「下らない話だ」

「同感です」

相変わらず、夜津季は不敵に笑う。それが和泉には不思議で、同時に腹立たしかった。

翼を奪われた人間がいるというのに、何でそんな風に話しているのか。

まるで、何も感じていないかの様だった。

「その同級生の事件を境に、オレはこの戦場へ足を踏み入れました。ですからね、ただの翼持ちよりずっと戦闘には慣れてるんです。何せ、初陣が同級生から学友を守る、ってな戦いでしたから」

「……ッ」

笑ったまま放たれたその言葉に、思わず和泉は息を呑む。

初陣が、同級生から学友を守る戦い……。完全な、仲間割れ。

「オレの翼は、小翼の八枚羽根。数や大きさだけで見た場合は、中の下って所でしょうかね。ですから、オレは何よりも戦う術を得ました」

「戦う、術？」

「ええ。誰よりも能力を上手く使いこなせる様にと、鍛錬してきました」

言って、夜津季は翼をはためかせた。

黒い羽根だった。

だが、和泉は知っている。その黒い羽根が、本来夜津季が持つ羽根の色ではない事を。

突入する前と後とで、色が変わっている事を。

「オレの能力、”千変万化”せんべんばんか」

本来彼が持つ翼の色は、世界的に見ても珍しい色だったのだ。

「小翼の”虹色”八枚羽根を、オレは誰よりも上手く使いこなしたいんですよ」

虹色。それが今は黒く染まり、光沢のある黒色になっているに過ぎなかったのだ。

和泉は普通の人間だが、夜津季の能力は噂に聞いていた。それ程、夜津季は有名だった。

翼事変の英雄として。

「どんな色の羽根にも、どんな能力にも変化し得る能力、と聞いたが……」

「ええ」

反則的な能力だ。

翼を持つ人間と言えど、使える能力は一つに限られている。

その限界を超えて、幾つもの能力にも変化してしまう、そんな能力なのだ。

たった一つの拳銃で、マシンガン、ライフル、麻酔銃、果てには迫撃砲の役割さえこなしてしまう。それ程の能力。

「とは言え、バンデット程小回りは良くありませんがね。アレは他人の羽根を奪って、自分に付け加えてますから、同時に複数の能力が使用可能です。対してオレは、羽根の色が決定出来るのは、一日にたった一度だけ。能力も、三十分一度。同時使用は不可です」
口ではそう言っているが、表情は、それでも十分だという事をわかっている様だった。

ゴクリと、和泉は唾を飲み込む。

「突破、できるのか」

一対五……。否、夜津季はもう一人いると言っているのだから、一対六だ。

相手も同じ能力持ち。有利な条件は、精々奇襲できる事ぐらいしか無い。

「そうですね」

だが、この期に及んでも夜津季は不敵に笑っていた。

「能力と言っても、所詮は物理的しよせんな能力でしかありません。これまでも人間が開発した技術を、楽に使いこなせる様になっただけに

過ぎませんよ」

「……」

和泉が唸る。

どうとも言えない内容だった。

内容からしてみれば、六人相手はキツイと言っている様にも聞こえるし、顔を見れば、秘策ありといった様子にも見える。

「ライター、それがマツチありますか？」

「……？ライター？」

言われて、和泉は首を傾げた。

翼の能力は、羽根の色で大体決まっている。

例えば今、夜津季の羽根は黒色に染まっているので、闇……なんて事は無く、金属に関する能力を持っている。

ライターを使って、一体金属に何をすると云うのだろうか？

「一応、シガーライターが付いてるが……」

ピピピッ。電子音が鳴った。

何かと思い見てみると、夜津季の腕時計であった。

「三十分、経ったんですよ。これで能力が変更出来るんです」

「そうか……」

「で、これで条件が整いました」

ポンと夜津季は手を合わせる。

「シガーライター、多分ダメになると思うんで、後で経費で落としおいて下さい。あと、合図を送るまでジープの中にいて下さいね」
「ち、ちよつと待ってくれッ。せめて何をするつもりなのかぐらい

……」

ニイ、と夜津季は口端をつり上げた。

「極小の、アルミ粒子。それに火を点けたらどうなるでしょう？」

「ッ！」

言われて、わかった。

顔から血の気が失せるのを感じながらも、慌てて和泉はジープの中に駆け込み、シガーライターを引っこ抜いて、夜津季に差し出し

た。

夜津季が受け取ったのを確かめて、助手席に座っていた空のシートベルトを外して、運転席へと促した。それから覆い被さる様にかかえる。

チラリとバックミラーを見やった。

真っ赤なコートに身を包んだ夜津季が、通りの角を曲がって行った。

第一章 「玉虫色」 2

2

「さて……」

夜津季は風上に立っていた。

風は、北東からやや南西へ向かっている。それを確かめてから、想像する。

（小麦粉よりも更に小さい、極小の、粒子）

夜津季はそれが舞う様を、思い描いた。

これこそが、能力を使用するに辺り必要な段階だった。

具体的に想像できさえすれば、能力は使える。逆に言うと、具体的に想像できなければ、能力は使えない訳だ。であるから、翼が具現化された当初は能力なんてまるでわからなかった。偶発的なモノに頼るしか無かったのだ。

しかし、その点夜津季は違う。虹色の翼を持つ為、当初から何の能力でも使う事ができた。

翼事変勃発後は訓練を積み、尚かつ元々の想像力が豊かであった夜津季にとって、想像という作業は決して難しいモノではなかった。
（ここだ）

検問から一〇メートル程手前の、車に手を押しつける。運転席の窓が開いているモノを、選んだ。幸い、この辺りは窓その物が無い車も珍しくなく、そして放置されている。

（想像しろ、想像しろ……。車の中に満たされる、ふんじん粉塵を）
既に敵は夜津季に気付いていた。

「オイ、そこのお前！ 何をしてる、こっちに来て顔を見せろ！」

勝ち気そうな女性だった。

夜津季はその声を完全に無視して、車に意識を集中する。

「ち、ちよっと待て！ アイツ、真っ赤なコートを着てないか……」

「？」

「コートお？ お前、今何月だと思ってんだよ。もう五月だぜ？」

「羽根だ！ 羽根、何枚ある！？」

夜津季を見て、検問をする男達が騒ぎ始めた。

その間に、車の中は灰色に染まる。極小の粒子が渦を巻き、車の中に充満していく。

「し、小翼、八枚羽根！」

「まさか、”紅蓮”の夜津季だアツ！？」

ニイ、夜津季の顔が邪悪に染まった。

車の中には粉塵が充満している。そして、目の前には敵がいる。幸い敵だけだ。車の中は勿論無人で、道路にも他に人はいない。

検問をしているところに、わざわざ足を運ぶ人間はいないだろう。

「げ、迎撃！」

女性が声を上げ、手を振り上げる。

だが時既に遅し。

夜津季もまた、逆の手でシガーライターを振りかざしていたのだ。

「物理法則、万歳」

運転席の窓へ、シガーライターを放り投げるだけだった。たったそれだけの事。

フウツ。空気を吸い込む音。

ドオオオオン……ッ！！

巨大な爆音が、轟いた。

腹に響く。まるで殴られた様だった。

シャアアアン……

次に、何かがすれる音。

窓ガラスだった。爆風によって辺りのビルの窓ガラスが、悉く砕かれ、地面に落ちた音だった。

ジープにも多くのガラス片が降り注ぐ。幸い、ジープは頑丈な造

りだった。

派手な音は立てても、車体に穴は空かないし、窓ガラスもヒビが入る程度で済んだ。

「クソッ、とんでもないヤツだ！ クソッ！」

空を強く抱き締め、和泉は愚痴る。

その間も、次々とガラスが降り注ぎ、車体を叩いて派手な音が鳴り響く。

その度に、空は悲鳴を上げていた。

「粉塵爆発だつて！？ ふざけやがって、まだ剣林弾雨の方がマシだ！」

和泉にとって、悪態を突く事が悲鳴だった。

その間、夜津季も空中を舞っていた。

投げるよりも早く後ろに跳んでいたが、それでも爆風に巻き込まれた。

子供に投げられた人形の様に、後ろ向きに飛んでいた。ビル三階の窓が横に見える高さで。

「さて……」

小さく呟いて、夜津季は背中に意識を集中する。

”滑空術”^{かっくつじゆつ}と呼ばれる、翼のエネルギーを使った技術だった。

何の事は無い、能力を使うのと一緒に。

どちらに体が動きそうか、想像する。急激な動きを想像してはダメだった。元々夜津季の翼は小さく、それ程強大な出力を有する訳ではないから。

自由自在に操作できる、巨大な水流の中というイメージに近い。

その水流の中で、夜津季は体勢をイメージした。

立つ。

ガッ！

足が着く。間一髪だった。頭がこすれそうになったところで一回転し、それから足を曲げて、ようやく足が着いたのだ。

それでも、勢いは殺せなかった。すぐにまた後ろへ吹き飛ばされる。

三メートル程の距離。高さは殆ど地面すれすれだが、変に地面に足が着いたせいで、回転が掛かっていた。

だから今度はその回転を、無理矢理遅くする。ゆつたりと流れる様に。

ズザザアッ……

また地面に足が着き、今度は、地面に着いた足に意識を注いだ。五〇センチ程引きずられ、ようやく夜津季の体は止まった。

結局車から三〇メートル程吹き飛ばされて、夜津季は無傷で着地した。体に怪我や火傷が一つもできてないのも、また滑空術の応用である。

「うはー、燃えてるなあ……」

爆発を起こした辺りを見やると、周囲の車も爆発に巻き込まれ、ガソリンに引火して、大変な事になっている。

丁度車が爆発した辺りは、火の海になっていて、轟々と燃え盛る炎から黒煙が上がっている。

「やりすぎたかなー、アスファルト碎けてなきや良いんだけど……」あれだけの爆発じゃ無理か。そう、言葉を紡ごうとした、瞬間だった。

ギンシィ

軋む音。

聞き覚えのある音に、夜津季は身を震わせた。夜津季の仲間が、よくその音を響かせる。

「アイツは、今日は休みだったか……」

その仲間はここにはいない筈。ならば、答えは決まっていた。敵の、能力だ。

第一章 「玉虫色」 3

3

炎の海から、黒煙が消える。

炎も段々と姿を消していつている。僅かにアスファルトで燻つて
る様だが、それもまた次々と消えていく。

代わりに、霧が辺りを覆い始めた。黒煙と入れ替わる様に、もう
もうと白い霧が夜津季の視界を遮ろうとしている。

「急激な温度低下による、水蒸気か」

だとすれば、恐らく何らかの能力だろう。

奇遇な事に、夜津季にはそういう能力の知り合いがいる。である
から、それが強力な能力である事を、よく知っていた。

だから、とりあえず物影に隠れる。

「やれやれ」

それと同時にだろうか。

通りに、若干かすれながらも、高く響き渡る男の声がこだました。
大分と距離を置いている筈の、夜津季の耳にも声が届く程に。

「まさか相手が、紅蓮の夜津季とはな。県下最強の能力者が相手と
は、ついてない……」

饒舌な様だが、隙は微塵も無い。

ならばと、夜津季は袋小路を使って、男の真横に回り込んだ。男
の姿が見える。

「オレ達バンデットの間じゃ、最悪の敵だって恐れられてるぜ、ア
ンタ」

成る程、相手はハンサムな男だった。

スラリとした体躯に、細い線の目鼻立ち、中性的な容姿の持ち主
である。

「そいつは光栄だな。できれば、その噂について教えてもらいたい

ところだ」

挑発、と言うよりは時間稼ぎだろう。

互いに互いの弱点を、対処法を、探っているという感じだった。

その間に、夜津季は男の観察を続ける。

「オレは違うが、”ヴェノム”の幹部連中と、翼事変の時に派手にやり合ったと聞いた」

男の背中に生えている羽は、合計で五枚。赤い羽根が一枚、水色の羽根が二枚、淡い緑色の羽根が二枚だった。

人に生える翼の色は、一つに限定されている。

虹色の羽根を持つ夜津季だって、能力を使う時は、八枚の羽根全てが単一色に変わる。

（バンデット、か）

確實、むしろ絶対と言っても良いだろう。

この男は、他人から翼をむしり取り、我が物としたバンデットであつた。そして同時に、検問をしていた連中を束ねていたリーダーだろう。

「ヴェノム。そう言えばアイツ等、今はそう名乗ってるんだっただな」

「ああ。今は他のバンデットグループに呼びかけて、理想を掲げる事でグループを統括してる。そんな組織の幹部連中と戦ったって言うんだから、そりゃオレ達みたいな末端には、伝説みたいな話だ」

そんな話は重々承知している。

一年前に戦った相手が、そんな大それた相手になっているのに、夜津季も一年間ただ遊んでいた訳ではない。

故に、そこからは話よりも打算を始めた。

「理想……。確か、翼持ちを制限して、選ばれた人間だけが翼を持つて、選ばれなかった他の人間は、ソイツ等に翼を差し出す、ってな話だったか」

「そんな所だ。そうすれば少なくとも、普通に暮らす人間は、翼事変前の暮らしに戻る事ができるからな」

赤色は炎。水色は氷。淡い緑色は、風だった。

内、水色については能力がわかってる。周囲を凍らせる能力だ。
「ふざけた話だ」

「どうしてだ？ 良い話じゃないか。苦しみは確かにあるが、それは一時だけだ。それが終わりさえすれば、後は普通の生活が待ってるだけだ。翼を巡る争いに巻き込まれる心配も無い」

「長期的に見れば、悪い話じゃないと？」

「オレはそう思ってる」

返ってきた答えに、内心でせせら笑った。

厄介なのは風だけのクセをして、大口をたたいたモノだ。夜津季はそう思ったのである。

「国家というのは、ドコも同じモノだと思わないか。バンデット」
「同じ？」

「ああ。国民は、庭に押し込められた鎖付きの犬と同然だ。決められた敷地の中で暮らして、必ず何かによって束縛されてるんだからな」

「かもしれないな」

理想は三十分間の時間稼ぎだが、そんな大議論をしてれば、袋小路に隠れている和泉と空に追っ手が掛かる。

ならば、今の能力、アルミの粉塵を生み出すという能力で、夜津季は決着を着ける他無い。

「だが鎖に縛られた犬でも、飼い主が暴力を振るえば、ある程度反撃出来る。噛みつく事もできるし、引つ掻く事もできる」

「やられた事があるのか？」

「吠えられた事ならあるな、噛まれた事は無いが。以来犬嫌いだ」
軽口を叩いているが、内心は夜津季も男も同じだった。

どうやって相手を無力化するか。ただのそれだけ。

「お前が目指してる理想は、そんな犬から歯牙を奪う事に他ならない」

「飼い主を噛む犬は、駄犬だろう」

「借金を作ってばかりの夫を罵る妻はダメ女で、教師に計算間違い

を指摘する子供は不良だな」

「……」

男が黙り込んだ。夜津季も同様に黙り込む。

少なくとも、夜津季は既に、男を倒す為の算段を終えていた。

「その理屈はおかしい」

「だろうな」

男の言葉に、軽く笑う。笑いながら、夜津季は地面を蹴った。

あちこちで、ガガツ、と夜津季が地を蹴る音が鳴る。

だが、明らかに音が多過ぎる。右手で音がしたかと思えば、次の瞬間には左手で音が鳴り、かと思えば次はずっと向こう……。

（フェイントを、混ぜてるのか？）

男は勘ぐるが、依然夜津季は姿を現さない。

ザツ

これまでとは違う音。男は鋭く視線を動かし、音を辿った。

建物の影、誰かがいる。夜津季だ。

「攪乱かくらんできると思ったのか!？」

夜津季は、地を駆け、ステップを交えながら、五メートル程の距離を詰める。

かなり速い。直線的ではないから、単純に突っ込んでくるよりも時間は掛かっているが、スピード自体は凄まじい。

だが男も、その程度では怯まない。二度の翼獲りを行っている、これが初陣ではないのだ。

迫り来る夜津季に、男は能力を発動する。

ゴウツ!

燃え盛る、炎の剣。ドイツの巨大な両手剣ツヴァイハンダー程もある、巨大な剣だった。

それが夜津季に向けられる。

「死ねエツ! 紅蓮の夜津季!」

夜津季が最後の一步で間合いを詰める瞬間、男は剣を放とうとした。

だが。

夜津季はこの期に及んで、ニイ、と口端をつり上げた。

瞬間。

ザラ……

気付いた。気付けた。

後ろだ。男の後ろから、夜津季が用意したトラップが迫っている。振り向く。アルミの粉塵で形作られた槍が、迫っていた。

（摩擦で、貫くつもりか！）

炎で対処すれば、爆発する。

密閉された空間ではないのだから、爆発しないまでも、炎に包まれるのは男の方だ。

「チィッ……！」

ならば、風だった。

楽なイメージだ。吹きすさぶ風、その事象をストレートにイメー

ジして、叫ぶ。

「薙ぎ払え！」

暴風が吹き乱れた。

大翼でもたらされる風は、それに比例して凄まじい勢いで乱れる。秒速四〇メートルを軽く超える風。それは、小翼程度の能力で制御されたアルミの粉塵を、容易く彼方へと吹き飛ばし、霧散させた。「ハッハッ、簡単じゃないか！ こうすれば、お前の粉塵如き、完全に……！」

そう、封じる事ができただろう。

男の顔面に迫り来るモノが、粉塵程度の質量の存在だったなら。

ゴッ！

だが、迫ったのは粉塵ではなく、滑空術を用いる夜津季の蹴撃。暴風では止められないソレは、男の顔面を鋭く抉った。

「ぐ、ほっ……！」

鼻頭が折られた。

堪らず後ずさるが、夜津季は既にそこで待機していた。

バキッ！！

「がアッ！？」

容赦なく首を蹴り抜いた。嫌な音が鳴る。

男は無様に顔面をアスファルトに叩き付け、それでも気絶せず、もがこうとしたが。

トドメを刺すべく、夜津季が足を振り上げていた。踵を、垂直に振り下ろす。

ゴガッ！

鈍い音が複数重なった後、男は完全に沈黙した。

「体術はあまり好きじゃないんだが。このご時世、そうも言ってもらえないんでな」

そうは言うが、拳よりも攻撃力に優れる足を使い、連続して攻撃したのだから、多少の心得はあるだろう。

コートについた粉塵を軽く払いつつ、夜津季は踵を返した。

「またな、バンデット。次は殺す価値ぐらい身につけて、オレに挑んで来いよ」

ぶっきらぼうに言葉を残して、そのまま男を放って行こうとした、その時だった。

目の前に、影がさす。

見上げた。大男が、そこに立っていた。二メートルはあろうかという、巨漢。

更に巨漢の背後には、幾つもの鉄の斧が浮かんでいる。いや、振り下ろされる寸前だった。

流石に、反応出来なかった。

（死ぬ？）

簡単な問いを、脳裏に問いかける事でしか、反応できなかった……。

そこへ、だ。

バヂィッ！！

空気を貫き裂く朱い槍が、突っ込んできた。

朱槍は合計で九閃。二閃が外れ、四閃が斧を破壊し、三閃が巨漢を貫いた。

巨漢はすぐさま、白眼を向いた。グラリと巨体が揺らぎ、後ろに倒れ込む。

まるで、何が起きたかわからない様に。

「これは……」

見覚えのある、朱槍だった。

第二章 「紅蓮と朱色」 1

1

少女だった。

夜津季のぱさついた黒髪とは違って、ツヤのある黒髪を腰まで伸ばし、背中の中頃で結んでいる。

勝ち気な瞳、それ程切れ長ではない目を、きつくつり上がらせている。

鼻はスラリと高く、唇はつぶらで、頬はこけている様にも見えるし、ふつくらしている様にも見える。

背中には、赤に限りなく近いオレンジ色の羽根を、六枚背負っていた。

「穂波……」

その少女を、夜津季は知っていた。

ほなみゆの穂波結乃という名の少女だった。

歳は十六、夜津季とは同じ年であり、また夜津季が学校に通っていた頃の同級生。更に言えば、現在の仕事仲間であった。

「やああつきいいー……?」

ツカツカと歩み寄り、おどろおどろしく声を掛けてくる。

若干、その様子にびくつきながらも、夜津季は腰を持ち上げた。

「よ、よお、穂波」

「よお、じゃないわよこの馬鹿ッ!」

まともに交わした言葉の最初が、罵りだった。

ハハハ、と夜津季は苦笑する。

「何一人倒したぐらいで油断してんのよ、らしくないわね! あんた、それでも紅蓮の夜津季な訳!？」

「面目無い、まさか増援が来るとは思ってたくなくてな……」

「検問ができてんだから、増援ぐらい幾らでも来るわよ、馬鹿」

酷い言われように、苦笑しかできない。下手に逆らえば、罵詈雑言の応酬になりそうな勢いだったからだ。

フンッ、と鼻息を鳴らした後、穂波は腕を組む。

「つて、うわ……」

だがすぐに、夜津季の脇に倒れている男を見て、身をよじった。

驚くのも無理は無かった。気を失っているとは言え、血反吐を吐いて顔面はかなり流血している男だ。見ていて気持ちの良いモノではない。

「それ、生きてるの……?」

「殺しちゃいない。尤も、コイツの部下はどうなったかオレにもわからんが……」

答えながら、夜津季は道路を見やった。

アスファルトの表面は凍り付いていて、炎の跡は見られない。

それと同様、側に居た筈の検問を行っていた人間達の姿は、跡形も無かった。

夜津季を奇襲した巨漢は、黒い羽根だ。そもそもあそこにはいなかった人間である。

「そう……」

それを聞いた穂波が、力なく呟く。

「あんまり無茶しないでよ、やつきー。あんたがどんな覚悟で臨んでるのか、知らない訳じゃないけど……」

きつくつり上がっていた目が、悲しげに歪んでいた。

「同級生が人殺しをするのは、嫌な気持ちにしかないよ」

「……すまん」

罵っていた時と、投げかけられた優しさのギャップに、夜津季は戸惑った。

顔を俯け、ぶっくらばうに謝る。それでも落ち着かなくて、頭を少しさすった。

穂波のこういう顔を見るのは、初めてじゃないが、それでも反則的な魅力だった。

「心配掛けさせて、悪かったな。助けてもらっただけだから、そう付け加えた。」

「し、心配なんてしてないわよッ！　こっちに来たのは、単に爆発が起きたからで……！」

すると、どうだ。穂波の頬に朱が差し、慌てて取り繕った。

「オレが爆発に巻き込まれたか心配で、駆けつけてくれたのか？　嬉しいな」

「ち、違うー……！」

その様子が面白くて、夜津季が言葉を続けると、とうとう彼女の頬は真っ赤に染まった。

純粹に、それが可愛らしく思えた。

いつも夜津季に向ける厳しさ。時折見せる悲しげな姿と、ごくたまに見せてくれる優しさ。それに夜津季がいじると、可愛いらしい反応を返してくれる。その穂波を、夜津季は特別に思っていた。

面白さをかみ殺した苦笑を浮かべる夜津季。そんな夜津季を見て、急いで穂波は話題を変えた。

「そ、それよりも、保護対象よ！　和泉さんと空ちゃん、大丈夫なんでしょうね！？」

「　そうだったな」

言われて、夜津季も気が付いた様だった。

笑顔が静かに消えて、無表情になる。夜津季の、仕事の顔だった。増援が来ているという事は、無事な可能性が随分低いな」

「やっぱり、翼持ち一人じゃ護衛と奪還は無理だった？」

「オレの手ばかりだ。言い訳する気は無い」

悲観主義でも楽観主義でもない夜津季は、ただ冷静に分析していた。

その夜津季の仕事仲間である穂波も、また彼に影響されて、ある程度冷静だ。

そっ、と軽く答えて、穂波は踵を返した。続いて夜津季も地を蹴って、二〇〇メートルを駆けた。

できれば無事であつて欲しいが……。

「やっぱり、やられたか」

袋小路に、二人の姿は無かった。

念の為、奥と手前の袋小路も探してみたが、やはり和泉と空の、

二人の姿は無い。

それどころか、ジープすらも無くなっていた。

「連れ去られちゃった？」

「いや、その割にはレッカー跡が無い。戦闘した跡も無いし、逃げたか、或いは脅されたか」

「どっちにしても、保護対象と同伴者の人が消息不明つてのは、痛恨ね」

「だな」

ハア、と大きく夜津季はため息をついた。

苦々しく顔を歪めて、穂波を見やる。その夜津季を見て、穂波はキツと目をつり上げた。

「"まちる"は出張だし、"藍ちゃん"は休み。"どー君"は戦力外なんだから、アンタとあたしでやるしか無いわ」

二人には、三人の仲間がいた。

四人、夜津季と穂波、まちると藍という二人が主に仕事をこなしていた。

どー君という人間と、また複数の大人達がサポートして、仕事として成り立たせている。

この集団を、^{スリーエー}IIIAと言う。名目上は自警団であるが、仕事内容は傭兵のソレに近い。

空の父親からの依頼で、和泉と一緒に空を助け出すというのが、IIIAの仕事だ。

「悪い、穂波。尻ぬぐいに付き合わせる事になりそうだ」

仕事を失敗に追い込んだのは、夜津季の致命的なミスだった。

頭を下げる夜津季に、穂波はため息を隠さない。

「別にいいわよ。厄介事なんて、一年前でもう慣れちゃってるんだ

から」

穂波は、気心知れた相手だった。

一年前までは、同じ小学校と中学校に通っていた、幼馴染みの一人。

そして今は、数多くの死線を共にくぐり抜けた、信頼する仕事仲間の人だ。

「それにね」

穂波は人差し指で、夜津季の胸板を小突いた。

「一年前から、あたし達は一蓮托生じゃない。違う？」

う、と思わず夜津季は息を呑んだ。精一杯恥ずかしさを押し隠して、口を開く。

「一蓮托生、女子に言われると最高の響きだな」

「ちよ、そんな意味で受け取るなー！」

夜津季の精一杯の軽口に、またも穂波は可愛らしく頬を染め、夜津季をばかばかと叩いた。

軽く、片腕で夜津季は防御しながらも、地面を見て、二人が何処に行ったのかを打算していた。

第二章 「紅蓮と朱色」 2

2

「紅蓮の、夜津季？」

友人の娘である空を抱きかかえ、和泉は目の前にいる人間達を観察した。

ここにいるのは三人だが、外にはもつと部下がいた。

右手のソファーに腰掛けた一人目。六四に髪を分けているキザな男。今の言葉を呟いたのも、この男である。

中央のソファーに腰掛ける二人目。セミロングの髪を、真ん中で分けた女性だ。顔立ちが大人びているので、とりあえず二十は超えているだろう。

女性のすぐ脇で肘掛け椅子に座っている三人目。老人だった。

男が背中に、白い五〇センチ程の羽根を四枚生やしていて、女性は桃色の羽根を二枚生やしているが、老人には当然羽根が生えてない。四十歳以上である証拠だ。

「厄介な男の名前が出ましたね」

真ん中の女性が呟く。心地の良い、ウィスパーボイスだった。

「紅蓮の夜津季と言えば、この辺りでは一番有名な翼持ちですなあ」

それに老人が答える。老人と言っても、容姿は老紳士に近く、また声色もしわがれておらず、毅然とした強さが残っていた。

「炎の槍を使ったという話もあれば、鉄の雨を降らせたという話もあるし、電気を使ったという話もある。それ故に、異名がそのコートに由来するという、稀な男」

「敵に回せば、厄介ですぞ」

なかなか、夜津季は有名だった。和泉からしてみれば、大人びた所のある子供にしか見えなかったが。

老紳士の促しを受けて、コクリと女性は頷く。それから老紳士が

言った。

「和泉さん、と言ったかな。我々は、貴方とその子に危害を加えるつもりはありません」

確かにその様だった。

ここは既に老紳士達の手の中。だがそこに和泉が居るのは、女性に逃走を促されたからだ。

彼女の仲間とは思えない翼持ちが、幾らか集まってきている最中でもあった。

だから彼女の指示に従った。そして現状、危害らしい危害は加えられていない。

「私も、危害を加えられないなら、貴方達に逆らうつもりは無い。けれど、できればすぐにこの子を親元に帰したいんだが……」

「それは、できない」

「何故？」

断じた男に問い返す。

「今、外はバンデットグループが警戒網を構築している所だ。特徴とジープは割れてる訳だから、そこへ飛び込むと命の保証はできない」

「そんな……」

「警戒網が解かれるまで、ここに留まっていた方が良いでしょうな」
厄介な話になっていた。

大体にして、と和泉にも思う所がある。

「貴方達は、バンデットグループじゃないんですか？」

見た所、二人の翼は単一色だった。

老人に至っては、翼を奪う必要すら無いし、そもそも奪えるのかどうかもわからない。

そんな人間達が何故、周囲をバンデットグループで包囲される様な場所に、いるのか。

「儂等はですな。内政要員ですじゃ」

「内政、要員？」

「ええ。バンデットグループ達の下で、翼を奪われた人々を統括するグループなんです」

和泉は首を傾げた。

「じゃあ、バンデットグループの配下……？」

「そうかも知れませんが、そうでないかも知れません」

更に首を傾げる。

言っている意味が、どうもわからなくなってきた。

「僕等はですな。彼等の考え方には、基本的に賛同しておらんのですじゃ。しかし、こうしてここにいる以上、彼等の下で働かざるを得ません」

「思想的には反対、でも現実的には恭順せざるを得ない。そういう立場なんです」

成程、理屈は通っていた。しかし、それならば、と思う事もある。

「離反しないんですか？」

「残念ながら、私達は素人だから……」

「素人？」

「紅蓮の夜津季や、バンデットの様に、戦闘に対する心得が無いんだ。僕達には」

「僕などは、和泉さんとやらと殆ど変わりませんしな」

和泉、答えに詰まる。

夜津季は、凄まじい戦闘能力を有していた。

粉塵爆発なんてとんでもない事をしかして、一瞬にして五人の翼持ちを倒してしまった。一般人が相手なら、一方的な虐殺が行える程の戦闘能力の持ち主。

そんな夜津季と、対等に戦う様な連中がいたとして、そんな連中と拳を交える事ができるのか？

できない、戦える訳が無い。それが、和泉の出した答えだった。

「ここの辺りは電波も停止させられておりましてな。残念な事に、電話も繋がりません」

「だから、紅蓮の夜津季が迎えに来るか、或いは安全になるまで、辛抱して欲しいんです」

「そっちのお嬢ちゃんには、辛いかも知れないが……」

選択肢は一つしか無かった。

三人の申し出が罠だとして、その罠を回避する術はあるだろうか？

また、三人が素人ではなく玄人だったとして、和泉に逆らう術はあるか？

協力を仰がず単独で、翼持ちの中でも血の気の多い相手から、逃げ切れるだろうか？

「わかりました」

答えは、全てNO。突きつけられた選択肢を、甘受する他無かった。

和泉は空を見やる。

空は既に泣き疲れて、和泉の腕の中で眠っていた。

（この子だけは、逃がさないとな）

この子の両親である、友人夫婦の顔を思い浮かべながら、和泉は覚悟を決めたのだった。

第二章 「紅蓮と朱色」 3

3

一方で、夜津季達も和泉の搜索に当たっていた。

楽な話ではない。夜津季が派手に暴れたせいで、戦闘員らしき翼持ちがあちこち走り回っている。その中での搜索なのだ。

「まるでヴァーサス百人刑事だな」

「そんな気楽なモンじゃないでしょ、馬鹿」

軽口を叩くと、すぐさま穂波から突っ込みが入る。

袋小路を走り、建物の陰を移動し、人目をかいくぐって、どうにか搜索を続行しているが、一向に状況は好転していない。

時折出会う翼無しの人に対して、バンデットの様な喋り口でジープについて聴取するのが、精一杯だった。

それでも、大体の方向が推測できるだけで、確実な情報は何一つとして入ってこない。

「こっちは二人、相手は百人どころの話じゃないんだから」

更に言えば、前提条件すらも不利だった。

制限時間も無い中、設定目標をクリアするまで、「コンフリット」任務完遂は無い。

「あんたがもう少し楽な恰好してりゃねえ。この季節に真っ赤なコートとか……」

穂波はジトリと夜津季の恰好を睨み付けた。

夜津季との付き合いが長い穂波だが、夜津季がこの恰好をし出したのは一年前からの話。見慣れたとは言え、異質さを感じなくなる程ではない。

「元々潜入任務じゃなかったからなあ」

「目立ってしょうがないったらありやしないわね」

「強襲任務はそっちの方が役に立つのさ」

「名前が売れてるから、相手に隙ができるって？」

「それもあるけど、単純な服の中だと一番防御力高いし」

試しに穂波は軽く殴ってみるが、確かに、ちつとも効いた気配が無い。

短いデニムパンツにＴシャツ、上からジャケットという出で立ちの穂波とは、防御力は格段に違う筈だ。

「とは言え、腹減った……」

コンクリートの壁にもたれ掛かる夜津季。

穂波が腕時計を見ている。午後の一時を指していた。

夜津季が出て行ったのが十一時前で、朝ご飯を食べたのは穂波が起きるずっと前だ。

その上、戦闘を三つもこなしている。空を救出する時と、爆発を起こした時と、あの男を倒した時の三つだ。

「まあ、お腹減っても仕方ないか」

「何か携帯食持ってるか？」

「ううん、持ってない」

という事は、現地調達だった。二人は通りを見渡す。

飲食店らしき店は、四軒もあった。ただしどれも寂れてて、営業中どころか運営しているのか怪しい。

コンビニは無い。大通りから外れた、小さな通りだから、飲食店はあってもコンビニは無かった。

「あ、あそこ開いてるんじゃない？」

穂波が、四つある飲食店の内の一つを指さした。

和食料理店。どこか賑やかな雰囲気漂う店であり、いわゆる定食屋の空気ではない。

確かにのれんが綺麗に掛かっている。電気は点いてなさそうだが、他の店と比べて手入れはされていた。

「行ってみるか」

夜津季が先導し、引き戸式の扉をくぐって、中を見やった。

一人の壮年の男性が一人、カウンター向こうの厨房にいた。

「　　らっしやいませ」

無愛想に、男性は出迎える。

訝しげに二人を見やっていた。

「おじさん、この辺りで緑色のジープ、見なかったかな？」

だからとりあえず、表向きの質問から入る。

答えはどうでも良かった。

「さあ、見なかったね」

「そうかい。じゃあ、飯食べさせてもらえるかな？　営業、してるんだよな？」

「あいよ」

ぶっきらぼうに答え、男性は手を洗い始める。

その間に、二人はカウンター席に座った。

「えっと、メニューは……」

席に着いた穂波が、カウンターの上を探す。だがメニューは何処にも無かった。

「すまないね、お客さん。うちで出せるのは、ざる蕎麦ぐらいなんだ」

「ざる蕎麦？」

はて、と夜津季が首を傾げる。

「蕎麦粉と調味料ぐらいしか仕入れできてないんだ。何せ、流通から何から、バンデットの奴らが抑えてるんでね」

「ああ……」

言われて、夜津季は納得した。

この街は、バンデットグループの支配下にある。

政府機関、自治政府ではなく、単なる武装組織がトップなのだ。物品の流通等、ともに機能している筈がなかった。

「じゃあ、ざる蕎麦お願いします。それで良いな？」

「うん、お願いします」

「あいよ」

男性はコンロに火を点けて、鍋を温める。

それから、カウンターの下に手を突っ込んで、蕎麦を二玉取り出した。こんな状況であるものの、麵そのモノはちゃんと事前に作っている様だ。

「そう言やあ、お客さん達」

後はお湯が沸騰するのを待つだけ。だからか、男性は話しかけてきた。

「お二人、バンデットグループの人かい？」

「……」

答えにくい質問だった。

話を聞かなければ、多分簡単にそうだと答えていただろうが……。穂波は夜津季を見やっている。話を任せた、という事だろう。

「今は、ですね」

「今は？」

夜津季の言葉に、男性は眉をひそめる。

「バイトです。あちこち行ったり来たりして、お金稼いで暮らしているんで」

「そんな事、できるのかい？」

「戦闘要員じゃありませんから」

肩を竦めて、夜津季は言う。

横で、穂波はハラハラしていた。上手い言い訳だとは思わなかったのだ。

「まあ良いや。私は、翼の事なんてまるでわからないしね」

だが、男性も深く追求する事は無かった。ホッと胸をなで下ろす穂波。

「お二人さん、学校は？」

余程暇なのか、男性はまたも話題を振ってきた。
面倒くさくなり、穂波は黙り込む。

「去年まで中学に通ってましたが、翼事変以来ドコにも」

「そうかい」

辛気くさそうに、男性はため息をついた。

「嫌な世の中だね。子供が元気に学校通ってる方が、大人は安心するんだが……」

「こつちには学校あるんですか？」

「無いよ。若いヤツは、全員働いたり、翼使ったりで、年寄り連中も教える事はしないんだ。そっち、って言うか、ここ以外の街にはあるのかい？」

ふむ、と夜津季は唸る。

「西の街にはありますよ。通ってるヤツも多いみたいですが、教える人達は現役教師よりも、定年退職した人の方が多いです。教師免許を持ってない人も珍しくないですよ」

「そうかあ」

お湯が沸騰したらしく、ボコツ、という音がした。ボコボコ、と音が続く。

それを確かめて、男性は鍋に蕎麦を入れて、軽くかき混ぜる。

左手の菜箸ですつとかき混ぜながら、空いている右手で皿を用意する。

「一人で、お店やってるんですか？」

その様子を見て、穂波が声を掛ける。

「ああ。元々独り身でね、バイトを雇って切り盛りしてたんだが。そのバイトも、最近はバンドットグループに取られて、結局私一人だけになったんだ」

「大変でしょう？」

夜津季が問う。

「客が来ないから、大変とまではいかないね。少し難儀なだけだ」
すぐに男性は蕎麦を取り出して、ザルで軽く水切りをし、湯がく用意した皿に、素手で盛りつける。

素早く、カウンターのすぐ手前に置いてあるツボに手を伸ばし、小さな茶碗につゆを入れていく。

後はきざみ海苔を軽く振って、わさびを盛りつけ、完成した。完成品が二人に差し出される。

「どうぞ」

言われて、受け取る二人。

「いただきます」

備え付けられた割り箸を手にとって、夜津季は一礼した。
ずるずる、と軽くすする。

「生のお蕎麦なんて、久しぶりだな……」

感慨深げに、穂波が呟く。

確かに言われてみれば、その通りだった。

カップ麺ですら、ここ数ヶ月食べていない。国外国内の生産ラインがストップして、それ以来手に入っていないからだ。

「逆に私は、蕎麦ぐらいしか食うモノが無いんだがね。普段何を食べてるんだい？」

「時によりけりです。保存食の時もあれば、自炊食の時もあります」
嘘だった。

殆ど自炊食で、能力を使って耕した畑等で取れる野菜を使い、また突貫工事で作った養鶏場等で肉や卵やを自給している。

とは言え、そこまで言う根無し草の様に思われないので、都合良く嘘をついたのである。

「食べたいモンが食べられないってのは、嫌な世の中だな」

ハア、と物憂げに、男性はため息をつく。カウンターの向こうで、椅子に座った。

「バンデットグループは、元の世界に戻すとか言ってますが？」

「ハンツ、信用できるものかね」

男性は吐き捨てる様に言い放つ。

「ヤツ等、自分達を保守本流だなんて自称してやがる。どこが、つてな話だ。お客さん、政治はわかるかね？」

「一応わかりますよ。こっちは社会のテスト、確か四〇点切ってたと思いますけど」

「グフツ……！」

唐突にテストの点数をバラされて、穂波は咳き込んだ。

憎々しげに夜津季を睨み付けるが、夜津季は知らんぷりを決め込む。

「以前の時代に戻すから、回帰派なんだとき。それで保守本流を名乗ってる」

「バンデットグループは、幹部が随分若いみたいですからね」

「ああそうだ。若いから、保守つてのが何かわかつちやいない。保守は昔ながらなんじゃなく、少しずつ前に進む事なんだつてのを、アイツ等わかつちやいないんだ」

随分かみ砕いた言い方だった。

それでも、話がわかる人間にしかわからない言い方だが。

「話じゃ、政府公認の方針だそうだ」

「政府が？」

しかし、次の言葉には穂波も驚いて顔を上げた。

夜津季も驚いて目を見開いたが、男性はそんな驚く程の事じゃない、と切つて捨てる。

「政府なんてもう形骸化してるし、政府つてのが」とのさま（永田町）「なんだか、」おやくにん（霞ヶ関）「なんだかもわからない。我が身可愛いジジイ共が勝手に言ってる事かも知れないしねえ」

「バンデットグループが嘘を言ってる可能性は？」

「それもある。だから信じるヤツなんてドコにもいないんだよ」
成る程、と夜津季は唸った。

蕎麦をすすって、既に半分程を平らげていた。

「なーにが回帰派だ。ファシズム、帝国主義も良いトコだ」
ハンツ、と鼻を鳴らす店主。

内心で同意しつつも、ならば、と夜津季は口を開く。

「じゃあ逃げれば良いんじゃないですか？ 検問も一時的なモノだし、幾らでも抜けられるでしょう？」

「まあね。私も、何度か逃げようとしたさ」

少し寂しそうに、店内を見やった。

「思い出もあるが、でも命やら誇りやら、色々賭ける程の店じゃない」

い。でもな、できれば手放したくない店でもある」

その気持ちは、夜津季にも理解できた。

できれば手放したくない思い出というのは、夜津季にとって、
殺人”と同義だった。

「わかりますよ、その気持ち」

殺すも致し方なし、という場合は多々ある。

できれば殺したくない、程度の倫理観と感情もある。

だが普段は理を取らせてもらう。その程度の打算は持ち合わせていた。

「それでね。嬉しい事に、出て行かないでも良いかも知れない、って思えるぐらいのね。小さな希望が、この街にはあるんだよ」

「希望？」

神妙な面持ちで、夜津季を見守っていた穂波が聞き返した。

おつ、と元気よく男性は答える。

「加台^{かたい}さんに、琴葉^{ことば}さん、それに言霊寺^{ごんりょうじ}さんの三人さ」

夜津季は若干薄くなったつゆをすすす。

「加台さんと琴葉さんは翼持ちで、言霊寺さんは元県議会議員のジイさんなんだがね。三人とも、バンデットグループを嫌ってる。けど三人とも優秀だからって、バンデット達も下手に手出しできなくて、ここら辺の自治を全部任されてるんだよ」

「バンデットグループの下にいるのに？」

「おう。それが三人の偉い所さ」

まるで我が事のように、男性は胸を張る。

「翼持ちの中には、三人を慕う人間も多いんだ。そうやってね。敵だらけの中で、敵を味方に付けて、少しでも敵の勢いを削ぐとしてらっしゃるんだよ、三人は」

嬉々として話す男性。それを見て、内心で夜津季は呟く。

（理想主義者か）

蔑みと、羨望とが混じり合った気持ちだった。

どうにも夜津季は、その理想主義というのが好きになれなかった。

美味しい事だけ言って、できなかった時の事を考えていない様な、そんな感じがするからだ。

だが、そんな事はおくびにも出さず、如何にも感心した様に息を吐いた。

「あーっと、こんなの、バイトの人に言ったら不味かったかね……」しかし、そこで気が付いたのか、男性は気まずそうに声を上げる。遅すぎだと思いつつも、ニコリと夜津季は微笑んだ。

「いやいや、別に良いですよ。オレだって、バンデットグループに賛同してる訳じゃないですし。密告する程、義理立てするつもりは毛頭無いんで」

「そ、そうかい？　なら良いんだがね」

最後に、つゆに僅かに残った蕎麦のカスをつまんで、夜津季は食事を終えた。

随分喋りながら食べていたせいか、穂波よりも遅かった。

食事前と同じ様に、ごちそうさまでした、と一礼する。

「で、どする？」

それを見て穂波が話題を振る。その間に、男性が二人の皿を下げた。

「一応探せとは言われてるけど、別にオレ達じゃなくても良いだろ。今日の事よりも、明日の事だ」

平然と嘘を幾つも並び立てる。

探せ、なんて言われてないし、自分達以外が探してる、訳が無いし、明日の事よりも今日、和泉と空を探す事に一生懸命の筈。

言う事全て、大嘘だ。これには流石の穂波も苦笑した。

「すみません。さっき話してた三人の人がドコに居るか、教えてくれませんか？」

「え、行くのかい？」

「さっきの話が本当なら、バンデットに着くよりもそっちの三人に着いた方が、後々得みたいなんで」

よく回る舌だった。

男性は、しばらく悩んだ様子だったが、しかし頭を一度振ると、作業を中断して、懷から名刺を取り出した。

「これ、持っていきなさい。私の名刺だがね、飲食店経営だからか、多分三人は私の事知ってる筈だ。そしたら、一応推薦程度にはなるんじゃないかね」

「　そうですか。ありがとうございます」

夜津季が名刺を受け取ったが、ソレをすぐに穂波の方へと渡した。その代わりに、財布を取り出して代金を支払う。こんな時代でも、通貨は価値を持っているのだ。

そして、男性は店先に出て、指さしながらどう行けば良いか教えてくれた。

何の事は無い。国道沿いに出たらそのまま真っ直ぐ、という事だった。

適当にお礼をした後、夜津季と穂波はすぐにそちらへと向かった。

第二章 「紅蓮と朱色」 4

4

騒がしかった。

付近のバンデットグループを束ねる司令部、元三橋財閥の本社ビルのロビーだと言うのに、静けさの欠片も無い。人間があちこちを慌ただしく走り回っている。

”彼”が帰ってきたにしては、出迎える気配が欠片も無いし、何か問題でも起きてるのかと思っただが、どこかで煙が上がってる気配も無い。

「すみません」

適当に、そこらを走り回る人間の一人を呼び止めた。

「何だ!？」

呼び止められた男は苛立たしげに振り返るが、同時に絶句した。振り返った先にいたのは、彼。一人の少年。

穏やかな顔をしている。糸目ながら中性的な顔立ちで、微笑んだ表情がその魅力を際立たせた。

髪は黒いが、しかし染めているのか。メッシュの様に灰色のラインをつけていて、傍目から見ると異様な輝きを放っている。

それに、スーツ姿だ。だが上着の裾が異様に長く、四方に分かれている。色は黒。

「い、伊岸^{いぎし}参謀長!？」

伊岸^{いぎし}善人。この辺りのバンデットグループを統括する、ヴェノムと呼ばれるグループの幹部である男だった。

名前と雰囲気は、何とも優しげな男だが。

背中には、四色の中翼が生えている事からもわかる様に、極悪人だ。

「どうか、したんですか? 随分と騒がしい様ですけど」

柔らかい喋り口。

子供が十は年上の大人に話しかける時の様な、そんな喋り口。だがあまりにも、場違いだった。それが異様さを醸しだし、威圧感として男にのし掛かる。

「そ、それが、今日捕まえたばかりの、搾取対象に逃げられまして

……」

「何人ですか？」

「一人、です」

「一人」

小さく呟いた。

柔らかく微笑んでいた顔が、一瞬無表情になる。

それを見て、男は小さく息を呑んだ。声にならない悲鳴となる。

「たった一人逃げ出したぐらいで、この騒ぎですか？ 余程、希少な翼持ちだったんですか？」

「い、いえ。逃げ出した対象自体は、小翼の桃色五枚羽根です。役立つ程度で、そこまで気に掛ける程の事では……」

「じゃあ……」

静かに、伊岸は口を開く。

「何でこんな騒ぎに、なってるんです？」

ゆっくりとした口調で、あまり大きな声でないのに、騒がしい口ビ―にシツカリと響いた。

ざわつきが、段々と収まってくる。

「救出、しに来た人間が、いまして……」

男も、喋るので精一杯だった。

「それで？」

短い問いを返されただけで、肩を跳ね上がらせる。

「その人間の為に、総出で、対処している所なんです」

「その人間というのは？」

ゴクリ、と生唾を飲み込み、男は答える。

「紅蓮の夜津季です」

瞬間、空気が凍った。ざわつきが収まり、完全に場が沈黙した。全ての視線が伊岸に集中する。

伊岸の目は、驚愕に見開かれていた。

「へえ」

酷く冷たい声が、場にいる人間達の背筋を撫でる。

「ヤツが、ここに乗り込んで来てる？」

それは続けられる。堪らず、男は背筋を伸ばした。

「せ、正確には、対象の救出の為、です！ 対象は一時夜津季に奪還されたものの、どうやら何者かが対象を連れ去ったらしく、夜津季は再度の奪還の為に我々の勢力圏に潜伏しているとの事でして！」

「君達が連れ去ったんじゃないんですか？」

「差し向けた追討部隊は、何者かによって殲滅されていました！」

「ふうん……」

顎に手をやって考え込む。

その間、周りの人間達は直立不動の体勢を守っていた。

「まあ、相手が夜津季なら仕方ないですよ。僕も、かつて夜津季には負けてますからね」

「はッ」

「だから」

ニイ、と口端をつり上げて、伊岸は目一杯見開いた。

狂気に染まった表情。

「今度は、殺さなくちゃね」

その口から、狂気の言葉が紡ぎ出される。

それからスッ、と軽く目をなぞり、口をなぞる。すると、伊岸の表情は元に戻っていた。

「僕達の勢力圏で、君達に察知されずに、尚かつ夜津季からも逃げおおせているとなりますと、あの三人しかいないでしょうね」

「三人？ まさかッ、言霊寺のジジイ達が！？」

うん、と軽く伊岸は頷く。

「彼等は飼い殺しにしてあるんですけど、どうやらそれに気付いて

ないぐらい、間抜けな駄犬だったみたいですね」

「どうしましようか、参謀長殿」

「今搜索に当たっている部隊を、明日の明朝までに彼等の本拠地を包囲する様に配置して下さい」

「了解しました！」

答えて、男は走って行く。

なので伊岸は別の女性を捕まえる。

「すみません、貴方は狼煙のろしの準備をお願いします」

「狼煙、ですか？」

「そうです。そうすれば、潜ませていた人員が呼応してくれますから」

「はっ」

女性も走っていった。

見送って、また、伊岸は一人の、同い年ぐらいの少年を捕まえる。

背中には赤い羽根が生えていた。

「貴方は、炎の能力者ですよね？」

「は、はい」

「じゃあお手伝いをお願いします。僕に着いてきて下さい」

「はッ」

短く少年は答えるが、一体何を求められているのか、わからない様だった。

だから伊岸は、ニコリと微笑む。

「戦争に、火は必要不可欠ですから」

料理には何が必要かを説く様な気軽さで、伊岸は語る。

少年は、恐ろしかった。僅か一年で、この街を、こんな世界にした張本人である、この伊岸が。

第三章 「山吹色」 1

1

加台、琴葉の二人は戦々恐々としていた。

報せを受け駆けつけた2人の前に現れたのは、真つ赤なコートを纏^{まと}った少年と、その傍らにいる六枚もの中翼を持つ少女。

それに対して、加台と琴葉の周りにいる人間は、殆どが翼無し。僅かな翼持ちも、戦闘員ではなかった。

戦闘員は今、目の前の少年の搜索に駆り出されているのだから。

「ここに……」

夜津季が、小さく呟く。

オホン、と一つ咳払いをして、言い直す。

「預かってもらっている二人と車を、引き取りに来ました。渡して下さい」

夜津季の視界の端には、緑色のジープが駐めてあった。

ここは神社の境内である。駐車スペースはあまり広くなく、この境内にあるのはジープと、あとはミニバンが一台だった。

他は、人がひしめいている。凡そ三十人程度だろう。

「明石二八、はの一五・六四。ナンバープレートも一致してます」

懐から携帯電話を取り出して、穂波はディスプレイに映っている写真を見せた。

緑のジープのナンバープレートだ。一致している。

「加台さん」

琴葉が、そっと加台に囁いた。

「ここは大人しく、彼等に従った方が良いでしょう」

「だが、琴葉。そうすれば、バンデット共に目をつけられるぞ」

「元々匿った時点で、それは覚悟の上。今ここで争うより、バンデット達に言い訳を考える方が平和的に解決出来ます」

「それはそうだが」

チラリ、と加台は夜津季を見やった。

まだ年端もいかない少年だ。顔立ちにもあどけなさが残っている。一年前、翼事変が起こる以前ならば、この人数で囲まずとも、加台一人だけで追い返せそうな少年だ。

「加台さん、吞まれてる」

その加台を、琴葉が咎めた。

言われて気が付いた。覇気に吞まれた訳でも、相手の凄味に吞まれた訳でもなかったが、しかし確実に雰囲気には吞まれていた。

相手があの恐ろしい翼持ち、紅蓮の夜津季だとは思わず、ただの少年だと思っでしまっていた。そんな雰囲気には、吞まれていたのだ。思い直し、夜津季を見据える加台。それを見て、ニイ、と夜津季がほくそ笑んだ。吞まれていた、証拠だった。

「食えない男だ」

吐き捨てる様に言いながら、加台は一步前に進み出た。

「わかった、要求に応じる。しばし待っていてくれ、二人を連れてくる」

「よろしくお願いします。そうすれば、オレ達は何もせずに立ち去りますんで」

言つと、夜津季はポケットに手をつ込み、加台はその横を通つて、隣にある市民会館へと駆けていった。

小さく、夜津季がため息をつく。

「夜津季、君」

その夜津季に、琴葉が声を掛けた。何かと思い、夜津季と穂波が見やる。

「よければ、本殿の方へどうぞ」

「別に気を遣ってもらわなくても、良いんですが」

「いえ、外にいられると、バンデットグループの人達に見られちゃうから」

「ああー……」

言われて、夜津季と穂波は境内の外を見やった。

曲がりくねった道に、生い茂った竹林と、池があるから、余り気にしなかったが。

それでも夜津季の場合、真っ赤なコートを着ているという姿を見られるだけで、アウトなのだ。

故に、ぶつきらばうに、夜津季は琴葉へと歩み寄った。後ろに穂波が続く。

その二人を引き連れて、琴葉は神社の本殿へと入っていった。すれ違う翼無しの人々を見て、夜津季と穂波はギョツとする。

「妖精って言うんだ」

それに気付いた琴葉が説明した。

翼無しの人々の肩に、小さな女の子が座っていたのだ。

小さいは、身長的な意味合いではない。体格的な意味合いだ。

最小で掌サイズ、最大では三歳児程度の身長に達する、女の子達だ。

確かにその妖精という名称が似つかわしく、背中に翼が生えているのも相まって、随分とメルヘンな姿に見える。

「私と加台さんの能力を使って、命を吹き込んだ翼」

「あれが、翼だって？」

しかもそれが、翼からできていると言うのだから、驚きだった。

まじまじと見てしまったが、嫌な顔をされたので、仕方なく視線を琴葉へと移す。

「加台さんは、人間の様に動く木製の人形を作る事ができて、私は物体に永続的に意思を持たせる事ができる。そうやって作った意思持つ人形に、翼を移植して、妖精を生み出しているの」

「木製人形って、非生命体じゃないんですか？」

「だから、妖精達は元の翼の持ち主から、あまり遠くへはいけない。精々、三メートルぐらい」

「そんな馬鹿な……」

穂波は思わず、声を上げたが、隣の夜津季を見やると、口をつぐ

んだ。

夜津季は眉をひそめて見返す。

「何だ？」

「べつつに。翼事変前に、あんたが言つてた事を思い出しただけ」
ああ、と夜津季は思い出した様に呟いた。それから苦笑を浮かべ、その時の言葉を紡ぐ。

「翼なんて生えてる時点で、ファンタジーもメルヘンも糞食らえ、だったか？」

「そつ。そうやってあんたは、真っ先に能力が使える様になって、あの時先頭に立って戦つたんだからね」

「そうだったな」

懐かしい話だと思つた。

この一年間、随分と戦闘に日を費やしてきたからか、平和だった時代が懐かしい。たつた一年の事なのだが。

「戦闘、私はあまり好きじゃないな」

すると、琴葉がそつと囁いた。丁度、本殿に到着した頃だった。見回してみると、翼無しが大勢いる。

妖精も肩に乗っていないし、皆一様に、怯えた様子で夜津季と穂波を見やっていた。

「怖いんですか？」

顔をしかめ、穂波が琴葉に尋ねた。琴葉は、苦く笑う。

「私達は臆病者なんだ。だから、夜津季君達とは違う方法でしか、生きていけない」

反論しようとして、穂波が口を開いた。

「まあ誰にでもできたら、オレなんて用無しですからね」
が、夜津季はそれを遮った。

何で、と穂波が夜津季を睨むが、その穂波の肩を押して、夜津季は隅へ追いやる。そして、そこに腰を下ろしたのだった。

琴葉はすぐに、お茶を取ってくるからと、二人から離れていく。
「皆それぞれ考え方があるんだから、な？ 戦いたくない奴にまで、

戦えとは言えないだろ？」

「だけど……」

「大人にも事情がある。子供は子供なりに、理解しなきゃな」
言われて、穂波は俯く。

子供に過ぎない自分達が、今を生きる為に必死に戦っているのに……。

大人達は、勝手に生きている。それが、穂波は気に入らなかった。
(それに……)
内心で呟く。

(あんたがこんなに変わったのって、大人達のせいじゃん)
幼馴染みであるが故に、穂波は夜津季の事を知っている。

悪ガキだった頃から、温厚になって調整役になった頃、それに……。

今の夜津季に、変わり始めた時。周りの全てが変わってしまったって、今の様な時代になってしまったあの時。

「先生達が守れないから、あんたが皆を守って。警察が手出しできないから、あんたが代わりに彼奴等を倒して。そうやって、大人達ができなかったから、今のあんたは……」

夜津季を、上目遣いで見上げる。眉をひそめ、口を尖らせていた。それに対し、どう言ったら良いのか。夜津季は困ってる様な感じだった。

「私達を担ってくれる、リーダーになってるんじゃない」

柄じゃないクセに、と小さく付け足して。

夜津季はぶつきらばうに足を放り出す。

「オレはリーダーなんかじゃない。それに難しい話だけど、オレは今の生活、嫌いじゃないぞ」

ほら、と穂波は思う。

困ったら必要最低限、当たり障りの無い事しか言わないのが、今の夜津季だった。それでいて、その当たり障りの無い言葉の奥に、幾つもの複雑な思いを内包している。

その悩みを聞く事ができるのは、穂波じゃない。だから、悲しくなつて顔を俯けた。

「そんな顔するなよ」

それを見て、夜津季が肩を小突く。

「オレはハーレム気分だぜ？ 男子二人に、女子三人。しかも、どー君は非戦闘員で、任務に赴くのはオレと女子しか居ないんだからさ」

精一杯の軽口。それを見て、穂波は最初は苦笑を浮かべたものの、すぐに勝ち気そうに笑った。

「なーに言つてんのよ。どー君に男としての魅力で、勝つてる部分あんの？」

「ぐ……」

言われて、夜津季は口をつぐんだ。

うえだ とうじ
植田道治。通称どー君。夜津季の親友の一人だ。

中学在席中、学年成績は最高で四位。同級生からの信望篤く、生徒会長を務めていた。

更に更に、一八〇センチを優に超える長身で、スラリとした優男。しかも運動神経は良く、体力テストでは学年でも三位ぐらいだったとか……。

「相手が悪すぎるッ」

「そんな男子と一緒になんだから、自覚しときなさい」

「チエツ」

心底悔しそくに夜津季は舌打ちする。

それがどうにも可笑しくて、穂波は笑っていた。

（ここだけの話だけど、人間的な魅力なら、やっきーだって負けてないよ？）

内心で、そう付け加えながら。

第三章 「山吹色」 2

2

それから数分して、和泉がやってきた。空と一緒に、手を繋いで。
「すみませんでした」

ギョツとした。全員だ。

夜津季は和泉がやってきたのを見ると、開口一番に謝り、そしてそのまま土下座したのだ。頭をシツカリと、床につけて。

謝られた和泉と空も、その二人を連れてきた加台も、横で見守っていた穂波と琴葉も、全員が驚いていた。

「オレの不注意が招いた事態でした。運良く心清らかな方々に保護していただけでしたが、言い訳できないミスです」

「い、いや、そうかも、知れないが……」

しかし、自分より随分年下の子供に土下座されるというのは、和泉としても如何ともし難い状況だった。

あわあわと焦りながら、頭を上げさせるので精一杯だ。

「今度は絶対に、無事に帰します。仲間とも合流しましたし、どうかもう一度チャンスを下さい」

「わた、私もだな。君以外に護衛してもらえる人間が居ないから、頼むしかないんだが」

「お願いします」

融通の利かない男だった。

いや、実際のところ夜津季は余程融通の利く男なのだが、それを無理矢理曲げている。

だからこそ、その誠意の程がうかがい知れた。夜津季という人間をよく知らない、加台と琴葉でさえ。

「わかった。チャンスをもう一度やる。今度こそ、無傷で、街まで送ってくれ」

それを和泉も理解した時、精一杯厳格な口調で、そう依頼した。
「ありがとうございます」

けじめを付けた夜津季が、立ち上がった。そして踵を返して、本殿を後にする。

見送る加台と琴葉には、その夜津季の後ろ姿が先程よりもずっと、大きく見えた。

「アレが、紅蓮の夜津季という男か」

3

伊岸は自らの部屋に戻っていた。三橋本社ビルの元社長室、現在は支部長室となっている。

部屋には伊岸ともう一人、男がいた。

「よろしかったのですか」

男が、尋ねる。

前髪を長く伸ばしていて、バンダナでそれをかき上げている男だった。

スーツを着ているが、目の前にいる伊岸とは違って、市販の紺色のビジネススーツだ。

「人質を見逃しても、ですか？」

伊岸が問い返し、男を見据える。

男は、伊岸の腹心だった。工藤という名字らしいが、名前はよく覚えていない。伊岸の隣にいてサポートをしている。支部から離れている間も伊岸に従っていた。

「夜津季との接触を許した時点で、こちらの負けですよ。負けた以上、相手が望むモノを差し出すのは当然の事です」

「当地の人員では迎撃できませんか」

伊岸自身が工藤の名前を覚えていない様な間柄なので、工藤の態度も事務的そのもの。

仕事だから。それ以上の忠誠心は無い様に、伊岸には思えた。

「できませんよ。相手は紅蓮の夜津季に、そのガールフレンドも一緒なんですから」

「ガールフレンド？」

男から、珍しく感情的な問いが返ってくる。

ニヤリと、伊岸は笑った。何とも嬉しげで、同時に蔑みの色も感じられた。

「こう言ったら彼女は怒るでしょうけどね。でも、彼女は彼の事を信頼してるし、彼もまた彼女の事を信頼している。それに彼女と彼の相性は、抜群だ。ガールフレンドという呼称が、最も適切だと思うんですよ」

それに、と伊岸は付け加える。

「夜津季はね、彼女の事が好きなんですよ」

「そうなんですか？」

「昔の話ですけどね」

伊岸は、昔を思い出す。

夜津季が自然と視線で彼女を追う様を、仲間内で冷やかしていた、当時を。一年前よりも更に昔、三年前の話だ。

「ですから、彼女と一緒にいる夜津季は、正直僕でも適わないと思うんですよ」

「参謀長でもですか」

「だって、そうでしょう？ オモチャで遊んでいる子供に、ケンカを仕掛ける様なモノです」

ふむ、と工藤は言いながらも、軽く首を傾げた。

「ある程度の根性があれば、子供でも本気で親に刃向かうと思います。そんな次元で、夜津季と戦う事になるでしょう。全くバカげた話ではないですか。ヴェノムは子供の相手をする組織ではありません、であるならば夜津季との戦いは避けるべきです」

伊岸の説明で、工藤も理解した様だ。そこで話題を変えた。

「しかし、夜津季の討伐という目的でないのならば、神社と会館の包囲網に関して、大義名分が薄れると思います」

「そうでもありません」

だが、それすらも伊岸は断じた。

何故、と工藤が問いかけると、また面白そうに伊岸は笑った。

「売国奴みたいな扱いをすれば良いんです。こちらに何人と被害が出てるのに、それを報告せず、あまつさえ見逃した、とね」

「感情で大義名分を仕立て上げますか」

「手足は思い通り動いてくれたら良いんですよ。それ以上は求めません」

バンデッドの結びつきは古典的だ。

狭い範囲の保証のし合いである。ヴェノム上層部はバンデッド達に生活の保障をし、バンデッド達は上の言う通りの働きを保証する。そしてチンピラ達は、バンデッドに生活を保障してもらい、代わりにバンデッドの為に働く。

そういった短絡的な繋がりは、今の様な混乱の時代には蔓延^{はんえん}り易かった。

そんな連中は感情的にもなり易い。些細な理由が大義名分に成り得るのだ。

「四時間以内に拠点を制圧しましょう。下手に長引いて、夜津季が出張ってきたら厄介です」

「了解しました」

4

夜津季一行はその日の夕方に、検問を突破した。

琴葉達から検問の穴を聞いて、夜津季もコートを脱いだ為に、何の問題も無く到達できたのだ。

「色々あったけど、無事に帰る事ができて良かった。助かったよ、穂波ちゃん」

運転を続けながら和泉が言う。

助手席に穂波と空が座り、夜津季は荷台に座っている。

「いえ、こちらの不手際のせいで、申し訳ありませんでした」

「夜津季がいなければ、空はさらわれたままだった。君がいなければ、私達はあそこにいたままだった。不手際を抜きに、感謝している」

和泉の口調が柔らかくなっている。帰れるとわかって、安心したのだろう。

穂波は素直に礼を受け取りつつ、前を見やった。

「うん？」

迫るレストラン跡の前に、三人の男女が立っているのが見えた。いずれも若い。夜津季や穂波と同じ年ぐらいだった。

「あ、皆だ」

気付いた穂波が声を上げる。

それを聞いて、和泉が車をレストラン跡の前で止めた。

車から和泉、穂波、空、夜津季は下りる。三人の男女が手を上げ、その四人を出迎えた。

「おかえり、やっきー」

夜津季に声を掛けてきたのは男子。

一八〇を超える長身の、優男。植田道治、本人だ。

「まちに、藍ちゃんも」

穂波が嬉しそうに、女子の方に駆け寄る。

かなぎ まち神風真知。女子からはまちると呼ばれている。

茶色がかった髪をポニーテールにまとめ、肩の辺りまで伸ばしている。

つぶらな瞳と整った顔立ちの女子だ。

もう一人は速海藍。はやみ うん

量の多い黒髪はストレートで、腰まである。

身長が一五〇に届かない小柄な女子だが、出ている所は出ていて、顔立ちも可愛い。

「お疲れ様です。それと申し訳ありませんでした、和泉さん」

夜津季が真知に事情を報告すると、その真知が和泉に頭を下げた。

大人びた雰囲気のある女子で、夜津季達五人を実質的にまとめているのも、彼女だった。道治はそのサポート役といった所。であるから、代表としての謝罪だった。

「ごめんね、空ちゃん」

一方で、道治は空にも謝った。

こういう男だった。夜津季よりも心優しく、自分よりも他人を気に掛ける事ができる人格者なのだ。

「いえ、あの、助けてもらってありがとうございました」

「それは、僕じゃなくてあのお兄ちゃんと、お姉ちゃんに言つと良いよ」

照れながら礼を言う空を、道治はそうなだめた。

道治が示したのは、夜津季と穂波の二人。

空は少し迷ったらしいが、二人の元へ駆け寄ると、ぎこちなく頭を下げた。

「助けてくれて、ありがとうございました」

「いや、こつちもごめんな。怖い思いをさせちゃって」

「次はちゃんと守るからね」

「はい」

それだけ言うと、再び空は和泉の元へ走っていった。

和泉も真知との話を終え、ジープに乗り込む。ジープに乗せていたコートを返してもらい、それから、和泉達はジープで自分達の街へと戻っていった。

ジープを見送り、夜津季はため息をつく。

「疲れた一日だった……」

呟き、夜津季はレストラン跡の段差に腰を下ろした。

「でしょうね」

言ったのは真知だが、夜津季の所にやってきたのは藍だった。よく見ると、脇に何かを抱えている。

「これ、ジュース。よく冷えてるよ」

魔法瓶だった。夜津季にコップを渡すと、それに注いでくれた。

藍は気の利く女子だ。

親しさという点では、穂波と良い勝負だが、より夜津季自身と氣質が近いなと思うのは、この藍だった。

「ありがとう、速海」

「どういたしまして」

ニコリと笑って言う藍に、夜津季は苦い笑みを返した。

口を含む。甘い。スポーツドリンクのソレだ。喉が湿り、体を潤わせていく心地良い甘みだった。

「流石に、奪還任務は厳しかったかしら？」

一息吐いたところで、真知が声を掛けてくる。道治は穂波と何か話している様だった。

「そうだな。己の未熟さを痛感させられた」

「かもね。でもやってる事は正しい事よ。だから、これからもやってもらうからね」

「それは、構わない」

IIIAはその為の組織だった。

正しい事を少しでもやる。それで何かが守られれば良い。そういう理念の組織だ。

それを商売にしてるのは、真知や道治とその親御さん達だ。正しい事をやる為の状況を整えてくれている。

そのお陰で、夜津季達はこの一年を生きてこられた。

「ただ成功率の問題だ。突入が二人は厳しい。退路の確保も含めて、三人が必要だ」

「うん、わかった。それは覚えておくよ」

話し終わり、夜津季はコップを呷った。

それから腰を上げ、立ち上がる。ふと後ろの空を見上げた。バンデット達の街の空だ。

「……？」

眉をひそめる。そしてよく見る。

別に何とは無い空だったが、何か嫌な予感がした。胸の奥にベッ

タリとこびりつき、拭おうにも張り付いてなかなかはがれそうになり、ソレ。

「どうしたの、やつきー？」

拳動不審とも取れる夜津季の態度に、真知が声を掛ける。

「どうにも、嫌な予感がする」

「やつきーの嫌な予感かぁ」

真知は夜津季をよく知っている。もう八年の付き合いだ。

藍程、夜津季の事を気遣えないし、穂波程、夜津季と親しくはしていない。だが経験なら一番だ。

その経験が告げている。夜津季の悪い予感は、必ずと言って良いぐらい、当たる。

「一年前からそうだったもんね」

言つと、真知は道治に向き直った。

「どう君、オーダー。キャンプセッター式持ってきて、今日はここで野宿」

「野宿つて、どういう事？」

穂波が首を傾げる。

それを見て、真知は皮肉気な笑みを浮かべた。

「やつきーの嫌な予感だつてさ」

「うわ……」

「それは不味いね」

穂波が顔をしかめ、道治も苦い笑みを浮かべる。

「オレどんな扱いなんだろ……」

「ちゃんと信頼してるよ」

言い出した張本人であるが、落ち込む夜津季を、その背中を撫でる事で藍がなだめた。

第三章 「山吹色」 3

5

IIIIAの面々は、野宿に慣れていた。

IIIIAは中学時代の同級生の集まりだが、言い換えれば、翼事変を闘い抜いた戦友達の集まりでもある。

既に役割分担は決める必要すら無く、それぞれの役割をこなす。

「よいこらせー」

「やつきー、こつちも！」

「あいあい」

テントの組み立ては、夜津季と穂波の仕事だ。

真知と道治は料理。真知はリーダーも兼ねている為に、専門は道治だった。

藍は遊撃と言う名の、雑用をやる。ただ雑用は、最初はやる事が多いが、やがて時間が経つとやる事は無くなる。準備が終わると、後は片付けまでやる事が無いからだ。

「これで終わり、っと」

ガンッ

夜津季が地面に鉄杭を打ち付けた。能力によるモノだった。アスファルトを完全に砕いて、地面にまで達している。

それで、テントの組み立ては終わりである。

「お疲れ、やつきー」

「おう、お疲れ」

夜津季と穂波は軽くタッチを交わして互いを労った。

藍は知っている。夜津季が穂波を好きだった時期がある事を。

「オレ達肉体労働ばつかなー……」

「私達二人とも、料理やれって言われても無理だからね」

夜津季は”そういう話”をしたがらない。だからそんな話を聞い

た時、少し意外に思った。

夜津季は割と真面目で、悪ぶった事をする同級生をいさめる立場だった。それはヴェノムに与さず、IIIAに参加している事からも明らかだ。

だから穂波の様な、明るく破天荒な女子は好みじゃないと思っていた。

「オレは本分だから良いけど、穂波は良いのか？」

「得意じゃないけど、それ以外できないしね」

同時に、夜津季の恋が実らない事も知っていた。

穂波には当時好きな人がいて、一方で夜津季とは犬猿の仲に他ならなかった。穂波が一方的に嫌っていた。

夜津季も当事者だから、それをわかってただろうと思う。

告白したという話を聞く事も無く、次に夜津季の話を聞いた時は、好きな人はいない、というモノだった。

「オレと一緒になら、何でもできる、と」

「そ、そんなんじゃないってば！」

だから、藍は穂波の事が好きじゃなかった。

仲の良さそうな二人を見ると、齒がゆくて仕方がないのだ。

「おい、ご飯できたよー」

そこで道治の声がかかった。

気付けば良い匂いが漂っていた。この匂いは、カレーだ。

圧力鍋で炊いたご飯を真知がよそって、道治がカレーを注いでいる。

「やれやれ、ようやく飯だ」

歩きながら、藍は夜津季の背中を見やった。

羽根の数が五枚まで減っていた。いや正確には、五枚まで消えている、だろうか。

羽根は規定の使用回数を超えると、消え始めるのだ。更に翼の大きさに、それが異なる。

大翼は二枚で四回、最大でも四枚で九回なのに対して、小翼は四

枚で十六回、八枚だと三十八回分になる。

ただしこれは、翼獲りと違って寝れば回復するモノだ。

「結構減ってるね」

「ん？」

藍が声を掛ける。

藍の知る限り、夜津季の翼がここまで数を減らしたのは、IIII
Aを結成して初めての事だった。

「昔程じゃない」

「昔は戦争だったじゃない……」

しかし、夜津季はとことん冷静だ。

デッドライン（死線）を超えなければ、どうってこと無いと思っ
ている。

そして夜津季は誰よりも、デッドラインに長く深く立っていて、
わかっている。そんな夜津季からしてみれば、藍の心配は早く浅い
のだ。

「明日は戦争になる」

夜津季の言葉に、場の空気が凍り付く。

皆の動きがピタリと止まり、それぞれの視線が虚空を彷徨う。

「そりやまた、穏やかじゃないわね」

真知が口を開いた。それからようやく、皆の視線が夜津季に向い
た。

「物事にはタイミングってモノがある。タイミングは、チャンス時機と、スケジュー時局だ。前後と流れを見ればある程度予想はつく」

「やつきーが乗り込んだのが？」

「やつきーに暴れられて、見逃したのが、でしょ？」

夜津季の言葉に真知が問い返すが、答えたのは藍だった。

藍は今日の一連の流れを、夜津季から聞いていた。

「そうだ」

夜津季が頷く。

夜津季の考えを最も理解し、察する事ができるのは、藍だった。

先程から黙りを決め込んでいる穂波と道治は、こういう物騒な話に混ざる事が少ない。

「上の思い通りに動かない連中がいる。そういうヤツは大抵上に無いモノを持つてる、今回の場合は人望だ」

「ヴェノムは古典的な恐怖支配。最も嫌うのは、支配力の低下。例えば相容れない存在なんかだと、内包も連携もできないで反発されるだけだから、厄介？」

「そうだな」

こうなると夜津季と藍の独壇場だった。二人の間だけで、話がドンドンと進んでいく。

真知達が翼事変を生き抜けたのは、夜津季と藍の二人がいたからと言っても過言ではない。

二人で話し合って作戦を決めて、それぞれに別れてそれぞれの役目をこなして、時折抜群の連携を見せる。

その作戦と行動は、現在の”秩序”の一部として引き継がれている程だ。少なくとも、IIIAの面々はそう感じていた。

「大義名分がある。身内に犠牲者が出ている状況で、敵を見逃した。軍なら処刑モノだ」

「マフィアなら、粛正モノって訳だ」

「そうだとオレは踏んでいる」

「私も同感」

その二人の考えが一致した。

という事は、IIIAとしては夜津季と藍の方針で動くしか無い。

「どう君」

「僕が行くよ」

面倒くさそうに真知が呼びかけたが、道治はそれを遮った。苦い笑みを浮かべている。

「だとしたら、明日は僕は用無しだ。雑用は僕がするから、戦力の皆は休んだ方が良い」

言って、道治は自分の翼を指さした。

中翼の白色二枚羽根だ。その能力は精神安定、目眩まし程度の実用性しか無い。

対して、真知は大翼の赤色三枚羽根、藍は大翼の水色二枚羽根だ。どちらも威力が非常に高く、翼事変の時にも大いに活躍している。「どう君に任せておけよ、神風。メンツはあるだろうが、どう君の顔もそれなりに利く」

「そ、それでも僕はＩＥＩＡの片腕だからね。右腕はやつき、左腕は僕だ。リーダー殿の左団扇は、左腕である僕の仕事だ」

真知は苦笑する。

道治は心優しい好青年だったが、夜津季に感化されたのか、最近はこの物言いが多くなっていた。

「オーケー、どう君に任せるわ。でもオーダーは私が指定する、良い？」

「頼むよ」

夜津季と藍のお陰で、真知はヴェノムに反抗する武装組織の、まとめ役みたいなモノをしていた。

柄じゃない、と嫌がった夜津季の代わりに、そして夜津季の活躍で周りから担ぎ上げられた立場だった。

担ぎ上げられた事でできた繋がり握るのは、あくまで真知だ。

夜津季でも道治でも大人おとなでもなく、真知しかいなかった。

「B2B、IKA、三翼会さんよくかいに要請して。目標は東、目的は難民保護。戦闘分担はそれぞれ半分ずつ。どうしても言うなら、三翼会だけ全員ルートの確保に回して」

「ラジャツ、行ってくるよ」

答えるとすぐさま、道治は近くに駐めてあった車に乗り込み、駐車場を後にした。ヴェノムを追い返して数ヶ月で車の操縦を覚えたのは、道治一人だ。

藍はその道治が乗った車を見送り、道治によそってもらった力レバーに口をつけた。

「冷たい」

話しすぎたのか、既に冷えていた。

「丁度良いよ。冷たいのが一番美味い」

自分でよそった夜津季が、一口頬張りながら近くにやってきた。続いて穂波、真知とが寄ってくる。

「作戦会議はご飯の後ね」

「そりゃそーよ。今日は朝ご飯から昼ご飯まで、仕事づくめだったんだから」

夜津季が段差に腰を下ろす。穂波と真知は別の段差に腰を下ろした。

だから、藍は夜津季の隣に座った。

「明日はオレと組むぞ、速海」

「え……」

するとその声を掛けられた。夜津季に振り向く。

夜津季は気にせず、普通にカレーを食べているだけ。

「仕事？」

「いや、単にお前と組んだ方がやりやすい、と思ったただだよ」
内心で、朴念仁、と藍は罵った。

夜津季はどうにも盲目的だ。見えてる所は誰よりも見えてるが、見えない所はとにかく見えてない。

ただ……。

「うん、わかった」

そんな夜津季を、藍は嫌いになれなかった。

第四章 「黒金色」 1

1

翌朝午前五時十分。

道治の車と一緒に、三台のミニバンが駐車場に入った。

まず道治が下りる。他に誰もいないらしく道治一人、すぐに夜津季達の元へ駆け寄ってくる。

それから、右手ミニバンのドアが開いた。三人の子供と大人が一人、降りてくる。

奥。四人の子供と大人が二人。

手前。六人が降りた。全員が子供である。

「よ、昨日はご苦労さん。やつきー」

右手のミニバンから降りた少年、桜塚義二郎さくらづか よしじろうが声を掛けてきた。

右手のミニバンから降りてきた面々は、B2Bのメンバーだ。IIAと同じ様なグループである。

義二郎が何の躊躇いも無く夜津季をあだ名で呼ぶだけあり、夜津季と同じ中学出身のメンツが揃っている。付き添いの大人は、桜塚の兄だ。夜津季も面識がある。

「突然の招集で、悪いな」

「良いつて良いつて。一年前は随分助けてもらったしな」

桜塚とは気心の知れた仲だった。以前からも仲が良かったが、翼事変以来更に仲が良くなった。

桜塚と握手を交わした後、次の面々へ夜津季は向き直った。

「景気良さそうで何より、夜津季さん」

奥のミニバンから降りてきた、三翼会だった。

リーダーは瀬藤歩せとう あゆみという女子だ。夜津季の直接の知り合いではないが、穂波や真知とは親しい間柄らしい。

三翼会とは、翼事変の後にIIIAを設立してから、自警団仲間

として手を組んだ。戦友ではない。

「三グループも集めるなんて、夜津季さんの他にはできないでしょう」

「良い景気も悪い景気も無いぞ、瀬藤。ヴェノムがいる限り、経済が無い」

「それもそうですね」

夜津季と瀬藤は同じ年だが、瀬藤は一方的に敬語を使う。

真知は、瀬藤の事を「頭の良い子だから」と言っていた。実際話している、夜津季もそう思う事が多かった。

話が終わると三翼会の面々は、穂波と真知の方へと向かっていった。

続いて。

「良い夜明けだな、紅蓮」

I K Aの連中だった。

口を開いたのは、リーダーである葉宮永太^{はみや えいた}。

茶色い髪、夜津季と同じほどの長さ。若干彫りが深く、男らしい顔立ち。夜津季よりも背が高く、また大柄だった。

そんな彼の言葉で、周囲の空気が一気に冷え、緊張する。

I K Aは、大人達に統括されていないグループの中では、I I I Aに次ぐ戦闘能力を持っている。そして、超が付く程の強硬派だ。

これはリーダー葉宮の姿勢による所が大きい。

「同級なのに、随分物騒な呼び方だな」

「戦争をやるんだろ。なら、馴れ合いは不要な筈だ」

戦争を生業にしている様なグループだった。

このレストラン跡辺りも、昔はヴェノムの支配下にあったが、それを奪還したのがI K Aだ。この手の専門家と言っても良い。

夜津季は少しばかりため息を吐きながらも。

「ん」

手を差し出した。

葉宮は睨む事で、それに応える。

「信頼できないヤツを、戦場に連れてく訳にはいかねえよ」

夜津季が言うと、葉宮は少し躊躇いながらも、結局は大人しく握手を交わした。

夜津季と葉宮の付き合いは深い。互いの家に行った事もある程だ。だから、友情が無い訳ではなかったのだ。ただ少し、翼事変が悪く影響してしまっただけで。

「さ、始めるか」

夜津季が言う。

事務方のリーダーは真知だが、今から戦いに赴こうと言う時には、もう夜津季がリーダーだった。皆もそれがわかっていた。

皆が集まってきてから、夜津季が説明する。ヴェノムの配下にある自治組織、それが今狙われつつある事を。

目的は、その自治組織を西へ逃がし、撤退する事だった。

「相変わらずの慈善事業だな」

説明を終えると、葉宮が吐き捨てた。

「金が役に立たない時代だからな。一番の資本は労力だ」

「それに労力は不足気味ですからね。人助けは遠回りにですが、役に立ちます」

夜津季の言葉に、瀬藤が付け加える。

「社会の事はどうだって良い。だが、オレ達が立てるのは戦場だけだ。慈善事業は勝手にしろ、オレ達は戦う側に回る」

ただ、葉宮は頭があまりよろしくない。

昔から考える事は苦手そうだったが、翼事変以来、気も短くなっていた。

「まあ待てよ、葉宮」

それを桜塚が咎める。

こちらは頭もよくキレたし、何よりも慎重だった。

「殲滅戦だぞ？ 包囲網ぐらい作ってるだろ。そこを敵に鉢合わせず逃げるなんて、無理な話だ」

「敵の数は凡そ数百、目標は百数十、こっちは十八だからな」

「……」

葉宮は黙り込み、脇にいる女子に視線を送った。
同級ではないが、夜津季とも面識があった。鈴木すすきと言う名の葉宮の幼馴染みだ。

「わかった。I K Aから三人、ルート確保に回す」
「うん、ありがとう」

鈴木鈴木の言葉に、真知が答える。

一番厄介な葉宮が片づけば、後は楽だった。
夜津季は桜塚に視線を送る。

「兄貴も戦える。兄貴と三木みきをルート確保に回して、オレと杉見すぎみは戦闘に回るよ」

「了解、ありがとう」

三木は下級生で、杉見は同級生だった。

桜塚と共に戦った事もある、戦友だ。戦力的にも信頼できる、まるで異論は無かった。

「三翼会からは敵の抑え役になる人員を、派遣する事はできません」
対して、三翼会とは一緒に戦った事は無い。

三翼会はそもそもとして、後方支援のグループだ。
結成当初の三人が全員サポート役だ。最近になって四人目が増え、ようやく戦闘がこなせるグループになったという程度。

「拠点確保と避難誘導、それでお願いします」
瀬藤の言葉に、夜津季は皆を見回した。

真知、桜塚、葉宮の三人のリーダー格はいずれも頷いた。

「良いだろう。重要な仕事だ、くれぐれもよろしく頼む」

夜津季が締める。それから、真知に視線をやった。

「夜津季と速海が戦闘、私と穂波が積極的な避難誘導に回る。良いかしら？」

「良いだろう」

「オーケー」

「承知しました」

三人のリーダーが承知する。
それで作戦会議は終わりだ。

不意に夜津季が、自らの腕時計に目をやる。時計は六時を指していた。

「時間が無い、急ぐぞ」

言い、夜津季は東へ向かって歩き出した。それに皆も続く。

車は後で使う予定のモノだ。避難誘導組が使う。夜津季達が突入して包囲網を切り開いてから、避難誘導組が目的地に向かう為の足だった。

夜津季と速海が先頭に行く。脇を固める様に、桜塚達が着いてくる。後ろは葉宮達だった。

2

午前六時三十分。

伊岸は通りの真ん中に置いたパイプ椅子に、腰を下ろしていた。そこがヴェノムの本陣だった。複数色の翼を持つバンデット達が親衛隊を気取って脇を固め、伝令やら斥候やらが絶え間なく伊岸に報告し、また伊岸が命令を出していた。

包囲網は完璧に整った。四百人の手勢が道路を塞いでおり、神社と会館から外へ出る事は、不可能だった。

こういう時は小競り合いが起きても不思議ではないのだが、そういった報告は入っていない。

「予想以上に相手は臆病みたいですな」

工藤が伊岸に言った。

「同時に、予想以上に統率が取れているんですよ」

工藤はあまり察しの良い男ではない、と伊岸は常々思っている。相手の悪い所しか見ていないのだ。

弱点を見つけるのは三流の仕事。二流は相手の長所まで見つけ、その長所に対する策を練る。一流は本能的に理解し、長所を封じて弱点を突く。

伊岸は自分を、二流だと自覚していた。

「統率の取れた相手は厄介です。行動が早いですからね」

「ヤツ等の戦力は微々たるモノです。その心配は無いでしょう」

工藤が言う様に愚鈍な弱者なら、それは完全な力モだ。

実際そういう人間も多いだろうが、上にいる人間達はそうでない。逆に言えば、上にいる人間達さえ取り除けば、後に残るのは愚鈍な弱者という事でもある。

そして、伊岸は上にいる人間達を取り除く術を、既に手配している。

「参謀長！」

そうやって思案していると、女が走ってきた。

親衛隊気取りのバンデットが必要も無いのに殺気だったが、手を上げてそれを制した。

「どうしたんですか？」

「西の包囲網で、異常が」

女の報告を聞くなり、バンデット達に混乱の色が浮かんだ。やがてどよめき出す。

やはり寄せ集めだ。伊岸が予め想定していた事態の一つに、無様に狼狽している。主君と一心同体の必要がある親衛隊には、遠く及ばない。

「詳細は？」

「不明です。ただ間違いなく、西からの侵入者かと」

「そうですね、僕もそう思います」

十中八九夜津季だろう、と伊岸は見切りをつける。そうでないとしたら、I K Aだ。

空気を読まずに突撃してくるバカは、あそこの葉宮しかない、と思っっている。

ただ、どちらにせよ厄介だった。I I I AもI K Aも精鋭だ。ここにいるバンデット達を全員向かわせても、討ち果たせるか微妙だ。

「参謀長！」

更に男がやってくる。

「西の包囲網が破れました！」

「どうやら最悪のパターンですね」

その報告でわかった。異常発生から、包囲網突破の報告までが早過ぎる。

最悪のパターンとは、I I I AとI K Aが手を組んだという事。いや、あの夜津季の事だから、どうせ他にも呼んでいるだろう。

あの面々と、伊岸の配下がぶつかり合うのは、軍隊とヤクザが戦う様なモノだ。練度、実戦経験、心構え、全てが違いすぎる。

「どうでしょうか」

しばし、伊岸は悩む。周りが何か提案しだした様だが、聞き流した。

賢明なのは、包囲を解いて小隊を編制し、遊撃させる事だろう。

「いや、しかし包囲網は解けませんね」

今包囲を解いてしまえば、言霊寺達の一団が自由になる。かと言って、包囲した状態では夜津季達に各個撃破されてしまう。

この場合最も重要なのは、言霊寺達の一団だ。これを殲滅できないければ、当初の作戦目標を達成できなかったとして士気が下がってしまう。

であるから、包囲している部隊を二つに分けて、主力が夜津季達を食い止め、もう一方はその間に言霊寺達を殲滅するのが上策だろう。

「となれば、人員を派遣して小隊として統率してもらうしか、ありませんか」

伊岸がその判断を下すと、親衛隊とやらの顔色は悪くなった。

自分達が前線に出るとなつて臆したのだろう。頭が痛くなる光景だ。

「貴方達三人は北の包囲網へ、貴方達三人は南へ向かって下さい。東の包囲網は僕と彼とで担当します」

「り、了解しました！」

それでも断つたり、逃げ出さないだけマシだと思った。

伊岸は立ち上がり、言霊寺達の討伐へ向かった。

3

「自分で招集しておいて、なんだが、凄いな。お前等」

夜津季は、今し方目の前で繰り広げられた戦闘を見て、感想を漏

らした。

桜塚の翼は、小翼の青色六枚羽根だ。能力は水散弾丸。水しぶきを弾丸の様に発射する、能力だった。

それで、敵に先制攻撃を仕掛ける。混乱している間に、中翼の赤色三枚羽根を持った杉見が、一気に切り込むのだ。

更に、別の場所では葉宮が瞬く間に敵を殲滅していた。

葉宮は大翼の黄色二枚羽根を持つ。能力は巨大な稲妻を落とす事。だから一撃落とせばそれで大抵の敵は怯み、その間に、配下の鈴木達が怯んでいる敵を駆逐するのだ。

極めつけは藍だった。

フィンガースナップを二つ鳴らす。それだけで敵は凍り付き、碎け散るのだ。通り一つを制圧するのに要した時間は、モノの数秒であつた。

「雑魚の掃除はオレ達でもできるさ」

「ただバンデット共が出てくれば、こうはいかないだろう」

桜塚も葉宮も、驕おごつていなかった。

二人とも場数は踏んでいる。死線に臨んだ事も少なくはない。

「相手はどう出てくると思う、紅蓮」

「包囲網を狭めてくると思うがね。そうやって、オレと目標とを締め上げる」

「だとしたら、まだ切り開かなきゃいけないな」

藍や杉見、それに鈴木達は夜津季達の会話には混ざろうとしなかった。

自分達のリーダーを信頼している証だ。

「B2Bは南、IKAは北でどうだ？ オレが中央から遊撃する」

「オレ達が遊撃に回った方が良くないか」

葉宮が提案した。確かに人数を考えると妥当ではある。

「戦術は数じゃなくて、戦法で決めるモンだぜ葉宮。殲滅はオレ達より火力のあるお前のが向いてるし、遊撃はお前より小回りの良いオレ達のが向いてる」

「確かに」

葉宮は納得するのを見て、もしもの時の為の救援の合図を決める。それを終えると、葉宮は北へ、桜塚は南へと散っていった。

夜津季達はこのまま東へ向かい、中央から遊撃する事になる。

「やつきー、翼の色はどうする？」

向かう途中で、藍が尋ねてきた。

確かに、あまりにも簡単に包囲網を突破できたので、夜津季はまだ翼の色の決定してすらいなかった。

「ん……。そうだな、小回りなら黄色が良いか」

「組みにくいものね、私の能力」

「別に速海に限った事じゃないけどな。神風も葉宮も一緒だ。大翼とは大抵組みにくい」

大翼はその威力故に、攻城兵器の様に扱いに困る代物なのだ。

そういうモノを運用するには、とにかく小回りが利く能力が必要だ。

幸い、夜津季はそういう能力をその場で拵^{いじ}える事ができる。

「丁度良い、葉宮もいる。アイツの能力、借りるぞ」

「悪趣味」

口端をつり上げる夜津季を見て、藍がこぼす。

夜津季の能力の最も強い所は、そこだった。

大翼、中翼、小翼問わず、既存の能力すらも真似る事ができるのだ。

「五の雷閃、縦横無尽にだ」

しかも、能力決定はあくまで想像。

つまり既存の能力があるとすれば、それをモデルに更に上回る能力を想像できる。

大翼や中翼の能力だと流石に威力は落ちるが、能力の性質はそれを補って余りあった。

オウ……

夜津季の羽根が、黄色に染まった。煌めきを放つ、黄金の黄色だ

った。

「前から思ってたけど、まるで魔術師みたい。やつきーって」

「そんな上等なモンじゃない。魔術師は、速海みたいなヤツのが似合ってる」

藍の頬が少し赤く染まった。

「奇術師、マジシャンで十分だ。オレは」

紅蓮のコートが、風ではためいた。

通りを出る。神社と会館の前だった。

「あの人達？」

藍が問いかける。

神社には、数人が即席のバリケードを作って、こちらを見やっていた。

どうやら何も知らないまま、見守っているだけの無能ではなかった様だ。

「そうだな。これなら別に、放っておいても後は神風達が……」

言って夜津季は踵を返し、他へ向かおうとした、が。

気付いた。バリケードの向こうで、何かを話してる。

「な、なあ！ あんた、紅蓮の夜津季だろ！？」

そして呼び声。

どうにも不味い事が起きていそうな、気がした。

「また悪い予感？」

「だな。どうにも事は、上手く運んでないみたいだ」

言つと、北の方で轟音が轟いた。葉宮だろう。

南の方でも歓声が上がっていた。こっちは桜塚だろうか。

「ちよつと来てくれ！ 言霊寺さん達が、大変なんだ！！」

男の言葉に、藍が夜津季を仰いだ。

「行く？」

「無視した方が良い。大変だろうが何だろうが、オレ達の世話する相手は敵だ。アイツ等の世話は神風達がする」

藍も同感の様だった。

なので藍も男達から視線を外して、夜津季と一緒に歩いていこうとする。

「埋伏してたんだよ！ 敵が中にいるんだ！！」

だがその言葉を聞いて、二人は驚き振り返った。

言った男は、本気の目をしている。そして何より、隣にいた男達は負傷していた。

昨日までは何も無かった筈なのに、だ。

「想像以上に厄介みたいだな、速海」

「私が話を聞いてみる。やっきーはとりあえず、外で様子を見て」「頼む」

遊撃は夜津季一人でも十分だろう。むしろ、夜津季の能力は遊撃向きだ。

対し藍は、遊撃には不向きだ。

故に事情の聴取は藍に任せて、夜津季はそのまま現場に残った。

口利きは無かった。すぐに藍は神社の中へ向かっていった。

「さて、オレの仕事だが……」

南の通りを見た。

流石に混戦しているらしい。歓声があちこちで上がっていて、爆発やら落雷やら倒壊やらが、忙しく起きている。

人数も戦力も、桜塚は葉宮に劣っているから、敵からの反撃もまた厳しいのだ。

北は問題無いだろう。戦争屋だけあり、あと数分もすれば制圧できそうだ。

「遊撃開始だな」

地を蹴った。

とりあえず南東の裏通りに入る。建物の間を駆け抜け、包囲網を構築している通りへと向かう。

裏通りを抜け、通りに展開している部隊の真っ直中に躍り出る。すぐ、夜津季は手をかざした。

ガアンッ！！

雷撃、五閃。

十m程上空から稲妻が五つ落ちた。周りにいた人間、五人程が倒れた。

予想以上にばらけている。群れているだけかと思ったら、意外とまともな配置だ。

そして、すぐに迎撃してくる。

「統率が取れてるのか」

翼の能力らしい炎の球が飛んできたので、高く跳躍する事で躲した。

滑空術を使用したジャンプは、高いが速い。アイザック・ニュートンが泣き出しそうな力だ。

ガアンツ！！

跳んで五閃、落とす。

ガカツ！

着地して五閃、瞬かせた。

それで、南の包囲網の端が崩れた。入り込む隙ができる。夜津季はそこに駆け込んだ。

「つと、やつきー！」

駆け込んですぐに、桜塚と鉢合わせた。

周りから攻撃が飛んできたが、互いに左手を攻撃した為、それはすぐに止んだ。

周囲から人がいなくなる。

「他は？」

「潰走してる。挟撃で混乱したか」

「だな、南は崩れた」

言葉を交わして、桜塚達をよく見た。

負傷している。桜塚は切り傷や少しの火傷がある程度だが、杉見は右腕を焼いていた。

「桜塚、杉見を連れて後退だ。北もすぐにカタがつく。東はオレと葉宮で受け持つ」

「ああすまん……。三翼会はいつ頃来そうだ？」

「もうじき来るだろ。神風が空気を読む筈だ」

タイミングは、事前には決めていなかった。そういう時は真知が適当にやる。

普通は事前に決めているのだが、今回は戦力が違い過ぎる。こちららは十数、相手は数百単位、文字通り桁違いの戦力差なのだ。

事前に決めるよりかは、柔軟に対応した方が妥当な戦力差。そう判断したから、真知に任せただ。

「ぬお！」

そこに、声。第三者。

振り返るより先に、夜津季と桜塚の体が動いた。

ドオンッ！

瞬間、背後で爆音だ。

杉見を連れて跳んだ二人は、どうにか逃げるのに間に合い、建物の影に隠れた。

「増援か？」

杉見を気遣いながら奥に隠れ、訊ねてくる桜塚の代わりに、夜津季が物影から通りを見た。

「派遣人員だな」

三人。それぞれ単一色の翼の持ち主ではない。バンデットだ。

「本当ならカッコつけて、杉見を逃がせと言いたいんだが、流石にバンデット三人に一人はキツイな」

「それでお前、一回死にかけてたからな。カッコつけて出て行つて、伊岸達に囲まれて絶体絶命のピンチだったろ？」

「ああ、そうだった。穂波っていう助っ人のお陰で助かってたな」
バンデットは、チンピラとは違う。

昨日のバンデットもそうだが、戦う術がわかってるのだ。ヴェノムはそういう人間を選んで、バンデットにしている。そういった人間がアドバンテージを持つのだから、強いに決まっていた。

思案していると、杉見が起きあがった。

「腕は使えなくとも、能力は使えるさ。リーダー、やつきー、お前等は戦え……」

「杉見……」

杉見も戦友の一人だった。

ただ、夜津季と戦場を共にした事はない。夜津季と桜塚とが戦っている後ろで、戦えない人間を守ってきた戦友だ。

「隠れてろ、杉見。軍事行動じゃないんだ、死人を出す事はない」しかし、桜塚と杉見は親友だった。

夜津季と杉見はそれ程親しくないが、夜津季が桜塚と話す時には大抵、一緒に話してる人間だった。夜津季が混じっていない時でも、桜塚は杉見と話している事が多かった。

「だが……」

「三翼会に診てもらえば、すぐに治る。数時間の戦線離脱で済むんだ、命を無駄にするな」

「わかった」

夜津季は杉見の肩を叩いた後、通りに出た。

三人いた筈のバンデットが、一人減っていた。

続いて桜塚が出てくる。

「ぐ、紅蓮のコート……」

「マジモンかよ、クソッ！」

バンデット達が景気よく驚いてくれる。

「下手な釣りだな」

「泳いでる魚に引っかける、ギャング釣りみたいなヤツだな」

「人間様にルアーだろ」

「違うない」

桜塚が苦笑した。同時、全員が構えた。

次の瞬間に、夜津季だけが跳んだ。上空、四メートル。

「なッ……！」

右手のビルの屋上。

そこにいた男が、目を見開き、驚きの声を上げていた。

「バレバレなんだよ」

ジィッ！

五閃の内、三つが男を貫いた。それで終わりだ。男は痙攣し、やがて動かなくなった。

下を見やる。霧が広がっていた。

弾幕と言っても構わない程の弾丸を、桜塚が放っていた。その水しぶきである。

水の弾丸を放ち終えた桜塚が、夜津季を見上げてくる。視線が合った。桜塚が後ずさる。

ガアンッ！！

夜津季は、霧の真っ直中へ向かって雷を落とした。

一つ。

ガアンッ！！

二つ。

ガガアンッ！！

三つだ。

五の閃きを放つ稲妻を三つ落とした。霧の中は、中々嫌な事になっているだろう。

着地する。建物の陰に入った。杉見がいる方だった。すぐに桜塚もやってきた。陰に隠れていた杉見に別状は無い。

「やれたか？」

桜塚の問いに、夜津季は首を振る。

すぐに隠れた。滅多打ちが当たったとしても、手足が少し痺れる程度だろう。

「けど、霧が水蒸気になってる、煙幕代わりには丁度良い。杉見連れて神社へ行けよ」

「そうする。一応二つ向こうまで着いてきてくれ」

「相変わらずの慎重さだな。それがお前の強みだが」

「なら、慎重に行こう。もう三つ弾幕を張る、雷一つ頼む」

「慎重過ぎる」

夜津季は苦笑を返した時にはもう、桜塚は弾幕を張っていた。桜塚は慎重だが、機敏なのだ。

仕方なく、三つ目を確認した後、雷撃を打ち込んだ。その後、桜塚と一緒に杉見の肩を担いで走った。杉見は痛そうにしていたが、仕方ない。

二つの通りを抜けた。するとまた、桜塚が口を開いた。
「ダメだ、一緒に行こう」

そこまで、敵からの反撃がまるで無かったのだ。桜塚なりにおかしいと感じたのだろう。
「そうだな」

夜津季は迷ったが、同意した。
死人を出す事はない、それに同感だったからだ。
一緒に走る。神社までは一分程の距離だった。

第四章 「黒金色」 3

3

状況は最悪と言える。

埋伏……内部にスパイが紛れ込んでいたのだ。

結末の強い組織には、こういった計略が最も辛い。味方だと思っていた人間が、敵だった。これだけで、相互の信頼関係が崩壊し、統率が乱れてしまうのだ。

「それで、状況は？」

藍は神妙な面持ちで、琴葉に訊ねた。

柱にもたれ掛かり座っている琴葉の横には、負傷した言霊寺が横たわっている。安静にしているだけらしいから、心配は無いと言う。既に桃色の翼の能力者によって治癒してもらった為、様態は安定している。琴葉もそうだ。

負傷した人間は神社の本殿に運ばれていて、それ以外の人間が境内を走り回っている。加台は境内の方で、声を張り上げている。加台も負傷している身なのだが、怪我をおして陣頭に立ち、指示を飛ばして味方を鼓舞しているのだ。

「埋伏した人間が二人、五人ばかりを人質に取って市民会館の方に立て籠もっています」

琴葉が静かに答える。

市民会館は、神社の隣にある。道路を挟んでいるものの、バリケードの内部にあるので、行き来は自由だ。

藍が市民会館を見やる。神社の境内からは、三階部分を見る事ができた。窓の向こうに、人影が確認できる。

「どうにか、助けられないものでしょうか？」

琴葉は、藍を見て訊ねてくる。が、藍は硬く首を横に振った。

「私は大翼ですから、無理です。大砲で狙撃はできません。私以外

の誰かができたとしても、周辺の被害を制御する事までは不可能です」

「そう……」

苦く顔を歪めながら、琴葉は頭を抱えた。

藍としても、その気持ちはわかる。が、同時に情けなさも覚えた。一年前、伊岸達が学校で蜂起した際の大人達の対応と、琴葉はそっくりなのだ。

戦う力は無く、ただおろおろとして、現状の打破を心待ちにしている。ただの、弱者。

藍は弱者を「悪い」とは思わないが、それでも情けなさを相殺する程ではない。

踵を返して、本殿を後にし、境内に出る。加台が指示を飛ばす横を通り抜け、道路に出た。

耳を澄ませるまでもなく、北の方から轟音が聞こえる。葉宮達、I K Aが奮闘している証拠である。ひとまずは、無事という事だろう。

「速海！」

そこで声が掛かった。見やる。

夜津季達だ。夜津季と桜塚が、杉見に肩を貸して、こちらに駆け寄ってくる。

同時、夜津季達の後方から車がやってくるのが見えた。

夜津季達も気付いて振り返る。ミニバンだ。夜津季とミニバン、ほぼ同時に神社の前で止まり、そのミニバンのドアが開いた。

開いたドアから、飛び出る様に降りる二人の人影。穂波と、真知。「グッドタイミングだ！ 神風、杉見が負傷したんだが、三翼会のヤツは来てるか！？」

「来てます、乗せて！」

桜塚の声に答えたのは、車の中から顔を出した瀬藤だった。彼女の姿を見るや、桜塚は笑みをこぼした。

瀬藤は桃色の翼の所持者で、外傷の治癒に秀でた能力の持ち主だ。

彼女の能力ならば、大抵の怪我は治ってしまう。

桜塚は杉見をミニバンに押し込んだ。一方、残った夜津季は藍から事情を聞く。

「成る程、厄介な事になってるな……」

「どうする、やつきー？」

首を傾けて訊ねる藍。それを受け、夜津季は北を見やった。

I K Aの無事を告げる轟音が、いつの間にかやんでいた。まだやんで間もない筈だ。

「ちよつと待て」

スツ、と夜津季は鼻を鳴らした。その後、回数を重ねる。

そして、自らの額を派手に叩いた。パンツ、と小さくない音が鳴る程に。

「畜生、そういう事かよ！ ヤケにアツサリしてると思ったら、これを狙ってたのか！」

してやられた、という夜津季の態度。

「どういう事？」

事情が飲み込めない藍が、慌てて説明を求めた。

「この臭いだよ！ さつきから焦げ臭いだろ？」

「それは葉宮のせいじゃ？ 葉宮は北の方にいるし、風向きは北からだから……」

言われても、藍はそう反論する。一応臭いをかいでみて、焦げ臭いのは確認したが。言った通り、葉宮の能力が起こした火事だと思う。

「夜津季！」

そこで声が掛かった。見ると、葉宮だった。駆け寄り、夜津季と藍の前で立ち止まる。

神妙な面持ち、思い切り顔をしかめ睨み付ける様に、夜津季に向き直った。

「アイツ等、大した事もせずに引き揚げた。理由は、この臭いだろ」

「この臭いはお前の能力のせいじゃないんだな？」

「ええ。私達が熾した火だけが、問題じゃない筈よ。早く対処しないと、拙いんじゃない？」

「わかつてる！」

鈴木の提案に夜津季は吼えると、すぐさまミニバンに駆け込んで桜塚を呼び出した。

「桜塚は葉宮と組んで火元を探してくれ！ 藍は神風と一緒に避難誘導を急げ！」

そして、すぐさま指示を飛ばす。桜塚は頷いたが、葉宮は怪訝そうに問い返してきた。

「お前はどうするつもりだ？」

言われて、夜津季は自らの腕時計を見やった。能力決定から、まだ20分程度。

「市民会館に立て籠もってるヤツ等を叩いて、人質を救出する」

「フンツ、お前らしい答えだ」

何ともつまらなさそうに、葉宮は吐き捨てた。

その態度に夜津季は弾ける様に葉宮へと振り返る。それを受け、

葉宮は言葉を続ける。

「あんなモノ、捨て置いたら良い。その程度の事は、お前が助けようとしている人間達もわかってる事だろうが」

「だからって見捨てられるか！」

夜津季が強く言い返した事により、場の空気が一気に重くなった。しかし、葉宮は逆にそれぐらいが丁度良いのだろう。身を乗り出して、夜津季の胸ぐらを引っ掴んだ。

「お前に余裕が無い事ぐらい、見てわかる。そんな状態で、人質奪還なんかやられて、死なれたら困るんだよ」

そしてドスの利いた葉宮の物言い。慌てて、桜塚が止めに入る。

「やめる葉宮！ 今は言い争ってる時間も惜しいんだから！」

「構うかッ！ 時間が掛かった方が、煙が上がって火元は確かめやすくなるだろうが！」

それを一喝して退け、葉宮は夜津季の額に自らの額を押しつけた。
「わかるか、紅蓮。助かる可能性にすぎるのも良いが、自らが危うくなる可能性もある事を知れ。そして切り捨てる。お前が死ねば、この同盟すらも成り立たなくなる。そうなれば、オレ達自警団はてんでバラバラの烏合の衆に成り果て、今後助かる可能性があった人間すら助からなくなるッ！」

「そんな、そんな事まで知るかよ!? オレはI I I Aのリーダーですらない、何でオレがそこまで担わなくちゃならないんだ!」

「お前が、英雄だからだろうが」

夜津季の怒号に対し、葉宮は静かに答えた。その静かさが、夜津季を冷静にさせた。冷静と言っても、少し頭が冷えたただけ。名案が浮かぶとか、そういうレベルではない。

しかし葉宮も冷静になって空気を察する余裕が生まれたのか、周囲に視線を走らせた後、夜津季の胸ぐらを掴んでいた手を離れた。

「しょーがない。私が指示を出しますッ」

事態を見かねた真知が声を上げた。

結果を見れば、夜津季も葉宮も指示を出せる状態では無くなっただけだし、事態は何一つとして進展していないのだ。今は何を置いても、事態を進展させなければならぬ。

「人質の救出には結乃と桜塚が当たって下さい。火事の方は、藍ちゃんと鈴木さんで消し止めて下さい。やっきーと葉宮は二人で頭冷やして、反省したら避難誘導の手伝い。わかった?」

言って、真知は皆を見回した。

「OK、了解だ。問題無いよな、穂波?」

「多分ね。人命最優先で行くわよ」

「わかってる」

早速それに答えたのは、穂波と桜塚の人質救出組だ。

「わかった。やってみる」

「じゃあ行ってくるから」

次には藍と鈴木的女子二人だが、彼女等は何とも淡泊な答えを残

してさっさと行ってしまった。二人とも行動が早い。

「チツ、わかったよ」

「了解だ」

それから態度の悪い、葉宮と夜津季の二人。葉宮は舌打ちまで付いてきたし、夜津季も夜津季で俯いて真知を見ようともしない。

ため息を漏らしつつも、真知も真知で避難誘導の仕事がある為、そちらに掛かる事になった。

真知が去った後、葉宮は天を仰いで内心で呟く。

（なあ、巧斗^{たくと}。お前が名を捨て”夜津季”を名乗ったのは、覚悟を決めたからじゃないのか？）

目をつむってしばし静止した後、葉宮はその場を離れ、夜津季よりも早くに避難誘導に回ったのだった。

「やつきーと葉宮って、前からあんなに仲悪かったっけ」

訊ねる穂波。

「あー、どうだっけな」

答える桜塚。

二人とも、今し方人質の救出を完了したところだ。立て籠もっていた側も火の臭いには気付いており、これがヴェノム側の仕業であると告げると、さっさと投降してしまった。結局、葉宮が言う程に危険な任務では無かったのだ。

現在は二人とも、避難誘導の方に駆り出され、誘導棒を振るっている身だった。二人に促され、避難する人々は西へ向かって歩いている。

「まあ昔もケンカするっちゃしてたけど、今みたいなんじゃないかな。今は何か、顔合わせるだけで険悪っつーか、シリアスになるっつーか、仲が良いって感じがしないし」

「でも、素に近いとは思うかな。感情つばいやつきーって、葉宮と居る時ぐらいしか見れないじゃない？」

「あー……。そう言われれば、そうかもな」

口では納得しつつも、桜塚の表情はかげった。

「葉宮が、夜津季は英雄だから、って言ってたけどよ。オレなんかからしてみれば、葉宮も英雄なんだよ。だから、英雄同士でしかわからない事ってヤツが、あるのかもな」

「英雄って言うても、やつきーはやつきーでしょ」

誘導棒を振るう手を止め、穂波は桜塚を睨み付ける。

「ダチのアンタがそんなでどうすんのよ、バ力塚」

「ひでー言い草だが、その通りだな」

表情は釈然としないが、口ではそう言う桜塚。

けれども釈然としないのは穂波も同じ事で、睨み付けたまま穂波は誘導棒を桜塚に突きつけた。

「良い？　もしもアンタの言う通り、やつきーが英雄なんだったら、アンタも英雄になってやつきーと同じ土俵に立ちなさい」

「お、オイオイオイ！　無茶言うなよ、オレにはやつきーや葉宮みたいなスゴイ力はないんだぜ！？」

慌てて反論する桜塚。だが穂波は誘導棒を桜塚の胸板に突き立てた。

「だとしても、やりなさい」

そしてキツイ一言。これには桜塚も、左の口端をつり上げて苦い表情を浮かべる事しかできない。

「じゃないと、やつきーは弱いままだから」

桜塚が口を開く事ができたのは、穂波がそう言って、桜塚の胸から誘導棒を外し、また振るい始めてからだった。

「やつきーが弱いって、どういう事だよ？　アイツは紅蓮の夜津季なんだぞ。世界でも珍しいって言われる、虹色の翼の能力者じゃないか。戦闘能力なら日本最強だって話も……」

「だとしても、アイツは”光らない”じゃない」

言われ、桜塚は時が止まったかの様にピタリと動きを止める。

それから、考え始める為に動き出した。

「アレ、そう言われれば、アイツが”光った”のって見た事が無い

？ さつきとか感情的っぱかったけど、やっぱり”光って”なかったし？」

「私はやつきが”光った”の、見た事あるけど、そんな大した回数じゃない。それも翼事変の後、全く見てない。それってつまり、アイツが弱くなってるって事でしょ？」

「いや、でも戦闘技術自体は向上してるだろ。昔より洗練されたって言うかさ」

「だとしても」

誘導棒を振るう手は止めないまま、穂波は桜塚にゆっくり向き直った。睨み付ける様に、鋭い視線を投げかけて。

「それじゃあヤツ等には勝てないのよ。バンデットには」

伊岸は、北と南の包囲網が破られた事を知ると、すぐさま全軍に撤退を命令した。この時点で、もうそうするしか無かった。

南の包囲網を形成していた人間が、伊岸の担当する東の包囲網へ雪崩れ込んできたからだ。北の包囲網は工藤が担当していた為、この様な事にはならなかったが、場は混乱し包囲網を再構築する余裕は無くなった。こうなったら、撤退しか無かった。

撤退し、態勢を立て直すべくポイントを設定する。そのポイントで、再度人員をまとめ上げた時の数は百二十。包囲網から逃げ出して四散していた人間達も、ポイントが設定されると集まりだし、最終的には二百に達した。包囲網構築にあたった兵力の半分であった。「ふざけるなアッ！」

工藤が、怒鳴る。

幹部会議だ。伊岸が配下のバンデットを集め開いたモノ。欠けたバンデットはたったの二人だ。夜津季にやられた者と、もう戻れないと逃げ出した者が一人だった。

「おいお前等、何故敵から逃げた!？」

夜津季達と鉢合わせたバンデット達を叱責する工藤。

肩を震わせ、誰も喋ろうとしない。工藤が怖い訳ではなかった。むしろ、怖いのは、その工藤の後ろでピクリともしない、伊岸だった。無言の圧力が、バンデット達を無口にさせていた。

「相手は紅蓮の夜津季と、EKA、それにシヨットガン・桜塚だ……。わかってるだろう、オレ達ヴェノムの仇敵だ! 何としても討ち果たさなければならぬ仇敵だ! それなのに、仲間がやられたと見るや敵前逃亡だと!？」

工藤が怒鳴り散らすのを、遠くで聞きながら、伊岸は思う。

（やはり、ここは日本ですね……）

戦慣れした勇敢な人間ほど仲間を助けるべく尽力するが、平和ボケした人間は、平気で仲間を見殺しにする。敵が目の前にいて追いつめられると、すぐに逃げる。

トカゲの尻尾、デコイを必然的に生み出す事はできないが、偶然にでもそれが生まれれば、平気で乗っかる。逃げるのが第一で、戦うつもりが無いから、そんな残忍な事ができる。

「しかもお前等は、仲間が逃げるのを、咎めるでもなく見送ったのか！？ ヴェノムは何だ、チンピラの集まりか！ 集まるのも勝手なら、逃げるのも勝手か！」

工藤の言う事は、一理あった。

ヴェノムはチンピラの集まりじゃない。そうである事が許されない、行政組織だ。地域を統治する必要がある。他でもない、自分達が生きる為にだ。

少しでも良い生活を。そう思って、伊岸達はヴェノムを立ち上げ、その理想に共感した人間がヴェノムの下に集った筈なのだ。にも関わらず、今日の醜態だ。

（ここまでの惨敗は、流石に初めてだな）

伊岸は思う。

伊岸自身は慢心していなかった。兵力で勝るとは言え、夜津季達の実力もわかっていた。

だから三つの策を用いて、戦いに臨んだ。

一つは埋伏だ。監視者であり毒として、潜ませていたモノだ。実際コレは上手くいっただろう。今も誰一人戻ってこない所を見ると、最終的には敵に降伏した様だが、それは大した問題ではない。埋伏していた人間からすれば、来る筈だった救助隊が来なかった状態なのだから、降伏するのも致し方ないのだ。

もう一つはバンデットを向かわせた事。指揮官であり戦力として向かわせたが、まさかここまで役立たずだとは、思っていなかった。これ自体は工藤に対しても言える事である。I K Aに敗北した時点

で、現場指揮官としては落第なのだ。

最後の一つは、火計である。包囲網を維持していれば、相手を全滅させる事ができる策だが、包囲網が先に潰されてしまったからあまり役には立たなかった。不幸中の幸いは、夜津季達がコレを消火しに回ったので、撤退中に追撃を受けなかった。追撃されていれば、二百の兵力はその半分以下にまで減じていただろう。

（全て、僕の責任か）

全て伊岸が指揮し、行った策である。人選までもだ。責任は全て伊岸にあった。

「もう良いです」

そう納得した伊岸が言うと、工藤はすぐに黙り込んだ。だが相当頭にきたのか、息を乱し、肩を揺らしている。

その怒りは尤もだ、と伊岸は思う。

「少し本部に長居し過ぎました。支部長でありながら調練を怠った、僕の責任です」

「さ、参謀長……」

肅々とした伊岸の言葉に工藤が唸る。

「支部長というのは、追認した形です。参謀長が支部長に就任したのは、本部に向かってからじゃないですか」

その通り、と内心で伊岸は頷く。

翼事変の後、三ヶ月は夜津季と小競り合いをしたが、その後、ヴェノムを組織として整える為に本部のある大阪へ向かった。

そこで参謀長という肩書き、兵庫支部長という役職を、初めてもらった。

それから今まで、大阪にいて、ヴェノムを組織として整える仕事に尽力し、ようやくその仕事が終わって兵庫支部に戻ってきたのだ。その間の留守は、代行　夜津季に殺されたバンデットに一任していた。

「死人に口なしです。実務上の責任は無くとも、道義上の責任は被る必要があります」

「……」

伊岸の言葉を聞いて、バンデット達が表情を和らげた。笑みを零す者までいる。明らかな気が緩みだ。責任は無い、それを喜んだのだろう。

思わず殺意が湧き上がる。が、バンデットは貴重な戦力だ。簡単に殺してはダメだ。代わりはいないのだから。言い聞かせ、伊岸は口を開く。

「三日間、僕が責任をもって、貴方達を調練します。それから今度は僕達バンデットが、西に攻め込みます」

「に、西にですか……」

「そうです」

部下達はざわめいたが、伊岸は何の事は無いと思っている。今まで数量で勝っていたながら、西へ攻め込んでいない方が、むしろ不思議だった。

ライフラインを整えていたならば、それでも良い。だがそうじゃない。それならば何故、西を攻めなかったのか。

大方、葉宮の単純バカに、良い様に押し込まれていたのだろう。あの勢いだけの単純バカは、夜津季よりも組みやすい相手だと言うのに。

「工藤さん、貴方も一緒をお願いします」

伊岸はバンダナの男、工藤に要請する。すぐに工藤は頷いた。

事務的だった工藤の態度が、軟化していた。恐らく今回の怒りで、伊岸と認識を共有できたのだろう。それは伊岸にとっても嬉しい事だ。認識を共有できる仲間は、いざと言う時に手足の様に働いてくれるから。

「では明日より、調練を始めます。調練から逃げる人間は、僕と工藤さんとで殺します。その覚悟がある人だけ、逃げて下さい」

最後にそう言って、部下達の顔を強張らせた後、伊岸は社長室に戻った。

第五章 「乳白色」 1

1

市民の避難は、どうかその日の夜までに完了した。徒歩で一時間という距離なので、大した混乱も無いし市民の疲労もそこそこに抑える事ができ、今回の救出作戦は大成功と言えた。

翌日になると、琴葉と言霊寺の二人も動ける様になったらしい。夜津季達が暮らす場所の自治政府の首脳と正式に会談し、市民の受け入れを承諾してもらった様だ。

こうなるともう自治政府の大人達の領分となる。これから必要な事は、衣食住の供給や労働施設の手配等という事柄なので、自警団であるIIIIAは関与する事ができない。

だからかIIIIAに下された次の仕事は、敵からの報復を警戒する様に、というモノだった。何とも曖昧な内容の仕事である。

「ちなみに、やっきーはその警戒から外れる様に」

「わかってるさ」

卵ご飯 卵と米は自治政府からの配給品である を食べながら、昨日からの推移を説明していた真知が、最後にそう言った。

夜津季も自分の状態ぐらいはわかっていた。

「一応訊くけど、様態は？」

道治が訊いてきた。道治の能力を使うか、という事だろう。

そんな風に氣遣われる理由。夜津季は、昨日の葉宮との言い合いで調子を崩してしまっていたのだ。

避難誘導が終わって帰ってきた後も寝付きが悪く、眠りが浅く、そして今は胸の内がざわついたどうしよもないのだ。

「という状態なんだが、どうだ？」

道治の能力は精神安定であるから、多少の狂乱状態ならば治癒してしまう。だから、道治も状態を訊ねたのだろうが。

「それは無理だね。僕的能力でも治せそうにない」

だろうと思い、夜津季も期待はしていなかった。

そして道治は、食器を持って浴場の方へと消えていった。

IIIAが今住んでいる場所は、銭湯だ。少し前までは小学校で集団生活をしていたが、最近になってようやくライフラインが復旧したので、特別に許可をもらって自立させてもらったのだ。

普段は大人達が、文字通り銭湯を運営している。こんなご時世だから随分と盛況だ。

その銭湯は、朝の間は夜津季達IIIAのメンバーに脱衣場が開放されている。そこで朝食を食べるのがIIIAの朝の過ごし方だった。

「さて、オレも飯を食べるか」

緑茶を呷り、夜津季は自らの朝食を用意しようと、席を立とうとした。

「はい、朝食」

立ち上がったところで、藍がそう言いお粥を差し出してきた。

卵粥だった。ホコホコと湯気を立てており、米が黄金色に染まっていた。

「速海が作ってくれたのか？」

「うん、やつきー連戦だったから」

台所は二階にある。そこまで行って、食材を調達したり料理するのは、中々骨が折れた。

「ありがとう、もらうよ」

なのでありがたく、それを受け取った。尤も、夜津季は猫舌なので、そこから五分程放置する事になるが。

藍は少し躊躇った後、夜津季の隣に座った。

「……」

こういう朝の時間は、久々だった。

いつも朝は、起きれば一番に仕事の話。誰々からの依頼、何処何処の巡回、警備。そういう話をして、準備をしてから出掛ける。

しかし今日は、普通の休日。仕事の話はもう終わって、何の準備も無い。これから出掛ける予定も無い。

そんな時間に対して、夜津季は少し居心地悪さの様なモノを覚えた。

「神風、皆の今日の予定は？」

「だから訊いてみた。」

任務中はリーダーを務める夜津季だが、事務に関しては真知と道治に全て任せていて、事務関係のリーダーは真知だ。その為、普段は夜津季が訊ねるよりも早くに真知や道治から話を切り出される。夜津季から訊ねるのはかなり珍しかった。

「今日は皆休みだよ」

「え？」

真知からの返答に、夜津季は吃驚する。

「皆疲れてるだろうから、ってお父さん達がね。仕事肩代わりしてくれてるの」

返ってきた答えを、意外だと思った。

IIIIAの大人は多くない。何せ大人達は全員、子供達の保護者なのだ。夜津季達の様な子供が戦う事を承伏できない親は参加していない為、参加人数も多くない。

真知の父親も参加していない。と言うより、自治政府の仕事があるので参加できないのだ。その筈なのに、仕事を肩代わりしてくれただと言う。

「今は大変な時だろ、大丈夫なのか？」

「大丈夫だつてさ。本格的に忙しくなるのは明日からで、今日一日はって」

真知が言い切る。

大人の事情は、夜津季も詳しくはない。だからそれで納得するしか無かった。

「それより、やっきー」

「うん？」

ニヤニヤと笑う真知。その表情は嬉しそうであり、面白そうでもある。真知という少女は、こういう表情がよく似合う。

「お遣い頼まれてくれないかな？ B2BとIKAと三翼会に。昨日のお礼ね」

「おいおい、今日は休みなんじゃないのか？」

「まあま、お散歩って感じでさ。お願いできない？」
確かに散歩程度だった。

B2Bは小学校。IKAは駅前広場。三翼会はホテル跡に宿泊している。全てを回っても一時間程度の道のりだ。散歩だと思えば、悪くない道のりである。

「わかったよ。午前中にか？」

「手紙とお礼の品だから、別にいつでも良いけど。でも午前中の方が良いのかな、やつきー的には」

「そうだな。その方が良い」

答えた後、表面が冷めたお粥に、ようやく手をつけた。

美味い。夜津季のお粥とは、また違う味だ。自分の作ったモノよりも、こんなお粥の方が好きだった。

まだお粥は温かく、混ぜるとすぐに湯気が出だした。

「でも、そうだなあ」

真知は頬に手を当て、呟く。

「やつきーだけだと、道に迷われたら心配だし……。人に道訊けない人だから」

「悪かったな」

幼馴染みだからか、真知は夜津季の事をよく知っていた。男子の道治よりも、夜津季を理解している。

「藍ちゃん、一緒に頼める？」

夜津季を見ていた藍。突然話題を振られたからか、肩がビクンツと跳ねる。

「べ、別に良いよ」

「迷惑じゃないか？」

「大丈夫。私、一昨日休みだったし」

何とはない二人のやりとり。だがそれを見て、真知は微笑を浮かべる。

「何だ」「何？」

その真知に対する問いの言葉。夜津季と藍の声が被った。

「いやいや、何でもない。うん、何でもないよ？ よろしくね、お二人さん」

真知はそう言ったが、しばらくニヤニヤと笑ったままだった。

それが何とも気持ち悪い。居心地悪さを悪化させる。しかし藍のお粥を食べていると、すぐに忘れた。

食べ終わり、夜津季は感想と礼を言って、出掛けの準備を始める。藍も照れながら、出掛ける準備を始めた。

一方、食器洗いは当番制で今日は道治と穂波だった。

「全く、青い春ね」

鍋や道具、スプーン等が穂波で、食器は道治が洗っていた。浴場で洗っているので、二人で食器洗いをしても狭さは感じない。むしろ、広さに萎縮（萎縮）してしまうぐらいだ。

「見ていて清々しいよ」

微笑みとも苦笑とも取れない笑みを浮かべ、穂波に同意する道治。「そう？ 私は逆にまどろっこしいわね。やっきーだって藍ちゃんの事、別に嫌いな訳じゃないんだし、さっさと付き合えば良いのに」

「それはそれで、らしくないんじゃないかな。あの二人は」

言いつつも、道治はその微笑みとも苦笑とも取れない笑みを穂波に向ける。

「それに、嫌いじゃないって言ったら、穂波だってそうなんじゃないの？」

「だ、誰がよ！？ 私、別にやっきーの事なんて……！」

「僕はやっきーが、穂波の事、嫌いじゃないって言いたかったんだけど」

「~~~~ッ！」

道治の言葉に穂波が悶絶する。

顔を真っ赤にさせて、口をパクパクと開いたり、閉じたり。

「わ、私はねえッ……！」

「速海がいるからって、穂波は萎縮してないかな？　僕には、そう見えるんだけど」

「ハアッ！？　何に私が萎縮するって言うのよ！」

「んー、まあ、色々と」

答えを濁しつつも道治は、食器を片付けた。道治の手際は良く、穂波よりも随分と作業が早い。なのでスプーン等を穂波の所から取って、洗い始めた。

「穂波とやつきーは、中学時代から仲が悪かったよね」

「それは、アレよ！　アイツが、暴力的だったから……」

「だったって事は、今はそんな風に思ってないよね？」

道治も夜津季の友人だから、夜津季がどういう人間だったかはわかっていた。

穂波は暴力的と言うが、実際はやんちゃだったただけだろう。

葉宮や伊岸の様なガキ大将みたいな人間と渡り合う為に、自らもガキ大将みたいになっていた。その程度だ。

何故渡り合う必要があったかと言う話についても、ガキ大将を諷める為だろうと道治は思っている。道治が見ていた限り、夜津季は葉宮や伊岸と共謀するよりも、咎めたり諷めたりする事の方が多かったから。

それは実際、翼事変の際に証明されている。学校で暴れ出した伊岸を止めたのは、他でもない夜津季なのだから。

「そりゃ、そうだけれども……」

穂波もその辺りの事はもう気付いているんだろう。まごつきながらも、答えは決して否定的なモノではなかった。

「でもまだどこかで、引きずってるんじゃないのかな。だからがむしやらに、やつきーと速海がくっつけば良いと思ってるんじゃない

の
」

「それの、何が悪いって言うのよ！」

怒鳴り、鍋を乱暴に置く穂波。それで穂波の分は終わっていた。道治も、その後すぐに終わった。

「素直になった方が、見えてくるモノは多いよ？」

「私は藍ちゃんを応援したいだけよ！」

鍋の入ったザルを持って、穂波は浴場から立ち去っていった。

やれやれ、と肩を竦めて道治は苦笑する。

「やっきーは良いなあ、モテて」

第五章 「乳白色」 2

2

IIIAが所属しているのは、西日本自治政府連合に所属する、兵庫・姫路行政区だ。ヴェノムやその他の反社会的武装組織から逃げ延び、社会的な統治を行っている行政区である。

姫路行政区とは言っても、住人や政治家は姫路出身に限っていない。

兵庫の南東部、つまり兵庫で最も栄えている都市部がヴェノムによって占領されている現状、ヴェノムの勢力圏から逃げ延びてきた人数も多数いるからだ。

夜津季達もそうだった。学校を追われて、街に逃げて、街を追われて、姫路に逃げ延びた人間だ。

現在はIKAの活躍もあり、神戸への道が開けている。神社と会館は加古川市で神戸市ではなかったが、空を助けた時は神戸市に入っていた。

「姫路にもようやく慣れたね」

「そうだな」

二人はとりあえず、一番近い小学校を訪ねる事にした。

夜津季は西宮市で、藍は芦屋市の出身だ。

姫路等、小学の社会見学と中学の遠足で来たぐらいで、当初は中々苦労していた。

西宮や芦屋と比べると、姫路の緑は多い。整備された町だったが、西宮や神戸の様な雑然とした町並みではなかった。

それが気持ち良い。味気ないのが新鮮で、散歩するには悪くない町だった。

二人は小学校までの道のりを歩きながら、雑談に興じる。

「でも神戸や西宮も懐かしい。思わないか？」

「うん。でも、今は無理かな。昨日は大分やつつけたけど、押し込める程じゃないよ。人も集まってないし」

「そうだな。人材を育てないと、どうしよもない。まあ現状を維持する程度に人材が充足してる分、マシかも知れないけどさ」

幸い、姫路行政区には若い人間が多く集まっていた。若いと言っても、四十歳以下という意味だが。

ヴェノムの思想に反発し、手段や行動を嫌悪し、逃げ延びてきた人間なのだ。精力^{たぎ}滾り、己の意思を明確に示して、ヴェノムと戦う事を決めた人間だけに、その実力は頭抜けている。

更に、ヴェノムから逃げ延びた後はヴェノムから皆を守る為、訓練を行ってきた人間でもある。

ろくな訓練も行わず、ただ人を動かしているだけのヴェノムとは、格が違う。

「でも、時間を掛ければ掛けるだけ、ヴェノムは強大になると思う」
ただヴェノムは、バンデットのみを主力とすべきだと明言している。

数百数千の翼持ちの軍勢を持つよりも、バンデットの軍勢を揃えた方が一人当たりの戦闘能力は高いので、そうすべきという意見だ。
今は少数精鋭への過渡期であり、時間が経てば経つ程、ヴェノムは理想に近付く。

戦力の純化、というモノだ。

「今は、徴兵みたいなモノ。だから戦力の幅が大きすぎて、軍隊にはほど遠いよね」

「そうだな。オレ達の方がまだ傭兵に近い分、戦力が整ってる」

「うん。でもいつかは、軍の体裁が整って、傭兵程度じゃ適わなくなると思うな」

「その時には姫路行政区の防衛体制も完璧になってるだろうさ」

防衛体制が完璧になるという事は、国家として機能するという事でもある。それだけで秩序が生まれ、国家の体裁が整うのだ。法律等、後追いしてくるだろう。

そうして国家ができれば、今度は人が着いてくる。富みを求めて、無政府状態で富む一般市民（多数派）など、存在しないのだ。そうなるとヴェノムは衰退し小勢力に落ち込む、と夜津季は見ていた。

「でもヴェノムは消えないと思う。翼獲りのやり方が、確立されちやったから。それを欲しがる人間は、いなくならないと思うな」
「時局次第だな」

話に一段落ついたところで夜津季は、笑い声を上げた。

「って、色気の無い話だな。男と女の二人組なのに」
「う……」

「まあオレ達らしいって言えば、そうだが」

道治や真知、穂波相手ならばこうはならないだろうな、と内心で呟く夜津季。

道治は血生臭い事や、争い事は嫌いな人間で、こういう話はしたがらない。真知とは事務的な話で終わって、そこからは笑い話だ。穂波も、途中から笑い話になるだろう。

「だ、だって、やつきーの趣味とか、私詳しくないし……」

「本とかは何読むんだ？ 活字でも、漫画でも良いけどさ」

混乱の最中だから、本は捨て値で売られている。皆生活必需品の方を欲しがるので、本に金は割かないのだ。

だから本に関しては、割と簡単に入手できる状況だった。恰好の娯楽品となっている。

「えっと、三国志とか……？」

「おお、良いな。どの勢力の、誰が好きなんだ？」

「魏の辛毘。ああいう時に頼りになる人って、良いなって思う」
「良いねえ、絶妙な渋さだ」

人選の渋さに苦笑したが、またそこが藍らしいとは思った。

「やつきーは誰が好きなの？」

「オレか？ そうだなあ、武将だと張遼かな」

「張遼かあ。遼来遼来、紅蓮の夜津季が来るぞ、って？」

「オレが張遼クラスかよ」

悪い冗談だ、と思ったが、それは口から出なかった。
クスクスと笑う藍が、ひどく可愛らしく見えたのだ。思わず頭が
カアツと熱くなった。

「遼来遼来、紅蓮の夜津季が通るぞー」

気に入ったのか、そう言って尚も笑い続ける。

気恥ずかしい。手で顔を覆ってしまう程だった。

「あつ、小学校だよ？」

なので、言われて気が付いた。

曲がり角を曲がって、すぐの所だった。

校門には三人程翼持ちの大人が立っていて、周囲を警戒している。

「ご苦労様です、IIIIAの速海と夜津季です」

その大人達に、藍が話しかけた。

今日は夜津季は紅蓮のコートを着ておらず、Tシャツにスラック
ス姿である。

「ああ、IIIIAの子達か。桜塚君達に用事かな？」

「はい、取り次ぎお願いできますか？」

「良いとも。ちょっと待つてな」

言って、一人が学校の中へ走っていく。

学校はその敷地面積と居住性から、数多くの人々が住んでいる。
見ると、グラウンドはテントで埋め尽くされていて、まるで小さな
町のように見える程に賑わっている。

B2Bもそのテントの一角で暮らしており、B2Bという呼称で
はなく、個人の名前で呼んだ方がよく通っていた。

すぐに、桜塚がやってきた。一人だけ、連れはいない。

「おはようお二人さん。何か用事か？」

「ああ、挨拶回りだ」

夜津季に話しかける桜塚。夜津季も答えを返しつつ、真知から預
かった品を取り出した。

「これ、IIIIAから昨日のお礼。銭湯の無料チケットだとき、使

つてくれ」

「おお、こりやどもども。ありがたく使わせてもらっよ」

無論、他に報酬は支払っていたが、これは気持ちだった。

小学校に住む人達は、殆どが体拭き等で済ませる人が多く、それに気を利かせたモノである。友好の品と言って良いだろう。

「杉見の様態はどうだ？」

「お陰様で、もう完治してるよ。大事を取って今日は休ませてるけどな」

「なら良いんだが」

朗らかな笑みを浮かべる桜塚に、夜津季も胸をなで下ろした。それから、桜塚が話題を振る。

「お二人はこれから、他の挨拶回りかな？」

「うん。I K Aと三翼会にね」

「ホテルと駅前か。遠いな？」

「散歩だと思えば丁度良いさ」

そんな風に軽い雑談を交わして、談笑する。程良く話題が尽きたところで、小学校を後にした。

ここから駅前まで三十分かかる。その間、藍との会話は弾んだ。互いにうち解けて、中学時代の頃のように色々な雑談を交わした。久しぶりの会話だった。速海とは、もしかしたら初めてかも知れなかった。

同時に、気が楽になっていた。

駅前に到着する。

「葉宮と会えるかな？」

出迎えた鈴木に、夜津季が訊ねた。

場の空気はピリピリとしていた。I K Aは駅前広場でキャンプを行っており、ここを拠点にしている。バスターミナルの辺りだとか、タクシー広場に八つ程テントが張られている。

I K Aは大人がいない、子供達の集まりだ。

仕事で一緒にいられない人間や、ヴェノム側に捕まったり、協力した人間もいる。

だから施設に入る事もできない子供が多く、それを葉宮が統率していた。

その葉宮と、夜津季は見た目険悪だ。気を尖らせるのも仕方ない。

「謝りに来たのか？」

「それもある」

「良いだろう」

鈴木が答えると、周囲からの敵意が若干緩くなった。

テント群の中心にある大きなテントから、葉宮が顔を出した。

「これ、昨日のお礼だ。米と味噌」

「ああ、そうか……」

葉宮は口数少なく、受け取り、鈴木に渡した。

葉宮が夜津季を見る。夜津季も見返す。

「昨日は、すまなかった……」

「ああ、オレこそ悪かったよ。ゴメン」

先に謝ったのは、葉宮だった。それからすぐに、夜津季も頭を下げた。

「熱くなっていた。ヴェノムとの戦闘で、気が立っていた。『お前が居なくなったら』と考えて、焦ったのかも知れない」

「良いさ。わかってくれたら、オレだってお前の境遇は知ってる」

葉宮は素直じゃないが、それでも覚悟を貫き通す人間だと、夜津季は思っていた。

その不器用さは、夜津季自身とよく似ている。

「オレも悪かったよ。お前の言う事にも一理あったし、それを感情論で否定したのはオレだからな」

「だが、次も同じ様な事があれば、行くんだろう」

「オレはリーダーなんて柄じゃないからな。最前線で人を助けてるのが、性に合う」

口端をつり上げた笑みを浮かべ、夜津季は答えた。

それから数秒の沈黙。話題が尽きた証拠だ。なので、夜津季は場を去ろうと一步退いた。

「夜津季」

そこを、葉宮が呼び止めた。

「頼みがある。聞いてくれないか」

「何だ？」

葉宮の頼み、珍しいモノだと思いつつも、夜津季は訊ね返す。

「滑空術を、教えてくれないか」

そして、もたらされた葉宮の言葉に、夜津季は目を丸くした。

「何だつて？」

「オレの知る限り、大人まで含めても、お前が一番滑空術の扱いが上手い。習っておきたいんだ」

滑空術は、感覚的なモノが強い。

夜津季自身鍛錬で習得したモノで、戦闘中に使用する事で使い方を学んでいった。

滑空術を戦闘で使用する人間はまだ少なく、特に積極的に使用している人間は、夜津季を置いて他にいないだろう。

それだけ、扱いが難しいし、夜津季の練度はずば抜けて高かった。「オレがお前程に滑空術を使えたなら、あの場でお前に代わって人質を救出する事ができた筈だ。なら、習っておくに越した事は無い」

「まあ確かに、そう言われればそうか」

大翼は出力に優れている。能力もそうだが、滑空術だと殊更強力だ。

同じ大翼の翼持ちである真知等は、素手で岩盤を砕く。夜津季の能力に匹敵する攻撃力を、滑空術で引き出せるのだ。攻撃力だけでなく、機動力も高い。小回りという点では少々勝手が悪いものの。

そう、夜津季が黙々と考えていたら。

「オレは近々、ヴェノムが報復してくると思ってる」

葉宮が言う。その言葉に、夜津季は首を傾げた。

「昨日散々に打ち破っただろ。数日じゃ態勢も整わない。なのに攻

めてくるのか？」

「上の戦勝で下の態勢を整える。ヤツ等はそうする筈だ」

「ッ」

言われて納得した。前例はあったし、道理にも適っていた。

「だから、頼む」

葉宮の鋭い瞳が、夜津季を捉えていた。

先述した様に、葉宮は覚悟を貫き通す人間だ。こうなればもう反論は無駄だろう。

「良いかな。速海？」

仕方なく夜津季は藍を見やった。そう言われたら、藍も頷くしかなかった。

「おし、良いぜ。ただ用事の途中なんでな。練習は午後からだ。今は用事を済ませたい」

「わかった。どこで待ち合わせたら良い？」

「別にここで良いだろ。あくまで体術訓練だ、能力とは違う」

「そうか、わかった。いつでも来い」

「おう」

それだけ言うと、夜津季と葉宮は同時に踵を返して、葉宮はテントに、夜津季は藍の元へと戻った。

次に、ホテル跡へと向かう。

ホテル跡は生活必需品の確保の為、殆どの設備が接收されていて、最早廃墟寸前というレベルまで朽ちていた。

ただシッカリとした個室を確保できるので、女子で構成される三翼会は、ホテル跡を気に入っている様だった。

「お疲れ様です夜津季さん。夜津季さんはもう、調子は大丈夫なんですか？」

「精神的なモノだからな。氣遣われる事じゃない」

ホテル跡のロビーで出迎えたのは瀬藤で、今は瀬藤しかホテルには残っていないかった。

戦闘向きでない三翼会は平時の仕事の方が多く、今みたいな状況においては特に多かった。

瀬藤が残っているのは、留守番だからだそうだ。

「なら良いんですけれどね。あ、これ三翼会からIIIAの皆さんにです。ケーキなんですよ」

「け、ケーキ？」

渡された箱を見て、夜津季は驚いた。

ケーキには砂糖が必要不可欠だが、その砂糖は今皆無だ。付け加え小麦粉が絶対的に不足している。

ケーキ等作れる筈が無い。パンを作る方が先だった。

「今、色々試行錯誤してる所なんです。まだパンを作れる程じゃないんですけど、甘いスポンジ状のモノはできたんですよ」

「それを、もらっても良いんですか？」

「実は、あんまり美味しくないんです」

藍の問いに、瀬藤は笑って答えた。

「でもIIIAの皆さんは、普段色々な仕事をされていますから、甘いモノも必要かと思ひまして。要らないんなら、別に良いんですけど」

ここ一年で甘いモノはドンドン無くなって来ている。

翼事変から数ヶ月は、コンビ二にあった飴等で糖分を摂っていたが、今ではそれも残り少ない。

「いや、ありがたくもらっておくよ。ありがとう」

「どう致しまして」

瀬藤は何とも綺麗な笑顔を浮かべた。

同い年の筈だが、こうやって笑われると、何歳か年上に思えた。

「で、IIIAからはこれを……」

続いて、夜津季は持っていたバッグから、最後に残ったモノを取り出した。

「漬け物で、塩分を摂る時なんか……」

「え、お漬け物……？」

瀬藤が戸惑いの声を上げた。

嫌いだっただか、と夜津季は思い、視線を取り出したモノにやった。

「……」

夜津季がバッグから取り出したモノ。それは、招き猫だった。

「……」

無言で腕を組み、神妙な面持ちで招き猫を見つめる夜津季。

「お漬け物、ですか？」

ぎこちない瀬藤の問い。

「割ってみる？」

中に入ってるかも知れないよ？ という夜津季の淡い期待。

横で見ていた藍は、ため息を隠さなかった。

「素直に間違いを認めた方がよいよ、やっきー……」

「いやいやいや。間違ったのオレじゃないって！ だってバッグ

ごと渡されたし」

言っただが、刹那。夜津季は殺気を感じた。

みるみる迫る殺気。速い。避けられない。

カコーンッ

アルミ缶が、夜津季の頭を弾いた。

幸い面の広い場所に当たったので、一瞬の痛みだけで何も怪我は無かったが。

「こんの馬鹿やっきー！」

当たった箇所をさする夜津季に投げかけられる、罵声。

穂波だった。何故ここに。

「アンタ、届け物するんだから、ちゃんと中身ぐらい確認しなさいよね！ 私が走らされる羽目になったじゃない！」

「お、オレなのか？ 罵倒されるべきはオレなのか？」

「問答無用よ！」

理不尽を全身で噛み締めながら、夜津季は藍に抱きついた。

「穂波さんがこわーい……」

「あ、あう……」

ほんのちょっとした、悪ふざけだった。
だがそれで、藍は顔を真っ赤にさせ……。

メキ

夜津季は顔面に穂波の拳を喰らった。

「~~~~ッ！　~~~~ッ！！」

「セクハラ厳禁！　わかった！？」

悲鳴にならない悲鳴を上げる夜津季。

ただ藍がすぐに夜津季の様子を見たので、穂波は視線を外し、瀬藤に漬け物のタッパーを差し出した。

「はい、コレやつきーが渡す筈だったお漬け物」

「はいどうも。にしても、相変わらず酷いねえ、ほなみん」

「ほなみんはやめなさい」

何とも気の抜けた瀬藤命名のあだ名を、穂波は却下した。それから、横目で夜津季を見やる。

「良いのよ。アイツ簡単に死なないし。それに最近調子乗ってるんだから」

「ゆーのんだけだよ、夜津季さんをそんな風に扱うのは」

「ゆーのん言うな。そうでもないわよ。大人にとつちや、やつきーなんてただの子供だし」

夜津季は意外に、大人達からはあまり重用されていない。

翼事変当時は中学生だったという事もあるし、今もたったの十六歳だ。

加えて、戦うしか能のない人間だとも思われている。同世代からは英雄として尊敬されている夜津季が、和泉の様な大人から軽んじられる理由は、そこにあった。

「大体、やつきーをそんな慕うのって、三翼会とか少数じゃ……」

言いかけ、穂波はハツと気付く。そして、グルリと瀬藤の肩に手を回し。

「（なあにいい？　やつきーにでも、惚れた？）」

瀬藤に耳打ちした。

「ゆ、結乃……！」

瀬藤は慌てて、パタパタと手を振った。それを見て穂波が嬉しそうに笑う。

「（別にそんなんじゃないんだってば！ 私、夜津季さんに翼事変の時、助けられたけど！）」

「（良いんだよ良いんだよ？ 惚れちゃってもしょうがないよねえ、助けられたんだもんねえ？え？）」

「ゆ、ゆゝのゝ！」

そんな女子二人のやりとりを、夜津季は鼻頭を押さえながら、見守っていた。

「やっぱり女子は仲良いなあ」

「知らない」

第五章 「乳白色」 3

3

挨拶回りを終えて、昼食の為に銭湯へと帰ってきた夜津季。しかし昼食を終えると、彼はまたドコかへと出掛けていき、再び帰ってきたのは夕方近くになってからだった。

帰ってきた夜津季は息を切らしており、汗だく。理由は簡単だ。葉宮と滑空術の訓練をしたからで、しかも予想以上に過酷で楽しかった為に時間を忘れて集中してしまったのだ。

「ただいまー、っと」

ぜーハーと肩で息をしつつ、銭湯の入り口をくぐる夜津季。

「や、おかえり」

出迎えたのは、番台で受付をしている道治だった。

「随分疲れてるみたいだね。はい、タオル」

「おう、悪い」

道治は夜津季の様子を見て、すぐに番台からタオルを取り出して渡してくれた。

それで汗を拭っていく。まずは顔、それから首もと、次に腕だ。

「どうも厄介な事になってるみたいなんだよねえ」

そうしていると、道治が話題を振ってきた。

「何がだ？」

「ヴェノムの動きだよ。警戒に当たっていた自警団が、神戸市内で何棟かビルが倒壊するのを見たらしいんだ」

「それは厄介な話だな」

また顔から噴き出てきた汗を拭いしつつ、夜津季は考える。

普通に考えると、ビルを壊すメリットは無い。ただ砂埃が舞って、瓦礫が増えるだけに過ぎないからだ。

更地にするにしても、瓦礫を運び出す労力は無い。そこに何かを

築く余裕等、更に無い。

となれば、単純な破壊行為だ。単純な破壊行為に合理的な理由があるとするれば、訓練ぐらいか。それも、破壊を厭わない、或いは破壊を主目的にした、極めて実戦的な訓練。

「多分、訓練をしてるんだろうな。ある程度戦闘をこなせる人間が、オレ達やI K Aに潰されてるから、今は大分弱体化してる筈だ。それを補う為だろ」

「そうだね。昨日、一昨日と、やっきに大分やられてる訳だし」

「とは言っても、下っ端だ。翼事変の時に戦ったヴェノムの幹部格とは、まだ会ってない」

「ああ、それに関してだけど、情報が入ってるよ」

番台に座っている道治は、その番台の下から一枚の紙を取り出した。

年頃の道治が番台に座っているのはいかなモノか、という話については、実は問題無い。

男湯と女湯の両方を運営する事はまだ難しいので、交代で片方だけ運営しているのだ。今日は男湯の日なので、道治でも十分にこなせる。女湯の日は誰かの母親だったり、真知がやつたりしていた。

道治からその紙を受け取る夜津季。

「伊岸か」

「ああ」

書かれているのは、言霊寺達からの聴取で得られた情報だった。とりあえず重要と思われる情報だけが、箇条書きにされている。

箇条書きのトップに、「伊岸善人が帰ってきた」、そう書かれていた。

「あの野郎顔を見せないと思ったら、大阪の方に行ってやがったのか」

「みたいだね。大阪にヴェノムの本部があるという話だから、本部に出られるだけの人間なんだろう」

「と言うより、アイツが翼事変の首謀者みたいなモノだろう。伊岸

が学校で翼獲りをしたのが、混乱の原因だ。そう、アイツが皆をそのかして、翼獲りをしたんだよ……」

一年前の事を思い出しながら、夜津季は吐き捨てた。道治も固く頷きを返す。

「ヴェノムの総帥は、伊岸の父親だしね。学校で伊岸が翼獲りをした後、街で混乱を起こしたのは伊岸の従兄だったし。ヴェノムは、伊岸の一族の組織と言っても良いかも知れない」

「大方、そうだろ。伊岸がああ歳で幹部になってるのも、その理由が最大の筈だ」

「うん、そうだね」

道治は肯定した後、話題を切り替えた。

「その伊岸が留守の間に、代行がいたらしいんだけど、この人はあまり有能な人じゃなかったらしい。調練もしないし、EKAにも良い様にあしらわれていたみたいだ。だから伊岸が帰ってきたって事は、言霊寺さん達にとってもかなり大きなニュースだったんだって」

「伊岸は若い、頭は良い。力もある。伊岸自身は強かったし、伊岸と一緒にいたヤツも強かった。伊岸との戦いは、いつも死闘だった」

「だね。やつきーの好敵手って言っても、構わないんじゃないかな」

「認めざるを得ん」

夜津季は伊岸を、道治の頭脳を持つ葉宮の様な男であると、評価している。

昔から血気盛んで暴力的だったが、頭は悪くなかった。そして何より統率力に長ける。

夜津季達の学校で翼獲りを煽動したのは伊岸だったし、そうして得たバンデット達を統率して、学校から逃げた夜津季達を追撃したのも、伊岸だ。その後、市街戦を繰り広げていた従兄と合流し、市民を巻き込んだ追撃戦にまで発展させ、夜津季達を姫路に追いやっている。

「問題は、バンデットなのか、兵卒を鍛えてるのかだね」

「葉宮が言っていた。ヴェノムは上が戦闘で勝って、下を整える、と」

「バンデットの方が」

道治は額を抱えた。

「また戦か？」

するとだ。男湯から、桜塚が顔を出した。

思わぬ人物の登場に、夜津季は肩を跳ね上がらせた。

「いたのかよ。と言うより、早速か」

「ここ数日体洗ってなかったんでなあ。折角だから、予定の空いてるオレだけな」

ハハハと爽やかに笑いつつも、桜塚は夜津季の隣にもたれ掛かった。

女湯の番台にもたれているので、客の邪魔にはなっていない。

「最近になって、随分騒がしくなってきたじゃねえか。翼事変以来大人しかったのに」

「これが理由だそうだ」

桜塚に紙を渡した。桜塚は一瞥し、怪訝そうに眉をひそめ、突っ返す。

「伊岸の野郎は許せねえ。アイツはオレ達の仲間を、皆を、何人も殺しやがった」

「そうだな。もう同級生じゃ済まない」

「アイツがこの顔見せに来るっつーんなら、上等だ。殺^やってやる」

バシッ、と軽く拳を掌に叩き付けた。

「悪くない意気込みだが、お前じゃアイツの相手は無理だぞ」

だが夜津季は、桜塚の態度に冷やかだ。目を細めて、咎める様に桜塚を睨み付ける。

「……わかってるさ」

桜塚も、夜津季の言葉に最初は顔をしかめたが、すぐに気付いた様で、同意の言葉を返した。

「出力も使い勝手も、あっちの方が分が良い。付け加えて、頭も良いんだろ」

「そこまで卑屈になるなよ。お前だって頭は良い。ただタイプが違っただけだ」

夜津季がそう言い返すと、桜塚は、何かに気付いた様に夜津季を見やった。

「戻ったな、お前」

「うん？」

「余裕が出てきてるよ」

思わず聞き返したが、ああ、と桜塚は短く答えを返してきた。

恐らくは葉宮との訓練のお陰だろうと、夜津季は思った。

（やはり戦士は戦士、か？）

内心で自嘲した。

葉宮という戦士と戦った事で自分の強さを確認し、それが余裕となつて表れた。そう考えたのだ。

「何にしても、物騒な話さ。ヴェノムは一体何を考えてるんだろうね。原点回帰を謳^{うた}って、選民主義を強いたいだけなのかな？」

道治が言つと、桜塚がまず答えた。

「トップ　伊岸達はそうだろ、間違いなく。アイツ等に従ってるヤツ等も、大部分はそうだ」

桜塚が言つたのは事実だった。それに夜津季が、推論を付け加える。

「ヤツ等は見えてないんだと思う。乱世だと思つて好き勝手やつて、自分達で新しい秩序を創る存在だと思つてる」

「だとしたら、はた迷惑な話だね。僕達が望む秩序は、別に新しい秩序なんかじゃないんだけれど」

「だからこそ見えてない、だろ？」

桜塚はそう締めくくると、一步前に歩み出して、番台から離れた。

「じゃあオレはこれで。境界の警備は、オレ達の方も強めておくよ」

「頼む。他にも声を掛けられそうなヤツがいたら、掛けておいてく

れ」

「強襲戦だろうからな。そうしておいた方が良いか」

桜塚は銭湯の出口をくぐろうとして、立ち止まる。

「本当は、オレ達の中にもリーダーがいたら良いんだが」

「何だつて？」

「葉宮か、やつきー。どちらかな」

僅かに振り返り、桜塚は夜津季を見据える。

リーダー、と言うのは自警団の中の話か。

「オレは、柄じゃないぞ」

「だから『葉宮か』って言ったのさ。お前がもしもリーダー肌で、葉宮みたいなヤツなら、誰だってお前をリーダーとして慕うよ」

最後にそう言うと、手を振って桜塚は出て行った。

それから夜津季も自室へ戻ろうと、番台から背を離れた。

「こういう時になると、決まってるよ」

道治が呟いた。見やると、整った顔立ちが、憂鬱うつうつに染まっていた。

「何で一緒に戦えないんだろう、ってね」

「……」

重い、道治の呟き。

夜津季は、もしも自分が道治の立場だったら、と考えた事が幾度もある。

目の前で仲間が戦っているのに、その仲間が敵に打ち倒されているのに、自分は戦場に背を向けて逃げ帰るしかない。戦っている仲間達を尻目に、逃げる人々を誘導して、自分もそれに紛れて逃げる事しかできないのだ。

（多分、堪えられない）

そんな事は、夜津季にはできなかった。

例え能力が役に立たなかりうが、滑空術を用いて一緒に戦う事を選ぶ。そういう答えを出していた。

その中で、道治はよく堪えていた。事務方に徹して、皆の精神的な支柱になっていた。

「弱い」

だから夜津季は、突きつける。紛れもない、事実をだ。

「それと、オレ達がどう君に死んで欲しくないからさ」

ウソ偽りの無い、そして道治に戦場に立ってほしくない、理由。

「やつきー……」

「だから戦場以外に縛り付けてしまふ。悪いな」

「いや、ありがとう」

道治が答えた時、また客が一人やってきた。

道治は笑顔で出迎える。入れ替わる様に、夜津季は二階へと向かった。互いに、一瞥し、それが挨拶となった。

二階は部屋が三つあるだけだ。一つは元事務室で女子の部屋になっていて、もう一つは物置、最後の一つが台所で、台所が夜には男子の部屋になった。

ただ日中から台所にいると、邪魔扱いされる。料理をする場所に野郎が居座ってるんだから、当然だろう。

であるから、廊下に縁台が置かれていた。夜津季と道治は日中、その縁台か、その日空いている方の更衣室のどちらかで過ごす事が多く、夜津季もその縁台に腰掛ける為に二階に上がってきたのだ。

「お」

しかし、縁台には先客がいた。穂波が座っていたのだ。

場所が場所なので、勿論男子以外も使っている。

「葉宮との稽古、終わったの？」

「ああ。神風と速海は？」

「行政府の方に行ってるわよ。伊岸からの報復があるかも、って事を報せに。藍ちゃんは付き添い」

流石に真知は行動が早かった。

夜津季が穂波の隣、若干間隔を空けて座る。二人の間には、冷水が入った魔法瓶があったのだ。それを避ける為だ。

「アイツ、戻ってきてたのね」

少し沈黙が流れた後、穂波が話題を振ってきた。アイツ、という

のは伊岸の事だろう。

「みたいだな。今思えば、ヴェノムのチンピラ共を使った包囲網なんて構築できるのは、アイツしかいなかった」

「辻達も、いるのかな」

穂波はギョツと拳を握りしめた。

辻　伊岸にそのかされて、バンデットになった元同級生だ。

プロスポーツ選手を志していた人間で、明るく豪快な性格から女子とも仲が良く、穂波も親しくしていた人間だった。

「いないだろう。いたら、もっとまともな戦いができた筈だ」

「そっか……」

「いたとしても、倒すだけだが」

最後に冷徹に言い放ち、夜津季はコップを探した。だが、無い。仕方なく、台所の方へコップを取りに行った。

「やつきーは……」

コップを取って戻ってくると、穂波が呟いた。相変わらず、拳を握ったままだった。

「藍ちゃんの事、好きなの？」

そして、問い。

魔法瓶を握ろうとした夜津季の手から、力が抜けた。

「な、な何を言ってるんだ？」

「仲良いじゃん。藍ちゃんだって、やつきーの事、嫌いじゃないっぽいし」

唐突な質問に夜津季は面食らった。

少し悩んだが、コップを持ったまま、縁台に座った。

「　　そういう事は、考えない様にしてる」

しばらく呼吸を整えた後に、口を開いた。

声色は落ち着いているし、内容も冷静なモノだった。

穂波が視線を向けてくる。丁度、夜津季も穂波を見つめていたの
で、視線がかち合った。

「何で？」

「手一杯なんだ、皆を守る事で。そんな時に誰かを好きだとか、その人に好かれる為にとか。そこまで考える様になつたら、辛いと思うんだ」

「だから、考えないの？」

頷く。

「それって、何か卑怯だと思う」

「え？」

「アンタはそうだとしても、アンタを好きな子は、アンタを好きな事で手一杯かも知れないんだし」

言われて夜津季は戸惑った。

確かにそうだ。夜津季は皆を守るという使命感を優先しているが、中には恋愛を優先する人間もいるだろう。

（もしも穂波が言う様に、速海がそういう風に考えていたら……？）
仮定して、考える。

藍は良くやっている。あんな殺傷能力の高い能力を使つて、夜津季よりもよっぽど多くの人を殺して、皆を守ってくれているのだ。それでいて、夜津季や真知と話し合つて参謀的な役割もこなしている。使命は、十分に果たしていると言つて良いだろう。

それなのに、夜津季は藍の気持ちに応えない。使命で手一杯だから、我慢してくれと。そう言うのだ。

だとしたら、穂波の指摘は尤もだった。夜津季は、卑怯だ。

「だとしたら、オレはその批判を甘受しなきゃいけないな」
「何で」

穂波の言葉には、咎めの色が強く出ていた。

「誰か一人を守ろうつて意識は、誰よりも、という思考に陥りやすい。そうになったら、誰かを守る時に躊躇してしまうんじゃないか、つて思うんだ。だからオレは、誰かを一生懸命守るといふ事を怖がつてる」

「それはわかるよ。でもね、やつきーだけが戦ってるんじゃないんだよ？ 私だって、まぢるだって、藍ちゃんだって、他にも皆が戦

ってる。アンタ『だけ』が背負う事じゃないの」

「だが……」

「アンタは、頭固過ぎなのよ」

女々しく反論しようとした夜津季の言葉を遮り、穂波は断じる。

「自分がやらなきゃいけないと思ってる。それは良いわよ。でもね、自分しかできないってのは大間違い。誰かと一緒にやったって良いんだからさ。そうでしょ？」

「難しい……」

夜津季は思わず、苦笑を漏らす。それを見て、穂波は憮然とため息を吐いた。

「ま、アンタは何だかんだで器用だから、そうなくても上手くやると思うけど。って事は、今はそこまで惚れ込んでる子はいないのか」

「鋭いッスなあ。色恋事の洞察で女の子には、一生適わないぜ」

「アンタが鈍感なだけよ」

また嘆息し、穂波は立ち上がった。部屋に戻る様だった。

そこへ、夜津季は問いかける。

「穂波は好きなヤツ、いないのか？」

「さあね！」

バンツ、と大きな音を立てて、扉の向こうへ消えていった。

それを苦笑で見送り、夜津季は魔法瓶から水を注いだ。それから少し、口に含む。

キンキンに冷えた水は、どこか甘かった。

第五章 「乳白色」 4

4

真知の進言を聞き入れた姫路行政府は翌朝、議會を招集した。

議會と言つても、現在行政府に「本格的な議會」を開催するだけの余裕は無いので、実質的には有識者會議の様なモノだった。

行政府が指揮権を持つ武装組織の治安維持組織「警察団」と、行政府は指揮権を持たないが、行政府の認可を受けて活動している、自警団のトップが集められた會議である。

そして、この議會はお飾りだった。

自警団のトップが集められると言つても、IIIAでは保護者に出席してもらっているし、他の自警団も大多数がそうだ。であるから、当然大人達の差し障りの無い會議になる。

だが事が事である以上、そんなモノでは足りない。もっと突っ込んだ意見が必要だった。

その為の會議が、夜津季達子供が参加する會議だった。

「流石に連名招集だと、結構集まったな」

一通り會議が終わった後、葉宮が言った。

會議と言つても駅前集まったというだけの會議。一見は、単なる子供の集会に過ぎない。

しかし、今回の會議はIIIAとIKAの連名で、招集されたモノだった。

IIIAは夜津季のお陰でよく知られているし、IKAも翼事変後の活躍で名を知らしめた。自警団の中でも有力とされる部類だ。

その二つの連名ともなると、十数ある自警団の殆どが揃っていた。集まらなかったのも、活動休止中の自警団だけだ。

「オレとお前の勇名で、ある程度は皆が萎縮するからな。無駄な意見も出なかったし」

夜津季も髪をかき上げつつ、葉宮の言葉に答えた。

会議は、議長を葉宮が務め、進行役を真知が担当していた。

その為、IIIAの代表は夜津季となり、連名招集なので議長である葉宮の隣に座る事になった。

夜津季と葉宮の二人が並んで座っているのだから、その威圧感は凄まじい。殆どの人間が萎縮し、非常に緊張感のある会議となった。大人が萎縮すると厄介な馴れ合いしか生まない。だが子供の場合は、突飛な意見や分かり切った意見の頻出を防ぐ為、そこそ有効だった。

「だが、厄介なヤツもいた」

「^{あいが} 姫路防衛旅団の、相賀さんか？」

「ああ」

吐き捨てる様に葉宮は答える。

姫路防衛旅団は、名称に意味のある数少ない自警団だ。

それがどうしたという話だが、実はこれが大きな意味がある。自警団の殆どは、敵にその目的を悟られる事、大人達の心象への違いを嫌って、意味の無い名称を付けるのを慣例としている。

例を挙げると、IIIA、IKA、B2Bがそうだ。暗号じみた名称が専ら使われている。

一方、姫路防衛旅団は警察団の子息、子女が多く在籍しており、所属団員は十七人と最多を誇る。警察団とも当然密接な協力関係にあり、そのトップたる相賀の発言力は、相当なモノだ。自警団の慣例を無視する程度の発言力を有している。

「ヤツ等自警団のクセして、警察団ぶってやがる。お陰で会議が長引いた」

長引いたのは、そうばやく葉宮自身が、相賀の意見にいちいち噛みついたせいもあったが。

ただまあ、相賀の態度も良いとは言えなかった。あからさまに葉宮を見下したり、度々仲裁に入った夜津季と真知にも反論したりと、夜津季も思い出して眉をひそめる程だ。

「相賀さんの立場は理解するが、それを周囲に押しつけるのは良くなかったな。連携に支障が出る」

「全くだ。ヤツ等は一つの組織として、独立してると思ってる。大きな間違いだ」

「それをお前が言うか」

「オレはお前には付き合っている」

制止を聞かない事が多い葉宮の言葉だけに、夜津季は苦笑するしか無かった。

それから、真知を見やる。

今は、鈴木やら瀬藤やらと協力して、会議で決まった事をまとめていた。後でプリントにして、配布する為だ。

今回決まったのは、昼夜の巡回と、事前の準備、突発的事態の対応策である。

「夜に、IIIAやIKA、B2Bをまとめてきたな」

その中で特に重要なモノは、昼夜の巡回だろう。

警察団との兼ね合いもあるので、思いの外難航したが、どうにか今日の会議で話を着ける事ができた。

当初は見張りと言っていたが、桜塚から「見張りだと立ち止まったままだから、粗が出る」という意見が出たので、巡回という名目に変わっていた。

ニュアンスの違いだと思われるかも知れないが、ニュアンスの違いにもちゃんとした意味がある。それだけで、任務に臨む人間の心構えが変わるという意味だ。言葉のニュアンスで判断しがちな子供には、重要な事である。

「夜は灯りが無いからな。その割りに建物が多くて、どうしても見落としが多くなる。警戒したとしても、高が知れている。伊岸だつてそれがわかってるだろうから、警戒されていても夜を狙ってくるだろうさ」

「阻止と対処、その為か」

「ああ」

ライフラインは回復しつつあるが、それでも復興にはほど遠かった。

電灯などの灯りで炙り出す事は、不可能だ。

であるから、夜は全くの暗闇だった。星がよく見える程で、頼れる灯りは月明かりのみという世界だ。奇襲には持つてこいと言える条件だろう。

「 救援は、オレ達が相賀の野郎のトコか。それで良いのか、お前のトコは」

それから、少し考えてから葉宮が言ってきた。

ヴェノムが襲撃してきた時に、どう対処するのかについてだ。

まずは連絡と報告だという事に決まった。その連絡先、報告先がI K Aと、姫路防衛旅団なのである。

防戦が最優先だという意見もあったが、伊岸が統率している限り厄介な相手だ。自警団単独での防戦は難しいだろう。そう、夜津季が言うど誰も反対しなくなった。

伊岸との交戦回数が最も多い人間が誰であるのか、皆知っている。夜津季を置いて、他にいないのである。

「人数の多い姫路防衛旅団と、戦力の整ってるお前の所なら、ある程度の防波堤にはなる。主力はそのどちらかで、オレ達I I I Aは遊撃で良い」

「戦力総合ならトップクラスだろう。小翼の虹色八枚羽根のお前がいて、中翼の赤色六枚羽根の穂波がいて、大翼の赤色三枚羽根の神風と同じく大翼の青色二枚羽根の速海もいる。全員、戦闘経験も豊富だ」

「それでも、分けられたらマズいんだよ。オレ達は最大でも、二つにしか分けられない」

「二つでは支えられないか。だがまあ、オレ達I K Aと姫路防衛旅団のどちらかが出ている状態なら、お前達に救援を頼んでも構わないだろう?」

「うーん、まあそれなら、良いんじゃないかな」

「よし、わかった」

納得する様に深く一度頷くと、葉宮は踵を返した。

「今日もこの後、頼めるか？」

それから言ってくる。滑空術の事であるのは、言わないでもわかった。

しかし、会議をした後だ。決して楽な会議ではなかったし、充実した内容だったから、相当疲れている。少なくとも、夜津季はそうだった。葉宮も、相賀に食いついていたし、議長としての仕事もあったから同じ筈だ。

にも関わらず訓練をする。

勤勉を通り越したモノを感じる。それが「焦り」であるという事は、明白だった。

「そんなに気になるのか、伊岸が」

それを咎めるべく言い返す夜津季。

「正確にはヤツの下にいる女が、だ」

葉宮の目つきが異様に鋭くなった。

途端に空気が張りつめ、息がしづらくなった様な感覚に襲われる。

「躍起になってないか？」

「なっていないと言えば嘘になる。だが、躍起にならないよりはマシだ。ヤツ等が来るのは確定事項なんだから」

「焦燥感の中で得た力は、驕りか焦りしか生まないぞ」

「じゃあどうしろって言うんだ！？」

葉宮の口調が荒くなった。

作業に集中していた鈴木が、二人に視線を向けた。

「このままじゃ十分に戦えない。その為に必死になっても、逆効果……。どうすれば良いんだ？」

「落ち着けバ力野郎が」

夜津季も口調が荒くなった。

睨み付ける。だが葉宮はたじろぐ事無く、睨み返してきた。

「稽古はつける。必死で臨もうが構わない。その上で、落ち着けっ

て言っただよ」

「オレの事は知ってる筈だ……。それでも尚、オレに落ち着けって言うのか!？」

「お前はオレに何を求めてる？ 甘くして欲しいのか？ 自分の気持ちを理解して欲しいのか？ それとも……」

夜津季の目が、細くなった。

「姉を倒す力が、欲しいのか」

「……ッ!!」

瞬間、葉宮の目が本気になった。

振りかぶり、拳を繰り出そうとする。だがそれよりも早くに、夜津季は後ろに跳んだ。

空振る拳。夜津季と葉宮、五メートル程の間が空く。

「悪い、神風。場を移してくれ、今日はここで稽古をつける事になりそうだ」

更に数歩後ろに跳んで、真知達の所までやってくると、そう促した。

「はいはい」

やれやれと言いたげに頭を振りながらも、そう答えを返し、真知は移動を始める。

ただ鈴木はその場に残った。葉宮が心配なのだろう。

だが構わず、すぐに、夜津季達は戦いを始めた。

ザアッ

夜津季が動く。ボクサーのフットワークの様に、軽い身のこなしで、数メートル程の距離を素早く、短く移動してくる。

対して、葉宮はズッシリ重心を低くして構えており、動く事は少なく、動く時は一步一步ジリジリと動く。後退する時には、一〇メートル近くを一気に動く。

滑空術にも、翼の大小によるバトルスタイルの差異はあった。

小翼は出力に劣る分、細かな機動ができ、特に手数の方が多いという速さにおいて、際立っている。

大翼の方は出力に勝り、必倒の一撃、広大な移動距離、小翼を上回る加速度と最高速度を誇る反面、小出しは不得意だった。大砲をマシンガンの様に撃ちまくるとか、F1カーがスラロームをするとか、そういう事ができないのと一緒にだ。

「お前は何の為に戦う、夜津季！」

葉宮が声を荒げた。

腰を据えて構える葉宮と違い、夜津季は動き続けている。

瞬間的な速さでは、葉宮の方が速い。即ち、奇襲される可能性が高いのだ。その奇襲を防ぐ為には、総合的な移動量で対抗するしか無かった。

「戦いはオレ達にとって日常だ！ でもな、戦いが非日常だった頃もあった！」

「言うな、葉宮」

「何でオレが、非日常を、戦いを日常にしたと思う！？」

葉宮の言葉を聞きつつも、夜津季は殴りかかる。助走をつけて、振りかぶった一撃。

葉宮はそれを、前腕で受け止めた。夜津季の渾身の一撃にも関わらず、ただのそれだけで、容易く止まった。

滑空術の出力の差が、威力に表れているのだ。

「オレにはな、夜津季。親なんていないんだ！ 翼事変がきっかけじゃない、最初からいなかった！」

受け止められた拳が、葉宮に掴まれた。

逃げる為蹴りを放つ。頭に向かつての蹴り、目眩まし。だが葉宮は防御し、大した隙も見せず話を続ける。

「守ってくれる親がいない、だから施設に入れられた！ でもな、オレにも家族はいたんだ！」

ならば、と夜津季は軽い身のこなしで、連続した蹴撃を放った。

頭、腹、胸、構わず乱れ打った。

これには堪らず、葉宮も手を離れた。葉宮が怯んでいる間に距離を取る。

「血の繋がった姉貴がいた！ 血は繋がっていないが、同じ施設で暮らしたヤツ等は、皆家族も同然だった！」

夜津季も知っている事だった。

夜津季は葉宮の自宅、つまり施設に呼ばれた事がある。と言っても、葉宮からの誘いではない。市役所に勤める夜津季の父が、施設の責任者と知り合いだったから、その縁でだ。

それがきっかけで、互いに家に呼び合う仲となったのだ。

「オレは誰にも守られないかも知れない。でもそれなら、オレが家族を守ってやろうと思った！ オレが男だから、戦えるから。そうやって、オレはお前と一緒に戦った！」

葉宮が夜津季と一緒に戦う様になったのは、街に逃げ延びてからだった。

それから、夜津季は葉宮と行動を共にし、葉宮の施設に向かった。
(だが、そこはもう”家”じゃなかった)

夜津季が葉宮の家に遊びに行くと、暖かく出迎えてくれた老齡の女性。

その女性が玄関すぐの所に、血を流して横たわっていた。

死んではいなかった。女性はその後、夜津季達と共に逃げ延びて、今も生きている。

ただ、誰が彼女を傷つけたのか。

「でもな、待っていたのは、妹と姉貴の姿だった」
背後からの声。

いつの間にか、葉宮が後ろに回り込んでいた。

繰り出される葉宮の拳。慌てて腕を上げたが、衝撃は腕じゃなく、腹に来た。

拳による打撃と見せかけた、蹴撃。腹をえぐられ、夜津季は堪らず吹っ飛ばされる。

「ぐあッ……！」

意思に反した呻き声を上げながら、夜津季は壁に叩き付けられる。それ程強くはなかったが、今度は悲鳴にも似た息が漏れる。よろ

めき、膝を突いた。

「血の繋がった姉貴が」

上から声が降ってくる。見上げると、葉宮が立っていた。

「血の繋がらない妹を、翼獲りしてる所だったんだ」

俯き、夜津季は唇を噛む。

その現場は夜津季も見ていた。横たわる十歳ぐらいの女の子と、高校生ぐらいの女子。女の子は泣きじゃくり、苦痛に悶えていた。

「オレが戦う理由はなあ夜津季。憎しみだよ。憎いんだ、ヴェノムが」

「仕方ない、それは」

あの光景を見て平静を保てる人間は、いないだろう。それが親族なら尚更だ。

だから夜津季は、それを咎める事はしない。

「じゃあ夜津季。お前は何で戦うんだ？」

「オレ、が」

夜津季は考える。

元から、平和を愛している類の人間ではないのだ、夜津季は。

だからだろうか。翼の危険性について、周りがファンタジーだのどうだの言う中、真剣に考えていた。それが平和を乱す存在になるのではないかと。

そして、日常は崩れた。日常が崩れた後、戦い、英雄となった。

「オレが戦う理由はな、葉宮」

「ああ」

だとすれば、答えなんて決まってる。

夜津季は立ち上がる。

「死にたくないからさ。イコールで生きたいから、と結んでも良い」
葉宮と、視線を合わせた。無心で葉宮を睨み付けた。

同様に、葉宮も夜津季から視線を外さない。

「生きていたい。楽をしたい。その為にどうすれば良いのか。
それを打算して、行動してる」

「感情に身は任せない、か？」

「あくまでも行動原理は感情だ。オレがそうしたいから、という事でしかない」

理屈だったが、実際はもっとシンプルだ。

「皆と馬鹿話をするとか、一緒に食事をするとか。そんな事をするとな、どうしよもなく楽しいんだよ。言葉にしてどうこうってモノじゃないけど」

「……」

「誰かが死んだりオレが死んだりして、その楽しい生活が無くなるのが嫌だ。それだけの為に、オレは戦って生きてる」

なんと子供じみた理由だろうか。言っている夜津季自身がそう思ってしまう程だ。

尤も、生きる理由なんてそんなモノで良いとも思っていた。

死んでも良いとか、生きるのが嫌になるとか、そういうモノを退けるに値する理由。

人によってその重さは違うだろう。方向性も違う筈だ。

「死にたくない。これがオレにとっての、戦う理由なんだ」

「そうか」

夜津季がハッキリと言うと、葉宮は後ろに跳んだ。再び二人の距離が開く。

「そういうヤツは、長生きするだろうな」

葉宮が言う。夜津季はどうかな、と首を傾げた。

「逆に、オレの様なヤツは早死にする」

「立派な死亡フラグじゃねえか。死にたがりか？」

「後ろ向きなヤツはいつだって死ぬ。でもな。シッカリ前を向いてるってわかってるヤツは、どれだけ無理しようが、死なないモンなんだよ」

「そういうモノか？」

「そうだ」

「……そうかい」

二人は苦笑した。
それから、同時に地を蹴った。

5

二人が広場で暴れ始めたので、真知と瀬藤は駅の中に入っていた。

葉宮はキレている様に見えたが、能力を使う素振りは見せなかった。大事にはならないだろう。

「熱いねえ、流石男の子だ」

純粹な殴り合いを見守り、真知が呟く。

「大丈夫なのかな？ 葉宮さん、大分怒ってたけど……」

「仲の良い兄弟が喧嘩する様なモンよ。どうって事無いわ、怪我はするかも知れないけど」

瀬藤は不安そうにしていたが、十中八九大丈夫だろう、と真知は踏んでいた。

どちらかが怪我をする事はあっても、友情や信頼関係に亀裂が入る事は無い、と。

「夜津季さんと葉宮さんって、昔は仲良かったんだよね？」

歩きながら、瀬藤が聞く。

「そうだよ。やつきは割と真面目だったけど、悪さをする時は、大抵葉宮と一緒にだったかな」

「でも今って、あんまり仲良くないって言うか……。顔を合わせたら、喧嘩ばかりしてるよね」

仲が良くない訳ではない、だろう。

ただ葉宮の沸点があまりにも低すぎるだけだ。少しの事で熱くなってしまうから、すぐ喧嘩してしまう。葉宮が少しの事を気に掛ければ、昔の様に二人は仲良くしている筈だ。

瀬藤は、その所を誤解している。

「やつきは、葉宮の親友だからね」。苦楽を共にしてるって言う

か、なんて言うか。うん、女の子にはよくわからない関係してるよ」

「まちは知らないの？ 二人がつるむ理由」

「知らないなあ？」

語尾の音を僅かに上げ、答える。その口調は、知っている様に受け取れるモノだった。

「男の友情をペラペラと喋る女は、嫌われるよ？」

ただ、そう言って教えてやらなかった。その口ぶりは、本当は知らなかったかの様。

どちらか判断しかねたらしい瀬藤は、そのまま黙り込んだ。

「じゃあ、一つだけ」

再び瀬藤が口を開いたのは、仕事が終わった後だ。

葉宮との殴り合いでボロボロになった夜津季を、真知が朗らかに笑って、出迎えた時である。

ボロボロになったとは言っても、傷は瀬藤の能力で治療してもらったので、着ていた服だとか肌の汚れとかだ。

「まちは夜津季さんの事、全部知ってるの？」

思いもよらぬ問いに、夜津季は目を丸くした。しかし、真知は静かに笑った。

「全部は知らない。けど一番知ってるよ。昨日のパンツから、やってきーが誰を最初に殺したのかまで」

その答えに、瀬藤は肩を跳ねさせた。一方で、夜津季は笑った。

「オレは神風のをよく知らない。パンツの色なんて知らないし、誕生日だって知らない。だがまあ、一番”理解”してやってる」

「私と夜津季の最初の殺人」

「オレとコイツの戦う理由」

「一緒に死地に赴いた事もあるし……」

「共に死地から帰還した時の事もだ」

そう言う二人の様子は、瀬藤からは、狂った様にしか見えなかっただろう。

ただ夜津季は真知を誰よりも理知的だと思ってるし、真知は夜津

季を誰よりも理性的だと思っていた。

狂気に染まっていけない事を、互いが互いに認め合っているのだ。

「まるで恋人みたい」

瀬藤が、最後にそう言った。そして、踵を返し駆け足で去っていく。

二人は呆然としていたが、瀬藤が見えなくなると、思いついたように、一緒に笑い出した。

「だってさ、付き合ってみるかい？ 穂波」

「生まれ変わっても嫌」

第六章 「血色」 1

1

あれから二日が過ぎ、今日は三日目の夜。

一日目の夜をEIA、二日目の夜をB2Bが担当した後、今日はIKAが巡回を行っていた。

『リーダー、こちら第三班。異常ありません』

携帯電話の向こうで、仲間が告げた。姫路周辺では既に電波が回復し、携帯電話が通じる様になっていた。

その報告を受けた葉宮は、鈴木と共にビルの屋上にいた。周囲も同じ様なビルが建ち並ぶ中、高いとも低いとも言えない五階建てのビルである。仲間達は東、加古川の辺りまで巡回してるが、葉宮は姫路市内に留まっていた。

「了解。引き続き見張りの隙を埋める様に、巡回を続ける」

『アイアイサ』

短い会話で、葉宮は通話を終える。それから不意に、鈴木を見やった。

夜風に鈴木髪がなびく。滑らかに揺れる髪が、葉宮の視線を釘付けにする。そうして見ていると、少しでも良い事が葉宮の頭に過ぎった。

鈴木とは幼馴染みだ。互いの事を良く知っていて、葉宮より頭も良いから、IKAを立ち上げる際に副官に据えた。以来、彼女は嫌がる素振りも無く、葉宮に従っている。

「今日も来そうにない？」

その鈴木が、葉宮の視線に気付き、訊いてくる。

「いや。来るなら、今日だ」

だが葉宮は否定した。勘などではない、根拠のある断定。

連日確認されたビルの倒壊、及び爆音が、今日は確認されなかつ

ただ。

調練が終わった証拠だと、葉宮は思った。そして調練が終わったなら、すぐに攻めてくるだろう。日を置けば置く程、相手に防衛線を築かれる。下を整えるのも遅くなる。

だから今日、攻めてくると葉宮は考え、夜津季にも判断を仰いだ所、同意をもらっている。IIIAにはこの夜、寝ずに待機してもらっていた。

「来たら、どうする？」

鈴木は屋上から身を乗り出し、眼下を見下ろす。

「捕縛するしかない。情報は必要だから、殺したらダメだ」

IIIAに待機してもらう為の見返り。IIIAから突きつけられた、条件だった。

条件に対し、葉宮は二つ返事で同意はしたが、戦闘に陥ればそれを気に掛ける余裕は無いと思っている。そうそう守る必要は無いだろう。

それから、二人に沈黙が下りる。

やる事も無いので、葉宮は空を見上げた。広く、眩い。街の光が無くなって久しく、都会育ちの葉宮には、中々縁のない星空だった。

「お前は」

だから少し、感傷に浸ってしまう。呟く様に、鈴木に声を掛けた。

「何で、オレに着いてくる」

「今更だなあ」

「そうだが……」

苦笑する鈴木。その鈴木が言う様に、本当に今更だった。

翼事変が落ち着いて一年が経つが、その間に、訊いた事は無かった。

満足していたのだろうか。鈴木が着いてきている、それだけで。

思い、首を傾げた。

「リーダーは、葉宮永太は修羅の道を歩もうとしてる」

鈴木が葉宮をフルネームで呼んだ。懐かしい名だった。久しく呼

ばれていない。

葉宮に両親はいなかった。翼事変より前に、事故と病気で死んでいる。施設に引き取られて、その施設も翼事変で壊滅すると、葉宮を名で呼ぶ人間はいなくなっていた。

葉宮にとつての家族　施設の皆は生きているのだから、顔を合わせる機会でもあれば名を呼ばれるだろうが、葉宮自身はそれを遠ざけている。

遠ざけず、むしろ側に置いているのは、鈴木ぐらいだろうか。

「修羅の道は易くない。紅蓮の夜津季でさえ、修羅にはなりきれない」

鈴木が言葉を続ける。

「アイツはなるつもりが無いだけだ」

「つまりなつた方が良いとは思ってない」

恐らくは、そうだろう。

親友であつても、間違つた事を言うのなら傷つける。その程度の度胸と覚悟は、夜津季も持っている。

無いのは冷酷さ。周囲を気遣わない冷酷さだ。冷酷が良くない事だと、夜津季が思っている為だ。

「リーダーと夜津季は親友だ。何で親友かつて言えば、リーダーが夜津季の思想や信条に、同意して信頼してるからだろう？」

「何度かオレは刃向かつてるがな」

「けど刃向かつた後には、すぐに仲直りしてる」
今回だつてそうだった。

夜津季は葉宮に対して、本気になって怒っていない。葉宮は夜津季に対して、気に入らない事もあるが、それは一時の感情でしかない。

「つまり、オレに修羅の道を歩んで欲しくないから、か。それはわかつた」

「何でそうするのか？」

「そうだな」

葉宮の視線が僅かに泳いだ。気恥ずかしさを覚えていた。

鈴木も、一緒だった。視線が泳いで、気恥ずかしそうに身をよじった。

「それは……」

鈴木が言おうとした、その時。

オオン……

轟音、その木霊。幽かな音。気付いた葉宮はすぐに東を見やった。暗闇が埋め尽くす中、東だけが赤く光っていた。よくよく目を凝らすと、炎が上がっている。

「鈴木、すぐに全班へ伝達！　IIIAへはオレが繋ぐ！」

「了解！」

二人はそう言葉を交えた後、すぐさま携帯で連絡を取る。

煩わしいのか、鈴木は二つの携帯を一度に使っていた。

葉宮の携帯は、僅かな接続音の後、IIIAに繋がる。正確には、夜津季の携帯。

『来たか』

繋がって一番に、夜津季が言ってきた。

電話が掛かってきた時が戦いの合図である、と覚悟していたのだから、夜津季は。

「東の果て、ヤツ等の勢力圏ギリギリみたいだ」

『落ち着けよ葉宮。それは合図という名の罠だ。合図ぐらい離れてたつて出せる。本隊は近くまで来てるぞ』

時間差攻撃、そこまで夜津季は読み切っていたか。

だとすれば相手の居場所を掴むのが第一だ。ビルの屋上にいるのだって、見晴らしの良い場所から状況を掴む為だ。

鈴木を通して他二班に指示を出しながら、葉宮は携帯の向こうにいる夜津季に、意識を集中した。

「多方向から、来るか？」

『来ない。制圧戦じゃないんだ、戦力を分散する利が無い。一点集中の後、防衛線を突破したら引き上げるだろう』

葉宮は、挟撃なら或いは、とも考えたが、戦法単位の話に過ぎないと思い直した。戦術単位ではない。ならば大凡の対応に変更は無い。

「だとすれば、オレは動かない方が良いか」

『だらうな』

「わかった。IIIAは急いで出勤してくれ、何分かかる？」

『急いで五分。持ち堪えてくれ』

五分。戦闘での五分はヤケに長く感じるが、現状把握しつつの五分ならば、そう長くはない。

気楽に臨むか。そう、思いかけたところだった。

ガガッ

軽く何かがぶつかる音。

見た。視界の端、見下ろした街の中で、何かが弾けた。恐らくは物理的な何か。

「畜生、戦闘だ！」

『ならすぐに向かえ、葉宮。すぐ側まで来てるのなら、防衛が最優先だ』

「オレが抜けても問題無いのか!？」

『警察団だつてバカじゃない、お前が情報収集しなくても、警察団がやってくれる』

「わかったよ！」

最後に怒声を返して通話を切り、葉宮は行動に出る。

屋上から、飛び降りた。五階建てのビルから。かなり高いが、滑空術を使えばどうという事は無い。特に葉宮は、出力の高い大翼の持ち主だ。

苦も無く着地すると、すぐに上空から、鈴木が飛び降りたのを感じた。鈴木が着地するのを待ってから、一緒に駆け出す。

「待ち伏せ。それしか鉢合わせる方法はないよ」

鈴木が言う。

待ち伏せ。相手の移動速度を予測しなければならぬが、葉宮は

勢力境界線での戦闘に慣れている為、地理感覚がある。移動速度は、葉宮より上にはなるまい。ならば、先回りは容易だ。

そう、思っていた。だが葉宮は失念していた。

「……ッ！」

音や目よりも先に、肌を感じ取った。飛び退く。

バジッ！

そこに、雷閃が降った。光に遅れ音がやってくる。

だが避けた次の瞬間。

ゴガッ！

何かが、葉宮の顔を殴り飛ばした。一瞬意識が飛びかける。

必死で意識を繋ぎ止め、安定したらすぐにその意識を翼に集中した。

姿勢制御。その後片手で地面を叩き、回転して着地する。顔が痛んだが、気にしている暇は無い。

「リーダー！」

袋小路から鈴木が出てきた。ともに奇襲を受けた葉宮と違い、上手く逃げ込んだのだろう。

互いの安否を確かめた後、二人は同時に前を見やる。

「大翼の黄色二枚羽根。I K Aの葉宮永太か」

一人の男が、立っていた。

奇襲か。こちらの予想の裏を読まれる事を、葉宮は失念していた。夜津季を信頼し過ぎた。

別に、夜津季が信頼に値しない男だという訳ではない。夜津季を信頼し、そこで思考停止をした、葉宮自身の隙である。

気を持ち直し、葉宮は男を観察する。

背中には単一色でない翼が生えている。小翼。黒が三枚、白が二枚、黄色が二枚だ。

反射的に、葉宮は察した。この男の他にも、敵がいる。

「なら……！」

炙り出すまでだ。

ガカツ！

雷光。遅れて雷鳴。男は雷光が閃いた瞬間には跳んで雷撃を躲していた。

そして、雷鳴と同時に、弾けた雷光に紛れて何かが飛んできた。何かが飛んでくる事は、わかっていた。だから葉宮は、攻撃を仕掛けた後一拍おいて、鈴木と一緒に上空へ跳んでいた。

雷光で照らし出された通りを見やる。通りには男一人。ならばと袋小路に視線をやる。見つけた。

もう一人。女だった。淡緑色が二枚。黒色が二枚。そして、桃色が一枚。

「……ッ！」

まさか。葉宮は思った。その翼に、見覚えがあつたのだ。躊躇、それによる空中での静止。生まれる隙。

その隙を狙って、男が攻撃を仕掛けてくる。先だつて近くの建物に着地した鈴木が、慌てて葉宮に飛びつき、救出した。

「リーダー、どうしたの？」

らしくない態度を見て、鈴木は顔をしかめて訊ねてくる。それで、葉宮は気が付いた。ようやくだった。

体勢を立て直して、道路に下りてから相手との距離をとる。

一瞬建物の中に入りやり過ごす事も考えたが、諦めた。能力者相手に、建物はあまり役に立たない。何より、逃げられる方がリスクが大きかった。

「流石はI K Aの頭目だ。奇襲したのに、死んでいない」

「当たり前さ。アレは雑魚とは違う」

バンデットの二人が合流し、言葉を交わす。

普通に話せば、葉宮の耳に届く事は無いだろう。が、二人はわざと聞こえる様に喋っている。

更にご丁寧な事に、二人は先程雷が落ちた場所に近寄る。直撃した看板が焼け落ち、炎が燃えていた。

「なッ……」

燃え盛る炎の明かりで、女の顔があらわになる。

高校生ぐらいの女。長い髪を後ろで二度結び、まとめている。

葉宮と鈴木は、驚愕した。女の顔に、見覚えがあった。

「そつだろう、永太」

葉宮を名で呼ぶ。

いないと思っていた、その人物。

葉宮と袂を分かった筈だった、家族。

「紫織、さん……」

鈴木が、名を呼んだ。

葉宮紫織。葉宮の二つ上の姉。血の繋がった、唯一の親族。

「久しぶりだな、香」

名前で呼び合う二人、葉宮紫織と鈴木香。

元々、鈴木は葉宮とは縁が無かった。葉宮は香と別の学校だったから、当然だ。

だが引き合わされた。紫織と香は同じ学校で、親しかった。その繋がりで、引き合わされたのだ。

「不肖の弟が、相変わらず世話になっている様だ。苦勞をかける」

「なん、で……」

「袂を分かったとは言え、血の繋がりまでは切れない。弟が心配なのさ、姉として」

無然とした紫織と、驚愕する鈴木。その隣で、葉宮は沈黙し、怒りに打ち震えていた。

自分のした事を忘れたかの様な言葉。戯けた様に言う声。全てが苛立たしくて仕方がない。

無心で、地面を蹴っていた。まるで弾丸の様に、建物の間を一直線にすり抜け、バンデットの二人に迫る。

紫織は笑っていた。だが笑う紫織の前に男が立ちほだかり、手を翳す。

バジッ！

雷撃。いや、雷の名もおこがましい、小さな電光。

気に掛ける程ではなかった。顔の辺りを掠った。気にせず、葉宮は突っ込もうと、して、やめた。

足下。着地しようとした場所に、突如鉄杭が突き出たのだ。避ける為、バランスを無理矢理崩した。

どうにか避けられたが、そこへ、幾つもの電光が走ってくる。鉄杭による、電光の誘導だった。

避けられなかった。電撃を、ともに喰らう。激痛と共に痺れが来て、堪らず転倒した。無様に地面を何度か転がり、建物の壁に背をぶつける。

「ぐ、アアアアアッ!」

滑空術である程度衝撃を緩和し、更に滑空術で、無理矢理立ち上がった。そして喝を入れる為の雄叫び。体勢を立て直して臨戦態勢を取る。

目の前に、男が迫っていた。

ザワッ!

「ッ!」

耳に違和感が生じた。

ノイズ。意識が揺さぶれる程ではないが、限りなく煩わしい。目の前で何が起きているのか、わからなくなった。

気が付けば、目の前にいた筈の男が、鈴木に追い立てられていた。男の背中にある、白色の翼が、目に入った。

(チィッ、能力か)

白色の翼によるモノだと、すぐにわかった。白色の能力でこういう戦い方をする人間を、葉宮は知っている。

すぐに、葉宮も鈴木に加勢した。

紫織が鈴木之死角を狙い、攻撃を仕掛けていたからだ。鈴木はよく避けていたが、それでも電撃をもらって、ふらついた。

鈴木の前方五メートル程で踊っていた男が、そこを狙う。姑息に、電撃を幾つも放とうとしていた。

「雷つてのは……」

それが自分の隙だとは、男は気付いていなかった。葉宮からしてみれば、決定的な隙なのに。

手を上げる。

「こういうモノだアッ!!」

振り下ろした。

瞬間。凄まじい雷光が、通りを埋め尽くした。

ガカアアッ!!

光に遅れたが、負けぬ程の耳を劈く轟音。

光がやむと、そこは炎で満たされていた。炎の中心。焼けただけた肉塊が転がる。

即死だった。死を感じるよりも早く、雷が全神経を焼き切り、体を燃やした筈だ。

男の追撃を振り切った鈴木から、息が漏れた。

それは拙い。

「油断するな、鈴木!」

思った葉宮が声を掛けるが、遅かった。

言葉を掛けるよりも早くに、鈴木が顔が弾けた様に吹っ飛んだ。

紫織の拳だった。鋼に包まれた拳が、夜闇に一つ閃き、鈴木を弾いたのだ。

「貴様アッ!!」

見た葉宮が、間髪挟まず飛び出した。

「大胆不敵」

紫織の口端がつり上がる。

葉宮が寸前まで迫った。振り上げられた拳が、唸りを上げる。

ザシャアッ!

「ッ!?!」

血飛沫が、舞った。粘りけを帯びた深紅の液体、視界を完全に覆い尽くす程の量。

何故? 拳を繰り出そうとしたが、まだ紫織に当たっていない。ならば、自らがやられたのか、と葉宮は錯覚した。

だが違った。葉宮の体は無傷である。じゃあ、一体？

「油断大敵？」

血飛沫の向こう。口元の歪んだ紫織の姿が、見えた。

気付くと、葉宮の体は吹っ飛ばされていた。背中を強か壁に打ち付ける。

意識が、朦朧もうちゅうとしていた。定かにならない。目の前がクラクラとして、頭で何を考えても、形にならなかった。

「い。るか？　おい、聞こえるかい？」

数秒して、ようやく耳が聞こえる様になっていた。紫織の声に反応し、葉宮が僅かに視線を持ち上げる。

「ようやく聞こえたか。どうだ気分は」

「……」

声を出そうとしたが、出なかった。どんな言葉を出せば良いのかすら、わからなかった。

「声も出ないか。まあ、無理も無いな。完璧に顎を打ち抜いたんだ。数分は立つ事すらできないだろうね」

言いつつ、紫織は屈んで何かを拾い上げる。

「だから永太は、見てるだけ。な？」

そして、拾い上げた何かを差し出してくる。

何だと言った。霧散むさんしている意識を、集中する。

すぐに、わかった。目を見開く。

紫織に殴られ頬骨ほおほねを砕かれた、鈴木顔だった。

完全に意識を無くしている。目は虚ろで、瞳孔どうこうは開ききっていた。紫織はその鈴木を、モノの様に扱い、頭を鷲掴わしつかみにし、差し出していたのだ。一瞬生首かと錯覚したが、幸い胴は離れていない。

「き、さ、ま……ッ」

「永太は良いよな。大翼の、そんな良い能力持ってたさ」

鈴木を真正面の壁にもたれさせ、紫織は呟く。

「私は持ってなかったよ。血飛沫を上げる能力だけだ。全然使えな

いだろ、そんなの。しかも片翼だし」

言いながら紫織は、鈴木木の、青色の翼に触れた。綺麗な青色だった筈のその翼が、黒に染まっていくな。

翼獲り。その前段階。

翼の能力は、身体を自由を奪った所で、抑えられるモノでない。だが封じる事はできる。相手の翼に触れて、特定の属性の能力をそこに使う事で、相手の翼を封じる事ができるのだ。

「怖かったんだよ。そんな能力で、身が守れるのか。だから私は、バンデットになった」

「そ、んな、事で……」

「許される事じゃない、わかってる。許せとも言わない」

一枚ずつ、鈴木木の翼を封じていく紫織。

翼の封印処置には、酷く手間が掛かる。一枚ずつ、封印していかなければならない。だから戦闘中の封印は困難だ。普通はできない。こうして相手を身動きできなくして、周囲の危険性も排除した状況で、ようやくできる事だった。

「でも、わかるだろ？ 永太なら。私がただ他人に守られるだけで満足できる女なのかどうか」

それは、そうだろうと思った。

葉宮が腕力を付ける前、まだ上級生に勝てる程の力は無かった頃。それでも上級生に反発した葉宮は、よく、紫織に助けてもらっていた。

紫織は、頭が良かった。宿題を教えてもらった事等、数知れない。一緒に悪戯いたずらをして、怒られた事もある。時には葉宮の悪戯を庇ってくれた事もあった。

力強く、けれど優しい姉だと、思っていた。

「じ、あ……。何で、アイツ、から……」

「施設の子から、翼を獲ったのか？」

血が繋がっていないからか。それとも実は、嫌いだったのか。言っただろ。怖かったんだ」

「な、に？」

「私なんかの能力で、他人から奪うのが。私を信じてくれて、そんな相手から奪うしか、無かったんだ」

だが、答えは打算だった。計画的な裏切り。人からの無償の信頼を、自分の利の為に、紫織は裏切ったのだ。

「よし佳　あの子は、翼を獲る事を、承諾してくれたんだ」
「何ッ」

しかし、次の言葉は初耳だった。あれから、芳佳、襲われた妹は口を利かなくなったのだ。

だから葉宮には、知りようもない話。
ならば紫織の「嘘」、口からでまかせか？

（違う）

思ったが、すぐに自らが否定した。

芳佳は別に、精神的なショックで口を閉ざした訳では、なかったのだ。葉宮とは口を利かなくなったが、周囲とは自然に話している。だから、精神的なショックから来るモノじゃなく、葉宮と話せない理由を持っていると考えた方が、シツクリ来る。

それが、自らが望んだ事によって紫織をバンデットにした、という事なら？

葉宮よりも五つも年下の彼女が口を閉ざすのは、仕方ない事じゃないのか。

「ホン、ト、なのか……」

「信じてくれとは言えない。後で、芳佳からでも聞いてくれ」

「……」

「でも、な」

鈴木全ての翼が、封印された。そこで葉宮は気付いた。

そうじゃない。今は鈴木のを、気に掛けるべきだったのだ。過去に何があつたかじゃなく、今何をされるかが、重要なのだ。

「私はもう、ヴェノムのバンデットなんだ」

「やめ、ろ」

制止の言葉。

「こうしなきゃ、伊岸に、殺されるんだ！」

紫織が、潤んだ瞳をつぶり、鈴木のを翼を掴んだ。そして、思い切り手を引いた。

翼が引きちぎられた。

「アアアアアアア……ッ！」

鈴木が慟哭を上げる。

葉宮の目が、見開かれた。その目から、涙がこぼれる。

引きちぎられた翼の根元が、青白い光を放っていた。その光が、ポタリとこぼれ落ち、霧散する。まるで血の様に。

三枚。引きちぎられていた。紫織はその三枚の翼を、自らの背中に、押しつける。

「す、ずき」

葉宮の口から呟きが漏れた。だが、鈴木の間からは、悲痛な呻き声が漏れるだけ。

「えい、た……」

呻き声の中、葉宮の名前を呼ぶ鈴木。

ザワ

それを見て、胸が、ざわめいた。

ザワザワ

鈴木は家族じゃない。けれど、傷つけられて平気な相手か？

否だ。断じて否だ。じゃあ何で、自分は涙を流してる。

泣くだけでどうする。泣いても良いが、何かをしなければならなのではないか。それなのに自分は、泣いて、何かを諦めかけてないか。

(……)

気付いた。否定できなかったのだ。

なら、諦めるな。立て。拳を握りしめろ。目を見開け。ざわめく胸の内を、混沌を、ぶつける。

言い聞かせ、葉宮は。

「ウアアアアアツ!!」
咆哮した。

第六章 「血色」 2

2

「え、いた」

弟の変化に、紫織は気付いていた。驚愕に顔を強張らせる。数分は立てない筈の葉宮が、立っていた。力強く。雄々しく。

「怖いかよ」

何故そう見えるのか、紫織には一瞬わからなかった。目をこすってみる。

「オレが怖いかよ。伊岸が怖いかよ。周りが、怖いかよ」

視界がハッキリとする。

わかった。葉宮の翼が、光り輝いていたのだ。

黄色の翼はさながら、黄金の光を帯びている。それが後光にも似た光景を生み出している。

「何、ソレ」

「見た事が無いのか。 何でだ？ オレは見た事があるぞ。特別珍しいモノじゃないからな」

葉宮はそう言うが、紫織は見た事が無かった。

翼が光り輝くなんて事、全く知らない。光り輝いて、一体何が起きると言うのか。

「発光状態って言うんだよ」

煩わしげに、葉宮は近くの瓦礫を横に押しのける。

軽く蹴っただけに思えたが、瓦礫は、軽く数メートルは転がった。
「ッ！」

「気持ちが昂ぶると、こうなる。別になれるヤツが限られてるって訳じゃない。強いヤツとか能力が上等なヤツよりも、感情が豊かなヤツの方が、なり易い」

「光って、どうなるって言うんだ!？」

「翼の出力が上がる。が、能力の話じゃない。滑空術ぐらいにしか作用しない。尤も、強化率は半端じゃないがな」

更に近くにある瓦礫を、葉宮は踏み砕いた。

「わかるか？　なあ、わかるだろ？」

「何、が……？」

「オレが今、どんな気持ちなのか」

葉宮の言葉に、紫織の身が竦み上がる。

だが本能を総動員して、地面を蹴らせた。数メートルの距離をとる。

葉宮は横たわる鈴木を見やった。慈しみ、愛しげな視線を投げかけ。

「コイツを傷つけられて、オレがどんな気持ちになったのか」

目を伏せ、言葉を紡ぐ葉宮。それに、紫織は答えなかった。

だから葉宮は紫織に向き直り、唇だけを動かす。言葉の答え。

コ・ロ・シ・タ・イ、と。

瞬間、葉宮の目が見開かれた。

まるで、光線だった。残像を目で捉えるのが精一杯。後ろに回られたと気付いたのは、感覚ではなく勘だった。

避けなければならぬ。勘が告げる。従い、上体を捻った。

ダゴオツ！！

風圧、脳が揺さぶられる。寸での所で躲かわした。

躲した拳は、紫織の後ろの壁をぶち抜いた。貫かれた壁、幾つもの亀裂が入る。凄まじい攻撃力を発揮していた。

（何で、あんなに……）

後ろに倒れ込む様に後ずさり、近くの建物に飛び込んだ。

小さな新聞販売店。既に機材は運び出され、何も無いまっさらな空間となっていた。

姿勢を立て直し、慌てて外を見やるが、建物の外に葉宮の姿は無い。

「ハア、ハア」

空間に響くのは、紫織自身の息遣いだけ。もう一人の声は、足音は、気配は、感じ取れない。

ビシッ

そこへ、音。何かが割れる様な、亀裂が入る様な、そんな音だった。今度はそれが何なのか、理性でわかった。

前へ跳ぶ。同時、後ろの壁に大穴が空けられた。

葉宮だ。葉宮が手を伸ばし、紫織を掴もうとする。一瞬その腕の中に入ったが、一瞬だった。すり抜け、紫織は葉宮の腕から離れた。通りへ躍り出る。続いて、距離を取る為に逃げた。すぐに葉宮も出てきた。

「そっちか！」

紫織がどちらへ逃げたか確かめ、追ってくる。移動速度が違いすぎた。紫織が五メートルを移動する間に、一〇メートル以上距離を詰めてくる。

「来るなアッ！！」

想像した。荒々しい砲弾。吹きすさぶ風。紫織が妹から奪った、緑色の翼による力だった。

不可視の風の砲弾が、葉宮に迫る。回避行動を取るには互いが速過ぎた。

だから。

「効くかア！」

葉宮は、風の砲弾を片手で弾いた。裏拳。ただその一撃で、一人を弾き飛ばす筈の砲弾が、儚く砕け散った。

紫織がその事態に驚愕きょわくした時、葉宮の手が、紫織を捉えていた。ズガアッ！

行き止まりの建物に、紫織は叩き付けられた。

「か、ふッ……」

息と共に血が溢れる。

鎖骨の下を、葉宮の掌が抑えつけていた。肋骨を、叩き折られた。鈍い音が響く。共に訪れた激痛が、体の芯を熱くする。

「妹は良い。だがな、先生は？ 何で先生まで巻き込んだ」

紫織を壁に抑えつけながら、葉宮が言う。

「ソレ、は」

「打算したんだろうが！ 邪魔だったんだろ、妹の翼を奪うのを、止められると思ったから！」

容赦の無い尋問だった。

紫織は、頷けなかった。代わりに、沈黙で肯定する。

「可愛い可愛い自分の為に、他人を傷つけたんだよお前は！ 覚悟したんだ！ バンデットとして生きる事をな！！」
違う。

首を横に振ろうとした。首は抑えつけられていなかったが、軽く揺らすだけで、精一杯だった。

それでも、葉宮には伝わる。

「何が違うんだ？ 違わないだろう、なあ？ 自分が傷つくぐらいなら、他人を傷つける事を選んだんだ！」

葉宮の言葉に、涙が溢れる。

何が、違うと言うのか。今こうして、葉宮は紫織を傷つけている。それ以外にも、多くの翼持ちを傷つけてきた。

違うのは、翼を奪うか、そうでないかだけではないのか。

「そうだ。オレとアンタの間に、違いは無い」

紫織の言いたい事を察したか。或いは、自分で気付いていたか。葉宮が言う。

「神様が裁けば、オレとアンタは同じ所に堕ちるだろうさ。けどもな、この世界で生きるなら、違う」

「何、で」

「オレは敵だけを傷つける。アンタは、見境無く気づける。その違いだ」

「そんな、違いに……。何の、意味、が」

紫織は、必死の思いで訴える。

「人間はなア、どうしよもない生き物なんだよ。自分以外の誰かに

は、なれないんだ。だから皆が皆、自分が可愛い。でも人間は弱い。一人だけじゃ、生きていけない」

まだ葉宮の翼は、光っている。口調は冷静になっているのに、まだ気持ちは収まっていなかった。

「だから仲間が必要なんだ。頼り頼られ、好かれ好く、そんな仲間が。そしてそんな仲間だからこそ、自分以外を愛するっていう、ほんのちよつとの気持ちを抱く事ができるんだッ」

「ッ」

「それなのに……」

葉宮の表情が、苦悶に歪む。

「アンタは立つ位置を見誤ったんだ！ オレは、オレ達は……！ アンタを頼りたかった、好きだったんだ！」

「永太……」

「なのに、アンタは、アンタを愛してもいないヤツ等の所に、行っただんだ……」

葉宮が、涙を流す。頬を伝い、それが地面にこぼれ落ちる。

いつの間にか、葉宮の手は放されていた。紫織の体が、ずり落ちる。

「殺し、て」

とんでもない事をしていた。弟が、それを気付かせてくれて、正しい道を示してくれている。

その落差によるどうしようもない思いが、紫織の胸を締め付ける。

「断る」

葉宮は吐き捨てた。

「誰かを殺せば、楽に死ねるなら。人間は皆で殺し合えば良い。けどな、そうじゃないんだよ。だから、お前は生かす」

まだ、葉宮の翼は光っていた。

「少しは自分の為じゃなく、人の為に生きてみせる。殺す殺してだのという話は、それからだ」

紫織が、泣き崩れた。

折れる姉の体。響く慟哭。

「……ッ！」

それらを一身に受けた葉宮は、言葉にならない声を上げた。

「葉宮ッ」

そこで後ろから、声を掛けられた。

見やる。真つ赤なコートを羽織った長髪の男、夜津季が、駆け寄ってきていた。

「ここは別働だ、夜津季。二人しか、いなかった」

「別働だつて？ いや、それより、被害は……」

夜津季が言うのを、葉宮が手で制する。

「伊岸や他のヤツ等が、ここにはいないんだ。夜津季、お前はそっちに向かえ。オレのやらなきゃならない事は、オレがやる」

「葉宮……」

夜津季の視線が、通りの向こうに倒れた鈴木と、側にいる紫織とを捉えていた。

何か言いたそうにしていたが、意を決した様に表情を引き締め、踵を返す。

「オレは本隊の方へ向かう。お前は、無理せず救援を待て」

「わかった……」

それだけを言って、夜津季は地面を蹴った。夜の闇を、紅蓮が駆けっていく。

見送る葉宮の翼は、既に光を失っていた。

3

事が起こる前、IIIIAはそれぞれの時間を過ごしていた。

夜津季と穂波と藍とで、女風呂で談笑し、道治は上で真知と一緒にお茶を淹れる。そんな時間の過ごし方だった。

傍目には和気藹々とした子供達に過ぎないかもしれないが、そうやって時間を過ごしている当人達は、言いようもない緊張感を感じ

ていた。

そして、葉宮からの電話が掛かってきた。

「リーダー、襲撃！」

夜津季が電話を受け取ったと見るや否や、藍が真知達を呼びに行く。穂波も出勤の為、私服の上からジャケットを羽織る。

夜津季の電話が終わると同時、真知達が戻ってきた。藍の手には、紅蓮の異名を持つコートが抱えられている。

夜津季は藍から紅蓮のコートを受け取り、羽織った。

「やつきー、状況は？」

「神戸市の方角から轟音。防衛線ではもう戦闘が開始されたみたいだ。遊撃と防衛の両方を提案する」

こういう時の指揮は、まだ真知の領分だった。戦場に出るまでは、夜津季は参謀に徹する。

数秒考えて、真知は判断を下した。

「防衛担当は私と藍ちゃん、遊撃はやつきーとゆーのでよろしく。どう君は必要人員の手配よろしくー！」

「了解ッ」

道治が一番に出て行った。

その後に真知と藍が続く。夜津季は最後まで動かなかった。

「やつきー？」

一向に動こうとしない夜津季に、下から顔を覗き込む様に声を掛ける穂波。

夜津季は、考えていた。そういう時は動きながら考える事が多いのに。立ち止まって考えるのは、夜津季にしては珍しかった。

「行くか」

だが結局、何も言わずに夜津季は動き出す。穂波は顔をしかめながらも、後を追った。

銭湯を出て、東へ向かう。途中建物が幾らかあったが、全て飛び越えて、直線距離で向かった。

ただ勢力境界線に近づくに連れ、戦闘の音が聞こえてくる。喚声、

轟音、炸裂音等だ。一際大きな雷光も見えた。葉宮の能力だろう。

厄介なのは、それが全て一力所で起こっている訳ではない事。北、中央、南の三力所で起きている。

「二手に分かれよう」

それを受けて、夜津季が言う。直前に舌打ちを漏らしていた。

「北が派手だ、如何にも陽動の働きをしてる、北は無視する。残るは中央と南だが、オレが葉宮を救援する」

「葉宮は中央だから、私が南？」

「足止め程度で良い。その間に速海達にヤツ等の進行方向にへ先回りしてもらえば、それで済みだ」

指示を出す夜津季の翼は、既に黒に染まっていた。敵が来る事を見越して、夕方から能力を決めていたのだ。

夜津季の翼は、能力を決定した後三〇分で変更可能となるが、あくまで変更可能というだけであり、三〇分が経過すると途端に能力が失われるという訳ではない。だから、最初の最初だけその能力を使ってから、別の能力に変えてしまうという戦法ができる。

翼事変以来、夜津季が突き詰めた能力の使い方の一つである。

「オーケイ、早く来てよね」

「女を待たせる趣味は無いよ」

ニヤリ、と笑う夜津季を横目で見て、穂波は暗闇の街に消えた。

穂波が夜の街を走る。気持ちの良い風が吹く夜だったが、今となつては些細な事である。

数百メートルを走った後、三階建てビルの屋上に上り、そこから穂波は眼下を見やった。

視界の端で若干の光が閃く。反応し見やると、すぐ近くの通りで暗闇に紛れて男達が数人西に向かって走っていた。

複数色の翼。暗闇の中でも、ソレは見えて取れた。

男達の先には警察団が何人か待ちかまえており、今か今かと通りの真ん中でうろついている。

「ああ、もうッ。隠れて奇襲でもすれば、一人ぐらい仕留められるってのに！」

愚痴をこぼしながら、穂波は構える。想像する。弾ける赤い光の槍。

敵が警察団に迫ろうとしている。警察団は襲撃に驚愕しているが、相手は既に迎撃態勢に入っていた。

今しか無かった。

バジッ！

朱槍を放った。数本の光閃が瞬き、敵を貫く。

力無く敵が崩れ落ちるのを確かめてから、穂波は警察団の方へ回り込んだ。

「IIIIAの穂波結乃です。ここは一旦退いて、一度上からの指示を仰いで下さい！」

警察団の人間が問う間も与えず、穂波はまくし立て彼等をこの場から退けようとする。

正直言って邪魔だったのだ。体の良い誤魔化しである。

「し、しかし、相手は……」

「紅蓮の夜津季がすぐに来ます」

一度は反論してきたが、夜津季の名前を出すと、すぐに警察団の人間は逃げていった。

見送り、穂波は通りに意識を集中する。

（動いてる、敵が）

建物の影を通って、少しずつ蟻ありの様に移動してきているのが、感じ取れた。

少しずつの移動ならば、穂波に分がある。敵の位置に瞬間的に回り込んで、一撃離脱を繰り返せば良いのだ。

そう判断を下し、穂波も移動しようとした、その時。

ギシシィ

「ッ！」

軋む音。聞こえた時には、穂波は中空へ跳んでいた。通りに水色

の風が吹き抜ける。

その風を起こした張本人が、東の通りの真ん中に、立ちはだかっていた。

「通りの真ん中で仁王立ちなんて、流行んないってば！」

飛びながら、朱槍を放った。男に迫る。

が、男は再び水色の風を吹かせ、朱槍を雲散させる。

その間に、少しずつ移動していた集団が、一気に移動した。気付けば通りの向こうへ、向かっている。

「あ、コラ！」

気付いた穂波は着地するや、慌てて集団を追いかけてようとする。

ビュウッ！

だがまた風に吹かれ、立ち止まらざるを得なかった。

（今度は、つめたくない。単なる風？）

冷たさは無くても、目は開けていらなかった。

風が止むまで目を閉じ続け、そして止んだ事がわかり目を開けば、敵の姿は無く、通りの真ん中に男が立ちはだかっていた。翼を見やる。赤一、水二、淡緑二の中翼。

「こないだ、やつきーが倒したバンデットと同じ？」

穂波が駆けつけた時、夜津季の横に倒れていたバンデットと、同じ翼の組み合わせ。故に穂波は、構えを取り男に向かう足止めをする筈が、足止めをされる格好になっていた。

とは言え、戦闘は生死のやりとりである。油断、後悔、躊躇といった邪魔を払いのけ、目の前の敵に集中する。

一つの通りで、二人が対峙する。

ゴウウッ

仕掛けたのはバンデット。またもや強烈な風。

風的能力だが、大した能力じゃない。強風が吹いて視界が少し霞むだけだ。

踏ん張り、ジックリと前を見れば、問題は無い筈。そう思うが。

ギシシィ

「な!？」

風音に紛れた何かが軋む音を聞いて、穂波は驚愕した。同時に思い出した。バンデットは、同時に違う能力を使う事ができるのだという事を。

慌てて、手を前に翳した。

「無駄だッ！」

「無駄なのは、そっちイ！」

叫ぶバンデット、叫び返す穂波。

想像する。目の前を覆い尽くす朱色の壁を。

ジジッ……!

「私の能力はねえ、簡単なのよ！」

イイイイン

朱色の壁が出来上がる。水色が周囲を染め上げる。それは同時だった。

「^{アカツチ}朱雷! 単に雷が朱いだけだけど、その朱い雷を、自由自在に使いこなせるんだから!’」

僅かに足が凍り付いたのを感じたが、大した事は無いと言い聞かせる。

虚勢。その為の雄叫びだった。

「赤い翼の黄色の能力! ちゃんと使いこなせばねえ、夜津季にだって負けないのよ!’」

自由自在に形を変えられる、その力。自らの能力に誇りを持つ穂波は、雷の障壁を造り風が通り過ぎるのを待った。

足が死ぬ程痛くなってきた。もう立っていられない、と何度も頭の中で呟く。だが頑張って立ち続ける。

ウウウ……

風が通り過ぎた。それを待っていた。穂波はすぐに朱槍を作り出し、発射準備に入りながらも索敵する。

そして見つける。相変わらず、穂波の正面にバンデットはいた。「終わりだ」

その手には、紅蓮の剣。大剣の様な形をした、炎。それが、バンデットの手を離れる瞬間だった。

（回避……ッ！）

思って穂波は足を動かそうとしたが、突き刺さる痛みで動きを止めた。

そう、穂波の足下は氷で固まっていたのだ。回避等、できる筈が無い。

穂波の思考が、完全に停止する。ただ、流れる風景を見ていた。突然剣が横にぶれて、通りを見ていた筈なのに、いつの間にか、夜空を見上げていた。

「へ……？」

力無く呟く。何でこうなっているのか、不思議で堪らなかったのだ。

キョロキョロと、辺りを見回して、ようやく気付いた。

自分の側に、誰かがいる。

やがて意識が鮮明になってくる。そうやってようやく、誰が側にいて、自分がどうなっているのか、気付いた。

「大丈夫か、穂波」

ビルの屋上で真っ赤なコートをはためかせ、声を掛けてくるその男。

紅蓮の夜津季。彼が穂波を抱き上げていたのだ。

「な、ななな……！」

「その様子じゃ、大丈夫じゃないみたいだな」

微笑にも似た苦笑を浮かべ、夜津季は穂波をそつと優しく隣に下ろした。力無く、穂波はへたり込む。

それから夜津季は、微笑を消して、眼下を見やった。

「また会ったなア、バンデット」

言い放つ夜津季。顔は無表情。だが顔色程に、声色は無感情ではなかった。

抑揚を付けた喋り口。そこからは、苛立ち、敵意、殺意が感じら

れた。

「全くだな、紅蓮の……。いや、違うか」

バンデットは言いかけて、自分でやめた。

「八月巧斗^{やづきたくと}」

そして発した言葉に、穂波は吃驚した。

八月巧斗。夜津季の、紅蓮の夜津季の本名を、バンデットが言うてのけたからだ。

「参謀長に聞いたんだ。お前は名を捨て、紅蓮の夜津季として戦う事を選んだ、ってな」

それは、真実だった。

親に迷惑が掛かる事を恐れた夜津季が、名字の音だけを残して、改名していた。

八月という名字を、夜津季という名にして、音だけを残す。そうすれば、誰もソレが本名だとは思わないだろう、と。

「で？」

巧斗が冷徹に言い放つ。

声色には、明らかに怒気を孕んでいた。思わず、穂波は巧斗を見上げた。

「本名がわかって、それが何の役に立つ？」

笑っていた、嘲笑に近い笑み。対するバンデットも、笑みを浮かべている。

二人の異なる点は、巧斗の翼が黒金色に光っている事だろう。

「取り越し苦労だったただけだ。オレはお前を殺したい。が、弱いままのお前じゃ意味が無いッ。本気のお前を倒してやりたかった、それだけさア！」

バンデットが吼える。

「フッ……。ハ、ハハ、ハッハッハッハッ」

その言葉に、巧斗は笑い声を上げた。夜の街によく響く、乾いた笑い。

「昂ぶってるな、バンデット」

「ああ、昂ぶってるさ！」

威勢の良いバンデットの返答。

巧斗は見下したまま、笑みを浮かべた。

「じゃあ訊くが、何で翼が光ってない？」

巧斗の言葉に、バンデットが怪訝に顔を歪める。

「何だよ、答えられないのかよ？　じゃあ教えてやるが、奪った翼は所詮奪った翼。お前の気持ち、感情には呼応しない。そしてそれが、お前が本来持つ翼に作用する力をも、邪魔するんだよ」

巧斗が、床を数回踏み叩く。その都度、床が揺れた。ドンッ、ドンッ、と強く殴られる様な揺れ。

「わかるか。つまり、バンデットは発光状態になれない」

「それがなんだって言うんだ？　代わりに、オレ達は複数の能力を同時に使用する事ができる。滑空術等よりも、能力の方が圧倒的に優れている事はわかってる筈だ」

「それが、戦いをわかってないって事なんだよ」

更にザシッザシッと、地面すれすれを何度も蹴る巧斗。

「戦いなんてのは、弱いヤツを見つけて、なぶれば良い。で、見逃せない敵を殺すだけだ。つまり、普段は弱くとも良いんだ。見逃せない敵を見逃さないだけ、強ければな」

「何が言いたい」

「過剰性能ってヤツなんだよ、お前等バンデットは。能力を使いこなせないクセに、高望みしやがって。そんなだから、バンデットはオレ達みちに光るヤツを倒せないんだ」

しかしそれだけやっても、巧斗の苛立ちは少しも解消されなかった様だ。

腕を後ろへ伸ばし、背中を曲げ、今にも襲いかかろうとしている。バンデットも、戦闘態勢に入っていた。

「それは！」

「自分の命で試してみろ！！」

男達二人が同時に叫び、地を蹴った。

凄まじい速度で二人の距離が近付く。だが端から見れば、それは一方的に、巧斗の方が迫っている様に見える。

巧斗は、いつ地面に足を着いているのかわからない程の速度で、加速を繰り返している。

まるでそれはクレー射撃。的と弾丸の速さが同じな訳が無いのだ。バンデットもすぐに気付いた。減速し、方向を変えようとする。だが、間に合わなかった。

ズドオッ！！

巧斗はバンデットの顔面を捕まえ、建物の壁に叩き付けた。衝撃に壁が崩れ、土煙が上がる。

その中から一人、巧斗が飛び出した。跳躍、後ろ飛び。飛び出した巧斗の周囲には数本の剣が浮かんでいた。

やる。思ったら、巧斗は剣を土煙の中へ、突っ込ませていた。コンクリートが碎ける音と共に、鈍い音が僅かに聞こえた。

「良くやったよ、バンデット」

近くの屋上に下り立ち、巧斗が呟く。

「宿題は合格だ。オレの仲間を、友達を、傷付け殺そうとするとはな。十分な強さと、悪だった」

それから、穂波の所へ戻ってきた。

「穂波、大丈夫か？」

「え、えと……」

穂波は少し戸惑う。今の巧斗に、夜津季ではない巧斗に、どうやって顔を合わせたら良いか、わからなかったのだ。

だが。

そんな事お構いなしに、巧斗は屈んで、穂波の足を見やってくる。程良く引き締まった足は、短いデニムパンツのお陰で、太ももまであらわになっている。

「ッ！ あんたはドコ見てんの！！」

「グフッ！？」

蹴った。思い切り、鼻頭を。膝で。

「ち、ちが……。お前、足を凍らされただろ……」

「え、あ」

鼻を押さえて呻く巧斗の言葉を聞いて、ようやく穂波は事情を理解した。

足首辺りを見やる。足は、未だに凍り付いていた。

「これくらい、何とも無いわ」

言っと、穂波は手に朱雷を宿した。その放熱で、氷を溶かして行く。

「能力で、凍り付いている箇所は削ったんだがな」

巧斗の方の鼻頭も、発光状態に伴う強化で、大したダメージは受けなかった様だった。

「それで、助けてくれたの？」

「ああ。無事で何よりだよ、ホントに」

巧斗は一際盛大なため息をついて、ジッと穂波を見つめる。

「な、何よ！」

視線にすぐに気付いた穂波は、顔を赤くしつつ言い返す。

「言っただろ、無事で良かったって」

「そんな事、今しみじみ言う必要無いじゃない！」

「全くだ」

そこで、穂波は異変に気付いた。

巧斗が、何かを躊躇している。そして、怯えている。何故今更、と思ったが、すぐに察した。

「伊岸と戦うのに、戸惑ってる？」

「……」

同意の代わりに、巧斗は苦笑をよこした。

例えば、八月巧斗の名で呼ばれた時に、巧斗は欠片も動揺を示さなかった。それは、既にこの戦いで、八月巧斗に立ち戻っていたからなのではないか。

銭湯を出発する時に考え込んでいた、あの時には既に、巧斗に立ち戻っていたのではないだろうか。

「やつきー、何を考えてるの？」

この期に及んで話すべき事じゃないかも知れない。けれど、その疑問は、穂波が常々抱えていたモノだった。

「色々、さ。色々」

「何なのよ」

「言葉にできないし、お前に話すべき事でもない。そんな気がする」
「やっぱり、何を考えてるのか、わからなかった。」

嘆息する。巧斗の自己中心的さもそうだが、その核となる自己が無さそうに見えるのが、何とも歯がゆかったのだ。

「じゃあ、一言だけ」

だから自分にできる事は、こうする事だけだ、と思った。

「ちゃんと、生きて帰って来なさい」

「命令か」

「帰って来てちょうだい。帰って来て下さい」

キツときつく睨み付けながら、穂波は言う。

「帰って来てくれなきゃ、ダメだから」

けど最後、穂波は視線を外してボソリと呟いた。

聞いた巧斗はキョトンとする。

「フ……」

が、気が付き、軽く笑った。

無言で、踵を返す。背中の翼はまだ光っていた。昂ぶっている証拠だ。

それから、瞬く様な速度で夜闇に消えた。

直後に西で轟音が轟く。敵が一人になった、と穂波は察した。

第六章 「血色」 3

4

三日の間、工藤は伊岸に付き従い、部下のバンデット達を鍛え抜いた。

バンデットの多くは素人同然だった。能力の使用にすら躊躇いを持つ程。一応バンデットとして選抜する際に戦闘は行わせている筈なのだが、長く戦闘に関わらなかったせいで腑抜けてしまった様だった。

だからまずは、戦闘の感を思い出させた。伊岸と共に、本気で襲いかかったのである。

戦いの中で一人が死んだが、これが良い方向へ働いたのか、残ったバンデットは奮起し躊躇を消し去った。

以後は戦闘技術を叩き込んだ。滑空術に関しては、最早慣れで覚えさせた。教えたのは、いつ、何をされれば、どうするのか、という事ぐらいだ。

途中で、松吉という男が参加しに来た。夜津季と戦闘し、敗れて負傷したのと言う。それで参加が遅れていた。

しかし問題は無かった。松吉という男には躊躇が無く、複数の能力を同時に使用する技術を覚えただけでも十分だったのだ。使い道のある男になっていた。

「結構な仕上がりですね。三日の突貫訓練と考えれば、満足できる結果でしょう」

調練が終わった翌日、午前中を休息に当てた。

ただ、伊岸と工藤は作戦を練る為、社長室に籠もり話し合いを続けていた。

「特に優秀なのは誰ですかね、工藤さん？」

「実力で言えば、松吉、葉宮の二人が抜き出ていると思います」

「葉宮さん、ですか？　ちょっと押しが弱い気もしますが」

「味方をも信用していない節があります。そういった人間は物事を徹底的に打算し、自らが生き残る事を何より優先する為、任務遂行率という点から見れば悪くないと思われます」

「ふむ、成る程」

伊岸が頷く。工藤も満足げに頷いた。

工藤は、伊岸から信を置かれている、と感じていた。少なくとも周囲のバンデットよりかは、優遇されている自覚があった。

だからか、最近は伊岸に対する忠誠心も芽生え始めていた。

「ですが、組織としては要りませんね」

「は、と言いますと」

「味方をも信用しない味方。考えてみれば、厄介この上ない人材でしょう」

普通に考えれば、その通りである。

「立ち位置が曖昧なんですよ、彼女は。相手の敵になりきってない。私達の味方にもなりきってない。敵はそれでも彼女を殺せば良いだけですが、味方は彼女を活かさなければなりません。厄介な話ですよ」

「ではどうされますか」

工藤の問いかけに、伊岸は机の上に視線を落とした。

机の上には、地図が広げられている。この辺りの地図と、姫路近辺の地図だ。

しばし地図を指でなぞって、考え込んでいたが、やがてトントンと一力所を指さした。

「別働部隊を一つ任せましょう」

「別働部隊、ですか」

工藤も地図に視線を落とした。

姫路の辺りに赤い線が引かれている。この線が即ち、姫路行政区の勢力圏であり、相手が防衛戦力を配置している場所、防衛線である。

防衛線はかなり長く、これは防衛に相当数の要員を割かなければならないという欠点を持つが、それだけに堅固な防御力も有している。

例え戦力を一点集中し突破しても、周辺から相当数の人員が集まり、結果的には分厚くなってしまう。バカ正直な正攻法では、破る事は難しい。

「別働部隊を編制したとして、どうなります。奇襲し、上手く勢力圏の中に入り込んだとしても、どうやって我々と連動を？」

「まあ無茶な話でしょうね」
「では」

「だからこそ、彼女に奇襲をさせるんです」

意図を図りかねた。工藤は怪訝な表情で、伊岸を見やる。

こういう事は少なくなき、そういう時は決まって、伊岸は勝ち誇った様な笑みを浮かべる。今回もそうだった。

「戦術的に考えて、退路無き奇襲は、愚の骨頂ですよ。したらダメな策です。友軍が退路を開くならともかく、それすらも無い奇襲は、単なる鉄砲玉に過ぎません」

「捨て駒、という事ですか」

「そうなりますね」

アッサリ、伊岸は言い放った。

捨て駒。つまり死ねという事。つい昨日まで伊岸自ら鍛え上げた部下なのに。それを斬り捨てる事に、伊岸は躊躇いが無い。

「戦術的に見て、完全に無意味な別働部隊。だからこそ、相手の予想の裏を突く事ができます。で、そういう時相手は焦って戦力を集中させてしまいますから、これは即ち陽動としても役に立ちます」

「 不要な人材を処理するには、丁度良い作戦ですね」

「そういう事です」

朗らかに笑う伊岸を見て、やはり、と工藤は思う。

伊岸は年上の自分よりも、深くを、そして広きを見ている。

大局的な戦略眼と言うのではない。むしろ、局地的な戦術眼だ。

伊岸はそれが凄まじい。

上官として、彼程優れた人材はいないだろう。忠誠心と共に、何か別の感情が湧き上がってくるのを、工藤は感じざるを得なかった。そして夕刻になり、神戸市郊外に人員が揃った。

流石に逃げる人間はおらず、先日までの訓練に参加した九名、全員が揃っていた。伊岸と工藤も含め、十一人。

十一人を、伊岸は三つに分けた。一つを葉宮紫織に。一つを工藤に。一つを伊岸が担当する。

本隊は工藤の隊で、計八名。葉宮紫織はの隊は計二名。伊岸自身は、単独だった。

紫織に疑念を抱かせない為、伊岸自身も奇襲を敢行し、本隊を工藤のモノとしたのだ。

ここまでされては、紫織も自らの役目に疑問を抱く事等、無かつただろう。

「気を付けて下さい、工藤さん」

伊岸が立ち去る前に、工藤に話しかけてきた。

「相手方には、”噴火する化け物”という異名を取る、厄介な能力持ちがいるそうです」

「噴火する化け物？」

「能力を見た人間の殆どは、死んでいるそうです。かろうじて生き延びた人間の話によると、極大の炎が突然発生して、味方を焼き払ったとか」

随分物騒な能力に、工藤は背筋を震わせた。

伊岸と共に長く戦闘に従事しているが、それ程の能力者は見た事が無かった。紅蓮の夜津季でさえ、そこまで凄まじい力は持たない。「多分はIIIIAの誰か。消去法で、神風真知だと思っんですが、定かではありません」

「とりあえず、赤色の大翼には気を付けた方が良いでしょう」

「そうです」

無論、他にも気を付けなければならぬ敵は、山ほどいる。その

中でも特に、という事だろう。

工藤が了解すると、伊岸は夕暮れの街に消えていった。

そして、作戦決行の七時四十五分。

ゴオオオオン

轟音が、轟いた。作戦決行の合図。ビルを爆破した音だった。

同時に工藤達は駆け出す。七人の部下を率いての行軍。滑る様に街を駆け抜け、数分で敵の勢力圏に到達した。

北の方から、轟音と歓声が聞こえてくる。北から伊岸、中央から紫織が奇襲を敢行し、陽動して、南から工藤達が突撃する形だった。お陰で、随分と敵が少ない。それでもいない訳ではなかった。眼前に敵が迫る。

迎撃しようと、工藤は拳を振り上げた。

バジッ！

だが、何かが炸裂する様な音が響いた時。気付けば、部下が二人倒れていた。

相手からの奇襲。工藤が指示を出すまでもなく各々が建物の影に隠れて、回避する。

「増援ですかね」

敵からの死角を利用し、部下が工藤の所へやってきて尋ねた。松吉だった。

「時間的にはおかしくない。黄色の翼持ちか」

「厄介です。攻略するには、時間と戦力が必要ですよ」

工藤も同意見だった。

何せ雷は早いし、速い。発動は瞬時で、また攻撃の到達も瞬時なのだ。

であるから、黄色の翼持ちを打倒するには図と、相手の処理能力を上回る人数での強襲が必要だった。

I K Aの葉宮の様な大翼の翼持ちなら、一瞬の奇襲で勝負が着く。が、小回りの良い中翼や小翼の翼持ちが相手ならば、如何に相手の隙を突くかの勝負になり、時間が掛かってしまう。

「とは言え、作戦目的は敵勢力圏中枢への強襲。これを果たすには、速やかな進軍が必要だ。足止めを食う訳にはいかない」

「では相手を足止めしましょう。オレがしますよ」

提案を受けて、松吉を見やった。

赤色、緑色、水色の翼を持っている。いずれも攻撃に使用する、攻撃特化のバンデットだ。

強襲には是非とも連れて行きたい人員だが、それだけに、相手を足止めするにはもってこいの人員だった。

戦闘慣れもしている。工藤と伊岸を除いた中では一番だろう、紫織すらも上回る。

「わかった、頼むぞ」

「了解しました」

軽く口端をつり上げ、松吉が通りへと躍り出る。

少しして、炸裂音。それを聞いてから、工藤は建物の影を移動し、部下をまとめ、進軍を再開した。

勢力圏に近づくに連れ、轟音や歓声は遠くなり、逆に敵が増えてくる。その敵を退けながら、工藤達は進む。

「もうすぐ相手の勢力圏に入る！ 良いか、ここからは虐殺だ！

敵を殺せ！ ただそれだけを考えろ！」

『はっ！』

声の揃った返答。満足げに工藤は頷く。視線を持ち上げる。そこで、気付いた。

前に、誰かがいる。

珍しい事ではない。新たな敵だ。そう思って工藤は、攻撃命令を出そうと、した。だが止めた。止まらざるを得なかった。相手の翼を見たのだ。

大翼だった。しかも、赤い。

パチンッ

フィンガースナップの軽い音。

ギシシシイ

次に何かが軋む音、耳が疼く。気が付けば、跳んでいた。

「避けるッ、跳べ！」

回避の指示を出したのは、跳んだ後。慌てて部下達が回避行動に移る。

部下達が逃げる様子を、工藤は建物の影から見守り。

「こつちに来い！」

声を掛けた、その時、だった。

イイイーンッ

金属が叩かれ揺さぶられた様な、高音。

視界を水色の風が吹き抜けていった。その水色が、通り過ぎた場所を同色に染め上げる。

凍てつく風。体を白く凍らせ、地面から氷の柱を立ち上らせて体を呑み込んでいく。風が吹き抜けた後、残ったのは凍り付いた世界だけだった。

「お前等！」

思わず声を上げる。

回避行動が取れず、通りの真ん中で二人。回避行動を取ったが、避けきれなかった人間が、四人。

目の前に二人がいて、足が水色に染められていた。

パアンッ

その二人の足が、弾けた。まるでガラスが地面に落ちたかの様に通りの真ん中にいた二人は、気付けばいなくなっていた。代わりの様に、キラキラ光を反射する氷が、空を舞っていた。

「こつちへ来い！」

足が碎け、呻き悶える二人に、手を差し出す。

一人は気付かない。気付いたもう一人は、震えた手を、伸ばしてくる。

工藤、その手を取ろうとした。
だが。

ゴゴオオオオウー！！

目の前を轟音が駆け抜けた。

ただそれだけで、視界が赤に埋め尽くされた。赤の向こうに、二人の姿が消える。

伸ばされていた手が、支える体を失い、重力に従って地面へと落ちた。

少し遅れたが、顔を腕で覆う。焼け付く痛み。炎の放熱。堪らず工藤は後ろに後ずさった。

放熱が届かなくなった所で、腕を解いて目を開く。

赤い。地面が焼け、ドロドロに溶けている。赤い地面のすぐ側に落ちた腕が、黒ずみ、煙を上げる。

「何だ、コレは……」

凄惨な光景。耐えかね、呟く。だがそれでも恐怖は払拭できない。

（”噴火する化け物”の、仕業？　これが）

伊岸から伝えられていた情報を思い出す。”噴火する化け物”、神風真知の能力。

情報が現実味を帯びる。途端、全身が震えた。

戦慄。だがそれによって、体は動くという事を思い出した。

足が動いた。もっと動け、と脳が命令する。また動く。もっと。

再度命令した時、工藤は駆け出していた。

誰も着いてこない。孤独の中、工藤はとにかく足を動かした。

（誰か、いる方へ……！）

遠くなっていた喚声が、また聞こえ始めていた。

北でまだ伊岸が戦っているのだ。思うが早いか、足は北へ向かった。

5

作戦開始から、既に二十分が過ぎていた。

その間、伊岸は戦いに戦った。

「喰らえバンデットオ！」

相手の雄叫び。右手から炎の雨が降り注ぐ。滑空術を用いた軽いステップで回避し、伊岸は隊列を組んだ敵の真っ直中へ飛び込んだ。「潰れる！」

黒翼の所持者が、大金槌を振るってくる。そのクセをして滑空術の扱いは下手だ。スピードがまるで無い。軽くないし、カウンター。振りかぶった拳を脇腹へ叩き込んだ。

「能力を使うまでもありませんね。これが、貴方達姫路警察団の力なんですか？」

相手が後ろに倒れ込むのを確認してから、軽く挑発する。が、挑発に乗る事無く、相手はジリジリと伊岸を包囲するに留まった。

やはり、ヴェノムの末端とは動きが違う。組織的防衛が、集団戦闘ができています。

能力を使わないのは、それを付け入る隙と誤解した敵が、わざわざ集まってくるのを狙っての事だったが、結果は芳しくない。

倒すのは容易い。が、相手の救出が早い。倒しても、トドメを刺す前に包囲網が素早く蠢き倒れた人間を囲み救出するので、大した損害は与えられていなかった。本隊が襲撃に成功しなければ、勝ち戦とは言えない情勢である。

「ッ」

その打算の中、伊岸は殺気を感じ取った。同時に体が動く。一歩、後ずさった。

直後、鼻の先を何かが通り過ぎる。刃だ。刃が通り過ぎた向こうに、少年が一人、下り立つ。

伊岸は、自らの後ろ足が地面に着くと、すぐさま強く地面を蹴った。

滑る様に地面を移動し、敵の包囲網に飛び込む。伊岸を捕まえようと手が数本伸びるが、躲し、払いのけ、敵陣を駆け抜けた。

上空を見る。少年が剣を構えて、跳んでいた。

瞬間的な停止の後、明らかに物理法則を無視した速度で、降下し

てくる。

少年は伊岸の回避先を読んでいた。その証拠。周囲に浮かぶ剣の切っ先の点が、伊岸を追っている。

代わりに、伊岸は手を突き出した。直後、炸裂音。黄色の翼の能力。それを察して、少年は空中で軌道を変えた。

しかし、持っていた剣を放った。投げたとは思えない程、正確に、伊岸を指し、飛んでくる。

ギンッ

剣は弾かれた。突如として地面から突き出た、木の棘によって。

少年が着地し、伊岸もそこで一息ついた。

「久しぶりだな、伊岸」

「ほぼ一年ぶりかな、八月」

そして、言葉を交わす。八月巧斗と伊岸善人。かつての同級生であり、悪友であった。

包囲していた警察団が、包囲網を解いて、徐々に戦場を離脱して行く。

「大きくなったモンだなあ。たかが十六のガキが、日本最大の武装組織ヴェノムの参謀長とは」

「八月こそ。僕がいない間に、県下最強の能力者なんて言われて。

紅蓮の夜津季とか呼ばれてさ」

「随分、お前等ヴェノムから嫌われたんでな」

「そうだね。先日の包囲網も手酷くやられた。お陰で、今日こうして攻める事になったよ」

「組織の為か」

「うん」

ノータイムで、二人は言葉を交わし、刹那の空白が生まれると、同時に地を蹴っていた。

巧斗は剣を作り出し、手に持って、伊岸に斬りかかって来る。

翼が輝いていた。発光状態。加えて、伊岸に匹敵する滑空術の使い手である巧斗の身のこなしは、先程伊岸に襲いかかった大金槌の

能力者とは比べものにならない。

紙一重で躲せば、確実に身を斬ってくるだろう。だから伊岸は、巧斗の間合いには入らない。ただ大きく避け続ける。

速度では、圧倒的に巧斗が上だ。だから追いつかせない為に、伊岸はあらゆる手を尽くした。

まず氷の矢を作り出し、攻撃する。これは中距離から近寄らせない為の牽制。だが巧斗は並の戦士ではない。攻撃を容易く切り抜け、接近してくる。

そこを、木製の棘で迎撃した。深緑色の翼の能力である。棘は、全高一メートル、直径五〇センチはある円錐型。柱が突き出てくる様なモノで、巧斗は立ち止まらずを得ず、そこを氷の矢で追撃すると、今度は巧斗から距離を取った。

「何でお前は、ヴェノムで戦うんだ」
再び会話を始める。

既に他の人間の姿は無く、場には伊岸と巧斗だけが残っていた。

「一年前に言ったと思うけど」

「弱者を蹂躪する事に、どんな道理がある!？」

またしばしの空白。が、今度は互いに手を出さなかった。

「人類の歴史は、常に弱者によって左右されてきた」
数秒して、伊岸は言う。

「強者が弱者を虐殺すれば、弱者は別の強者を探して、その強者の下に集う。そうやって、強者達の勢力を、弱者は常に左右してきた」
「当然だ。弱者にも、強者と同じ命があるんだ」

「そして同時に、弱者は強者よりも数が多かった。弱者にも色々あるからね。腕っ節は弱いけれど、商才があるとか。頭は悪いけれど、武器作りが上手いとか。でも組織的な防衛はできないから、強者の下に集う」

「それが、国家というモノだ」
「うん、そうだね」

巧斗の周りに、剣が数本浮かぶ。同様に、伊岸の周りにも氷の矢

が出来上がっていた。

会話の間に、互いが戦闘態勢を整えていた。

「でもね、じゃあ弱者が国家で何をしたかと言えば、結局平和を保つ事しかしなかった」

「平和を保つ事の何が悪いんだ」

「不完全なんだよ、弱者の求める平和は。自らの強さを求めて、相手も強くさせる。自らの弱さを認めず、相手の強さを否定する。そんな平和じゃ、一步も前には進めない」

「変えたいのか、そんな世の中を」

「かいつまんで言えば、そういう事さ」

「だが、変える人間はいつだって、変わってしまった人間に押しつぶされるモノだ」

巧斗が言い放ち、また空白が生まれる。今度の空白は、二人共待たなかった。

氷の矢を放ち、棘を突き出させ、攻撃する伊岸。剣で打ち落とし、棘を躲して、接近してくる巧斗。

だが回避の瞬間、巧斗はどうしても止まる。そこを、伊岸は見逃さなかった。

「惑え！」

手を振りかざし、巧斗に言い放った。

突っ込んできていた巧斗の体が、止まる。間を置かず、伊岸は氷の矢を集中砲火を浴びせた。

普通ならば回避のしようが無かった筈だが、巧斗は気が付くと、巧みに剣で打ち落とし、左手に一撃を食らっただけだった。

体勢を立て直すべく、近くの建物の陰に逃げ込む巧斗。

「その戦闘スタイル、相変わらずだな！ 白翼を攪乱に使うとは！」

伊岸の背中にいる、八枚の翼。水三、深緑二、黄二、白一の翼。

伊岸は今その内の白を使ったのだ。空間に作用する能力ではないが、対象者を適当に指定すれば、一時的に「幾何学的に歪んだ空間」を見させる事ができる能力だった。

「バンデットの基本戦術さ。これなら、個対個の戦いで負ける事は無い」

「卑怯な」

「戦いに卑怯も何も無いよ」

「他人から奪い取った力で臨む、その姿勢が卑怯だと言ってるんだ！」

巧斗。建物の陰から飛び出して、突っ込んでくる。

発光状態は継続中であり、凄まじい速度だったが、慌てる程じゃない。落ち着いて対処すれば、恐れる事は何も無いのだ。

まず氷の矢で動きを制御する。ある程度移動を読み切った所で、幻覚を見せつける。ここで必ず、隙が生まれる。

そこに木の棘を突き出させれば、詰みだ。

「ッ」

だが巧斗は、伊岸の予想を裏切って木の棘を跳んで躲した。上空、高く。十数メートルを軽く超えていた。

危険を察知して反応したにしては、早すぎるし、随分高くへと飛んでいる。恐らくは前もって対策を講じたか。

思い、伊岸は上空を見上げた。夜闇の空は暗く、飛び上がられると殆ど霞む。巧斗の翼は発光している筈だが、元々巧斗の翼は小翼だし、今は黒色に染まっているのであまり目立たない。一応、氷の矢が届く高度ではあるが、確実に命中する距離ではなかった。

であるから、伊岸は氷の矢を溜め、巧斗が落ちてきたところを、狙う事にする。

ジッと見上げて、落ちてくるのを待った。

「……？」

何かが、落ちてくる。だが巧斗ではない。巧斗よりもあまりに小さい、十分の一以下だ。何だ。一つが地面に落ちた時、わかった。

ダゴォッ

鉄の弾丸が凄まじい速度で降り注ぎ、アスファルトを砕いたのだ。「弾雨かッ！？」

堪らず飛び退く。迫ってくる弾丸は、氷の矢を使って防御した。建物の中に逃げ込んで、やり過ごすしか無かった。

「戦闘中に、能力を変えるか」

昔よりも戦い方が巧みになっている。

あの男らしい。能力の研鑽けんさんを積むのではなく、より自分自身が狡猾こつになる事によって、強くなる。初めからどんな能力にも変化し得る、千変万化ならではの戦闘スタイルだった。

しかしいつまでも隠れてはいられない。そうしては、小翼で小回りが良く機動性の高い巧斗が、一方的に有利になるからだ。

飛び出る。すぐに、弾雨が降り注いだ。かいくぐり、防御しながら、巧斗に接近する。

既に幻覚は看破された。使えば、こちらが能力を使って追撃するよりも早く、速く、届かない所へ飛ばれるだろう。

なら近付いて、肉弾戦に持ち込むしか無い。だが巧斗も馬鹿ではない。露骨に近付けば、遠ざかる筈だ。

バレない様に、相手の思考の裏を突く。これしか無いだろう。

伊岸が軽く距離を詰めた時、巧斗が右手の袋小路に入った。

奇襲を仕掛けるつもりなのだろうが、それを逆手に取る。巧斗が何処から出てくるかを先読みし、逆にこちらが奇襲を仕掛けるのだ。

（馬鹿正直に、袋小路を通って、右手の別の通りから来るか？）

来ないだろう。自答する。

（じゃあ何処から来る？）

答えは決まっていた。

だから伊岸は回り込む。建物の壁に張り付いて、棘を突き出させる。それを足場にし、そして。

ザリッ

足音を、聞いた。

「上だアッ！」

同時に飛び出していた。巧斗が屋上から身を出そうとした所へ、伊岸が立ちはだかる。

目が合うその時に、伊岸は幻覚を掛けた。すぐに巧斗が飛び上がるうとする。だが奇襲によってタイミングがズレていて、巧斗の回避は一拍遅れ、伊岸は奇襲によって一拍早く。飛び上がるうとした巧斗の腕を、伊岸は掴んだ。

右手に意識を集中し、炸裂させる。

バジッ！

炸裂音。瞬間、巧斗の顔から血の気が引く。

（勝った！ 倒した！）

思い、伊岸の口から笑みがこぼれた。それで、気が付いた。

巧斗の顔も、笑みを浮かべている事に。

ガッ！

体が揺さぶられた。何だ。横を見やる。

桜塚の姿が、そこにあった。

（馬鹿な。何で、ここに）

理解するには、しばらくの時間が掛かった。

警察団の動きが、嫌に良くなかったか。巧斗との戦いを始めて、すぐに退いた。その動きは、あまりに統率されてなかったか。

自問して、答えを得た。

巧斗が到着した時に 否、伊岸が戦っている時に、既に桜塚はこの場にいたのだ。

巧斗はそれを知っていた。だから、伊岸と話をしていたのだ。位置を報せる為に。だから巧斗は、平気で袋小路に入り込んだ。巧斗の奇襲に奇襲した伊岸に、桜塚を奇襲させる為に。

「やられた」

答えに行き着いた時、伊岸の体は地上に落ちた。

鈍い痛みが体に響いたが、しかし、体を貫かれた様な痛みは、まるで無かった。

その異様さに気が付き、伊岸は自分の体を見やった。

「な……」

血だらけの男が、伊岸に覆い被さっていた。

最初は誰かわからなかった。けれど、月明かりに照らされ、わかる。

「工藤、さん？」

月明かりで照らされる、頭のバンダナ。工藤。本隊として動いていた筈の、工藤。彼が、伊岸を庇っていた。

「お逃げ、くだ、さ……」

喋りかけて、工藤の口から血があふれ出す。

「申し訳……。作戦は、失敗、し……」

「何で、何で僕なんかを」

何を訊いているんだ、と内心では思った。

けれど、何かが、言葉にできない何かが、伊岸の内心を覆っていた。それが、言葉を勝手に吐き出すのだ。

「参、謀長は。生きねば、なりま、せん。それが、ヴェノムの、為

……」

「僕がいなくても、父さん達が」

「参謀、長、だから」

工藤は答え、一際盛大に血を吐く。もう良い、喋るな。言いたかった。

だが、何かが邪魔して、言葉にできない。

「生きて、くダサ、イ」

工藤の目が、閉じる。

開ける。心が叫ぶ。

だが目は開かない。

「伊岸イ！」

そこへ声。桜塚だ。水の散弾を放ってくる。

「よくも、よくも仲間を……ッ！」

仲間。その言葉が、僅かに聞こえた。

気が付けば、走っていた。

「待てエ！」

桜塚が、すぐさま水の弾丸を乱れ打ってきた。

回避し、木の棘で防御しつつ、伊岸は走る。

（仲間だと？）

桜塚が言った言葉を、考える。

（何で、仲間なんかには必死になる。桜塚も、八月も）

伊岸にとって、仲間と言える仲間はヴェノムの人間だ。

全て打算の上での、仲間。

従兄が伊岸を誘い、翼獲りを行ってバンデットとなったのも、父親が伊岸と従兄を誘いヴェノムを立ち上げたのも、打算だ。家族以外に、全幅の信頼を置ける人間がいなかっただけという話でしかない。

血の繋がった家族は全てヴェノムの幹部であるから、家族以外の仲間は部下だ。部下は伊岸自身が打算し、必要としたから従えているのであり、不必要とあれば斬り捨てる。葉宮紫織の様にだ。

（ 工藤さんだって）

工藤もそうだった筈だ。

言われたから部下になって、言われたから指示に従っていただけの、伊岸の様な人間。

それが、自らの命を捨てても伊岸を助けに来た。まるで巧斗の様に。

「伊岸イ！」

いつの間にか、桜塚が側にいた。すぐ横。拳を振りかぶる桜塚と、視線がかち合う。

「ぐッ……！」

咄嗟に危険を感じ、伊岸は電撃を込めた右腕を突き出した。

桜塚も拳を繰り出す。二人は互いに攻撃を躲すべく、上体を反らした為、軽く腕が触れ合った。

バシッ

ただそれだけで、二人の腕は弾ける。桜塚の腕は電撃によって、伊岸の腕は滑空術によって。

バランスを崩した為、互いに立ち止まり、相手を睨み付け、牽制

する。

「何でそこまで、必死になるんだ」

伊岸が、訊ねる。

桜塚の翼も、巧斗と同じく発光している。水色の翼が輝き放つその光は、水面に反射した光の如く、周囲を青白く照らしていた。

発光しているから、桜塚に追いつかれたのだ。バンデットである伊岸は、発光しない分運動能力において、桜塚に劣る。

「仲間なんて、利用して捨てて終わりだ……。なのに何で、必死になるんだ？」

奇襲を警戒しつつ、伊岸は問いを重ねた。

「利用して、終わりにするからだろうが！ 逆に訊きたいよ。仲間がいなくなつて、一体何をするつて言うんだ！？」

「こんな時代なんだから、皆仲良く平和になんて無理だろう？ だから、明日を生き抜く為に、必要無い人間は斬り捨てる。当たり前の話じゃないか」

「ああ、そうだな、そうだよ！ だから必要な人間を必死に助けるんだよ！ お前は損得勘定してるだけで、親しみとか友情とか考えて判断してるのか！？」

「そんなモノがあれば、仲間の為に必死になれるのか」

「なるさ。他人から翼を奪うヤツには、無理だろうがなッ」

「成る程……」

呟き、伊岸は俯いた。更に小さく、言葉を紡ぐ。

「結局、僕は力を欲して、光を失ったという事か」

俯いてポケットに手をつっ込み、伊岸は完全に臨戦態勢を解いた。だから桜塚は、腰を落として構える。

「ここまでだ、伊岸！ お前はここで、消えろ！」

第六章 「血色」 4

6

巧斗は目を覚ます。

自らの体は横になっている。伊岸の攻撃を受けた時、倒れ込んでしまったからそのままなのだろうか。思い周囲を見やると、自分の手に触れる二人の女子に気が付いた。

「瀬藤、に、空ちゃん？」

「あ……」

巧斗に気付くと、パツと手を引つ込める空。瀬藤はその様子を見て、苦笑を浮かべた。

「小さい所を、空ちゃんに手伝ってもらったんですよ。電気ですから、あちこち傷付いてて……」

「そう、なのか。空ちゃんも、能力、使える様になったんだな」

巧斗は目を細めて、空を見やった。だが空は、それを嫌がるでもなく、まるで気付かないかの様に話し始める。

「お兄ちゃんを、助けようとして。そしたら、お兄ちゃんの傷が治って」

巧斗が助けた時には、能力の使い方もわからない子だった筈なのに。

そう、思い返せば、巧斗も最初はそうだった。

とにかく皆を助けようとして、能力を使い始めたのだ。それがいつしか、かつての友人を殺すとか、そういう話になってしまって。寂しげに、巧斗は微笑む。

「ありがとう、空ちゃん」

「ど、どう致しまして」

無表情ながら頬を染めるのは、恥ずかしがってる証拠だった。苦笑し、巧斗は体を起こす。

「まだ、痺れが残ってるでしょう？」

慌てて、瀬藤が咎めた。

起きあがろうとする巧斗の肩を押さえて、そのまま横にしようとして力を掛けてくる。

「とは言え、行かなきゃならない」

巧斗は地面に手をつく事で、押さえ付ける瀬藤の力に抵抗した。場所は公園だった。ブルーシートを敷いて、即席の治療所になっている様だ。野戦病院という訳だ。

遠くにだが、穂波の姿も見えた。周りを、IIIIAの皆が囲んでいる。

「伊岸は、桜塚さんが追ってます。だから心配は……」

抵抗する巧斗を制する様に、瀬藤は声を掛けたが。

「アイツを殺されたら、困るんだよ」

「え？」

巧斗は退けた。

ずっと考えていた事。それがグルグルと頭の中を回っている。

伊岸の中に自分の求める、何かの答えがあると思っていた。伊岸は巧斗とは違う。けれど、似ている。否、巧斗が伊岸に似ているのだ。

「オレはどうしよもない、卑怯な臆病者さ。何かをする時、自分しかできる人間はいないと思いながら、自分がする事以外は、誰かが何とかしてくれると思ってるんだから」

「……？」

瀬藤は戸惑った様子で、巧斗を見てくる。怪訝に歪んだ瞳は、正直だった。

そんな反応も、仕方がなかった。これは、今まで話した事が無い、巧斗の内心なのだから。

「オレが上に行く為には、アイツが必要なんだ。きつと……」

ふらつく体を奮い立たせた。瀬藤の手を柔らかく払いのけ、血に膝を突き、立ち上がる。

「やつきー」

すると、声が降ってきた。見上げる。桜塚だ。

親しい友達の筈だが、今は何故か死神の様に思えた。

「殺したのか、伊岸を」

「いや」

桜塚が首を横に振った。

「伊岸からの、伝言だ。最後にやつきーと話がしたい、ってな」

その言葉に巧斗は首を傾げる。

「すぐに殺さなかったのか？」

「寸前までいったんだが、無防備のままそう言われたんでな。ここはちよつと様子を見るべきかと思って、とりあえず、当事者のお前に意見を仰ぎに来たんだ」

桜塚が慎重な性格で良かった、と内心で感謝する。ついでに、死神に見えた事も謝っておいた。

桜塚と話している事で気が付いたのか、IIIIAのメンバーが近寄ってきた。穂波も、真知に肩を支えられてやって来る。

「行くのか、やつきー」

問いかけるのは、桜塚。

「行かなきゃならない、とオレは思ってる」

「何でだ？ もう袂を分かった相手だ。今更話し合っても道を同じくする事はないし、例えお前とアイツがソレを望んでも、アイツの被害者は誰も良しとしないぞ」

桜塚の言葉が、重くのし掛かった。何故そこで重く感じるのか？ 冷徹になりきれていない自分を、改めて感じさせられた。

「オレが、伊岸を助けたい？」

「お前は人助け大好き人間だからなあ。何だかんだで、伊岸とは悪友だったし。やるとは思わんが、一応念押しにな」

どこまで慎重なんだか、と苦笑をこぼす。

そして自分が、どれだけお人好しと思われているか、今更ながらに確かめさせられた。

自分がお人好しであるという事に気付いていない自分も、痛感した。

「桜塚、伊岸は？」

「市外の国道二号線にいる。動かさない様に、警察団の人にも頼んで包囲してもらってる」

「わかった。どう君、車を頼めるかな？」

「ああ、わかってるよ」

言葉を交わす、男達。話は、女子が混ざる事無く、進んでしまう。見守っていた藍が、手を伸ばしかけた。

「これは男の戦い、でしょ？」

藍の手を、真知がそっと包み込んで制した。藍の肩を叩いて、見据えてから、巧斗へと顔を向ける。

「スマン」

ぶつきらばうに礼を言つて、巧斗は道治と一緒に車へと乗り込んだ。

すぐさま発車し、国道二号線を東へ向かう。やがて、加古川市に入った所で、人だかりを見つけた。

人だかりの中央。伊岸善人が、立っていた。

「ようやく来たか。八月、巧斗。もう月が真上まで来てる」

巧斗だけが車から降りて、伊岸と向かい合う。

「そりゃあ随分待たせたな。本当なら一年前に、仕留めておくべきだったんだが」

「だろうなあ」

クスクス、と伊岸は笑う。いや、嘲笑う。

二人が言葉を交わし始めると、道治と桜塚とが周囲の警察団を脇に寄せた。

二人の話に、交ぜるつもりは無いし、警察団の面々も首を突っ込むつもりは無い様だった。

「ようやくわかったんだ。何で、僕と八月とが、同じ道を選ばなかったのか」

「道を踏み外したのはお前だ。選んですらいない」

「本当に、そう思うよ」

巧斗は怪訝に思ったが、伊岸の表情を見て得心した。悲壮。後悔。絶望。それらが顔に表れていたのだ。

「わかったなら、もう良いだろう。悪の道を、歩むな」

「ここで手でも差し出して、一緒に歩もうとでも言うつもりかな？

笑えない。泣けない。怒れない。呆れるだけだソレは」

「オレだってお前の様な罪人と手を組むつもりは無い」

断じ、巧斗はぶつきらぼうに手をコートのポケットに突っ込んだ。

「ただ、お前なりの贖罪じゅくざいの方法で、多くの人を救ってみろ」

「救ってどうなる？ 誰かが僕を許してくれるのか？ 誰かが僕を慕ってくれるのか？」

「オレはその誰かじゃない。お前の目で確かめる事だ」

「……、嫌だよソレは。疲れる」

腹から絞り出す様に、伊岸は吐き捨てた。

「今のお前は疲れてるんだよ。疲れたら休めば良い。疲れが取れるまで休んで、疲れが取れたなら、後は立ち上がるれば良い」

巧斗が一步、伊岸に近寄る。伊岸は後ずさった。拒絶する様に、怖がる様に。

二歩程同じ事をして、巧斗は立ち止まった。その間、二人は無言だった。

「僕はね」

だが立ち止まると、伊岸が口を開く。

「嫌だったんだと思う。一年前の、どうしよもなく平和な世界が。

或いは、平和に酔いしれた世界が」

「オレも政治信条的には、同意する」

「じゃあ、僕達はどうしたのか」

思い返してみる。

巧斗は秩序を選んだ。これまで通り、或いは大衆的な秩序を。対する伊岸は、新たな秩序を選んだ。

そこに何があったのか。何が違って、二人はその道を選んだのか。巧斗は、ソレが知りたかった。先程話した上っ面の理由ではなく、心の部分を。

「八月は戦う事を選んで、僕は戦わない事を選んだんだ」
けど、伊岸は違う事を言う。

「どういう事だ？ あの時、戦いを始めたのはお前だった筈だ。なのに、オレが戦っていて、お前が戦っていない？」

「言葉が悪かったかな。言い換えよう。八月はただただ戦う道を選んで、僕は戦う以外の事もする道を選んだんだ」

「……ッ」

説明を付け足されて、何となく、わかった気がした。

伊岸は鎮圧もするし、訓練もするし、打算もするし、色々な事をやっている。戦うという事は手段の一つに過ぎないのだ。

だが巧斗は違う。

仲間を守るのも、訓練をするのも、話し合いでだって、戦っている。

ただただ敵を求めて、敵を倒す事 戦いに、固執しているのだ。

「八月は、恵まれたから。恵まれてるから、八月はこの後ずっと戦い続けても、別の誰かが秩序を維持してくれる。例えば厄介事が起きても、八月は戦う事で厄介を乗り切れる筈だ」

「確かに、オレは恵まれてる。戦わなければオレがどうなっていたかなんて、今のオレには想像できない」

恵み。それは大人であり、仲間だろう。

姫路行政区の大人達。銭湯を営んでいる大人達。慎重に立ち回る桜塚。果敢に立ち向かう葉宮。事務処理をしてくれる道治。リーダーをしている真知。別の所で戦ってくれる穂波。そして、藍。

巧斗はそれらに恵まれているから、ただただ戦いに身を置く事ができたのだ。

「じゃあ僕は？」

これを、伊岸に置き換える。言われ、巧斗は俯く。

伊岸は、恵まれていない。けどその代わりに、何でもできただろう、と思った。成績も良いし、頭も良い。度胸もあるし、悪に染まる事も厭^{いと}わない。

そういう人間が、人の上に立つのだと巧斗は思っていた。

「僕は、戦ったり、戦わなかったり。色々していて、見えるモノも見えなくなってたんだ」

「今は、見えるのか。見えなくなっていたモノが」

「どうだろう。ソレが何なのか、わかっただけかもしれない。だって、今僕の前にソレは無いんだから」

「目の前に、手元に無いのなら、また見つければ良いだけだ」

巧斗が厳しく睨み付けた。対する伊岸は、困った様に笑う。

「努力し続ければ何かが叶う。八月って、どこかでそう思っていないかな？」

「分数的な問題だ。何度挑み、幾つ成功するか。分母が大きくなれば、分子も大きくなる可能性がある。そう思ってるんだ」

「だろうなあ」

夜空を仰ぐ、伊岸。

「美徳だよ、八月。人として優れた品性だ。けれどそれじゃ、人は付いてこない」

「わかってる」

わかってるから、足りないモノを得に来たのだ。

「だから、教えてあげようかな。八月が、人の上に立つ為に、何が必要なのか」

そしてソレは、伊岸が知っている筈なのだ。

夜津季は、全神経を集中して、伊岸の言葉に耳を傾けた。

「人の上に立つには品性を欠く必要がある」

言い放たれた、必要な事。品性を、欠く、事。

「何？」

「清廉潔白にして有能な人間じゃ、上には立てない。人の上に立つというのは、人を惹き付ける事と同義じゃないんだ」

伊岸は言う。

人は秩序の維持の為に構造を生み出した。無能でも秩序を維持できる構造。そんなモノともなると、無能や愚者が上にやってくる様になる。

「下にいる人間は、逆にそれで安心するんだよ。無能や愚か者でも上に立てる構造の安全性を見て、安心するんだ。完璧な人間が上にいてこそ成り立つ構造なんて、下の人間は危なっかしくて堪らないんだ」

だから、構造で上に立つ為には、下が納得する程度に品性を欠かなければならない。

「僕は冷血によって、品性を欠いた。完璧でなくなった」

「……」

「けど八月。君は品性を欠いてない。だって、八月は諦めてないじゃないか。何かを、欠くという事に」

諦めなければいけない。諦めた上で、何かを欠く。

「ソレは。オレには、でき、ない……」

受け入れられない事だった。

諦めるという事は、何かを見捨てるという事だと、巧斗は思っていたのだ。

見捨てる事ができる様な人間に、自警団は務まらない。そう、思っていた。

「でも、僕は諦めるよ」

伊岸が苦笑った。最早上手く笑えていない。悲壮に、歪んでいる様にしか見えなかった。

「僕はもう、この世界で生きられない」

巧斗は吃驚する。

「そうじゃないか。戻れば部下に見放され、降れば裁かれ、消えても明日をも知れぬ身だ。生きる事は、できそうにない」

「諦めるって言うのか、そこを」

「打算しろ、八月。僕の居場所がどこにあるのか」

打算するまでも無い。

ヴェノムに戻れば、伊岸に忠誠を誓っていない人間達が、すぐに反旗を翻すだろう。今の伊岸にそれを打ち砕く気力は無い。

巧斗達に降れば、伊岸に恨みを持つ人間が、誅殺する。

逃げて、一人で生きていける田舎等存在しない。のたれ死ぬだけだ。

「僕は敵を作りすぎた。幾ら八月が庇っても、その敵全ての意思を打ち消せる程の力は無い。僕にも、八月にも」

ソレが、二人の出した答えだった。

巧斗は絶望する。こんなに簡単に、人が死んで良いのか。もっと何か、特別な理由があつて、死ななければいけないと言ふのなら良い。けれども、こんな、簡単に……。

「頼むよ、八月」

「嫌だ」

「お願いだよ八月」

「嫌だつて言つてるんだ」

最後の巧斗の傲慢^{じょうまん}。最期の伊岸の傲慢。

今、せめぎ合っていた。

「無様に死にたくないんだ」

最期の伊岸の傲慢が、巧斗の傲慢とかみ合った。

伊岸を無様に死なせたたくない。

例えば名も知れぬ誰かに。或いは昨日まで従えていた部下に。はたまた自然に。

そういった者達に伊岸が押しつぶされる所を、巧斗は見たくなかった。だからこそ、死んで欲しくない、と願っていたのだ。

「無いのか、ソレしか」

「僕はそう思う。じゃあ八月は？」

「……」

言葉には出さなかった。

出せばソレは、死刑宣告にしかならないと思ったから。

代わりに巧斗は、構えた。脇に避けていた警察団達、道治と桜塚が息を呑む音が聞こえた。

「行こうか、八月。八月巧斗、紅蓮の夜津季。僕を殺せなかったら、僕が君を殺すまでだ」

最後の死闘だった。

巧斗と伊岸、両者の手が振り上げられる。能力発動の合図。

伊岸は、全てをぶつけてきた。氷の矢、木の棘、ノイズ、全ての能力を同時に使用。

真っ先に迫るは氷の矢、だが巧斗は鉄の弾丸で撃ち落とす。

次に、木の棘。地面から突如として突き出たソレだが、躲すのは難しくない。

だが躲している間に、ノイズが混じった。目の前で起こっている現象。鉄の弾丸と氷の矢がぶつかり砕け散り、突き出た木の棘がアスファルトを砕く。それらの音が一瞬間聞こえなくなる程の強烈なノイズ。

思わず巧斗は目を閉じてしまった。視覚と、聴覚が機能しなくなる。

しかし、巧斗は動き続けた。

僅かに地面が揺れる感覚。木の棘が突き出るタイミングと、位置を報せる。反射で避ける。

それから二秒待つ。二秒の間に、鉄の弾丸と氷の矢、全てが相殺される。

まだノイズが残る。目を開こうとしたが、ノイズによる頭痛でそうもいかない。考えも上手くまとまらず、ほぼ反応だけで動きながら、想像する。

一振りの剣。鏢も無い、柄と刀身だけの両刃の剣。

一瞬の想像、それによって能力が決定され、発動する。右の掌の中に、何かがある感覚が生まれた事で、巧斗は能力が発動した事を確かめた。

肌が焼け付く感覚を覚える。何かが迫ってきている、そう判断し

た。

すぐさまその何か、剣の柄を握りしめる。僅かに腕を引く。次に、思い切り突き出した。

「ッ」

息を呑む音が聞こえた。ノイズが、消えていた。カハッ、と血を吐く声が聞こえる。

巧斗は崩れた。膝を突いて、それからようやく、目を開いた。

跪く巧斗の横で、何かが倒れ込んだ。霞んだ視界、横目でその何かを見やる。

伊岸、だった。

7

最後の戦いを終えて、巧斗は車に向かった。道治と桜塚がすぐに駆け寄り、声を掛けてきたから、事務的な会話を交わした。

伊岸の遺体は持って帰る事だとか。家族がヴェノム側にいるのだから、死体の処理はあちら側が好き勝手にするだろうか。

死体を送る手筈は、IEEEAが担当する。送り届けるのは巧斗と真知が良いだろう。そういう事。

そこまで話して、車に乗り込む。道治も殆ど同時に車に乗り込んで、すぐに車を発進させた。

「……」

数分の行程、沈黙。車が走っている間、巧斗と道治は口を開く事が無かった。

やがて車が止まる。反応して前を見ると、藍、穂波、真知の三人が、道の真ん中に立っていた。

「やつきー、大丈夫……？」

巧斗が車から降りると、真っ先に穂波がそう言ってきた。

余程自分は酷い顔でもしてるのか、と気になったが、すぐにそんな気持ちは消えた。

巧斗は、疲れていた。二つの意味だ。

何かをしようという気力がわき起こらない。何かを考えようという気も無い。ただ心がザワザワと騒いで、何かを教えている様だった。

そこに思考は無い。言葉も無く、ただ騒ぐだけ。無限に湧いて出てくる何かだけ。

「大丈夫に、見えるか？」

「見えないよ」

藍が遮る様に答える。

「だろうな」

無限に湧き出てくる、何か。やがて頭がソレを、処理しきれなくなった。

泣きたくなる。もう堪えられなかった。

壁にもたれ掛かる。すると、堰^{せき}を切った様に、涙が流れ始めた。

頬を伝い、やがてこぼれる。

「やっきー……」

理性的に在れば、すぐに涙は止まる筈だった。

伊岸の死をどうにかする事はできなかったのか。そう、考えれば良い。考えれば自然と涙は止まる。それまでの時間潰しに過ぎない。そう、思っていた。

「……ッ」

だが突然。巧斗の体が揺すられた。同時に視界が覆われる。

神経をとがらせ、ようやくわかった。抱きかかえられていたのだ。頭を。

「ふす、ふす……」

幽かな泣き声が聞こえる。

誰の泣き声なのかは、わからなかった。

けれど求めてしまった。暖かさを。明確な暖かさを欲して、巧斗は腕を伸ばして相手を抱き締める。

そこで、初めてわかった。抱き締めた相手は、驚く程小さかった

のだ。

折れそうなくらい細い腰つき、背に手を伸ばそうとして、すぐに肩に届く背丈の小ささ。

相手は、藍だった。

抱き締める前は穂波かと思った。IIIIAで一番巧斗と同調し易いのは、穂波だったからだ。

真知は無いと思っていた。真知は巧斗をよく知っているが、それだけだから。

何故藍なのか。思ったが、すぐにわかった。藍は巧斗と似ている。似通った考えをしているから、巧斗の気持ちを、理解してくれる。

巧斗の気持ちを理解してくれるのは、藍しかいなかったのだ。

「ぐ……」

それがわかれば、後は理論や論理なんて要らなかった。

欲しかった。自分を理解してくれる、その人が。

小さな藍の体を、巧斗は抱き締めた。後は、互いを抱き合って、泣くだけ。それだけ。ただそれだけでも、巧斗は心地良かった。

体は休んでいないだろうが、心は心地良い休息に浸っていた。

泣き疲れて、眠って、起きれば。

きつと明日も、精一杯生きる自分として、一緒に、生きていける。そう、巧斗は思った。

終章：暖色

翌日。

よく晴れた日だった。雲一つ無く晴れ渡り、気持ちの良い青空がただただ広がっていた。あまり強くない風が常に吹いており、頬を絶え間なく撫でている。

巧斗は真知と共にヴェノムの勢力圏へ赴き、伊岸の遺体を届けた。受け取ったのは、バンデットですらない神野（こんの）という中年の翼持ちの男だった。

伊岸から不在の間を頼まれた、代行だと言う。神野の周囲を数十人程の男達が固めていた。

「紅蓮の夜津季……。伊岸善人参謀長のご友人とお見受けして、お頼みしたいのです」

遺体を預けると、神野は言ってきた。

「何ですか？」

「我々、ヴェノムの構成員三十六名。姫路行政区に、降伏を願いたいのです」

訊くと、どうやら降伏したいらしかった。

ヴェノムには、傘下に仕方なく入ったが本望ではなかった、という人間が多くいる。

神野もその一人で、伊岸が死亡したと知ると、同志を募って降伏する事にしたと言う。

「悪いんですが、断らせてもらいます。埋伏の毒じゃない保証は無いんでしょう」

「し、しかし……」

「降伏を願い出るなら、幹部の首級と交換です。でなければ信用できません」

神野達の降伏を、巧斗はその場で断った。伊岸は死んだが、策はまだ生きていると考えたのだ。

しかし、神野は肩を落として、伊岸の遺体を持って帰っていったから、実は本当の話だったのかも知れない。

だとしても、仕方のない話だ。自治政府も、襲撃の混乱と難民の処置で忙しいので、その対処がひとまず終わってからヴェノムの問題に取り組む、と言っている。そういう状況で、ヴェノム構成員の降伏を易々受け入れる訳にはいかないのだ。

思い、巧斗と真知は自らの勢力圏へと戻った。

「よう」

その時に、葉宮に声を掛けられた。駅前広場のすぐ近くを通る道での事だった。

葉宮の隣には、いつもの様に鈴木がいたが、青色の翼は二枚までに減っていた。

「もう良いのかな、鈴木さんは」

答えたのは真知。夜津季も、軽く手を上げる事で葉宮に挨拶をする。

「怪我は無かったし、二枚は残ったから。それにこの子も」

言っと、鈴木の後ろから、小さな女の子が顔を出した。それも体格や年齢的な意味ではなく、サイズの意味で。

掌サイズの女の子。妖精だった。小さな小さな背中に、三枚の青い羽根が生えている。

「加台さんと琴葉さんに頼んだのか？」

「ああ。姉貴 アイツの背中にあった翼は、アイツ自身が元々持っていた翼を残して、全部妖精にしてもらったから。ついでにな」
アイツとは、葉宮紫織の事だろう。今回捕縛できたバンデットの一人だった。今は警察団に身柄を拘束されている。もう二人ほど、穂波が倒したバンデットがいて、この二人も同じ様に身柄を拘束されていた。

紫織は、最初放心状態だったそうだが、葉宮の説得と、施設の子達との面会を経て、態度が軟化しつつあるらしい。伊岸亡き今、ヴェノムの内情を知る数少ないバンデットとして、有力な情報を提供

してくれる事だろう。

「翼、何で自分に戻さなかったの？」

事務的な事を話していた巧斗と葉宮の横で、真知が鈴木に問いかけた。

「私は発光した事無いし、それなら、妖精にした方が良いかな、って思ってる」

「妖精と自分の二人で、同時に能力が使えるからか？」

巧斗の問いに、鈴木はぎこちない頷きを返した。

「そういう事」

「って事は、まだ戦い続けるのかな、鈴木さんは？」

更に真知が問うと、鈴木は軽く笑った。

「リーダーが心配なんで。この子と一緒に、まだ側にいたいと思う」
笑いながら鈴木は葉宮を見やり、葉宮は気恥ずかしそうにそっぽを向いた。

「成る程、そういう仲か」

巧斗は苦笑し、呟いた。そうしたところで。

「葉宮さん、ちょっと良いですか？」

第三者の声。見ると、自警団の人間が数人駆け寄ってきていた。彼等は葉宮に話しかけたものの、すぐに巧斗と真知にも気付いた様だ。

「っと、夜津季さんと神風さん、お疲れ様です」

「どもどもー。でも葉宮に用事あるなら、私達の事は良いよ？」

「はい、失礼します」

慌てて挨拶する人間には真知が受け答えし、適当にいなした。

「じゃあ悪いが、また今度な」

「ああ」

葉宮もそう言って、やってきた人間達と話をし始めた。

巧斗と真知は踵を返し、歩き始める。

「今まで、葉宮の所にあんな人数が集まる事は無かったんだけどな」
歩き始めてすぐ、巧斗がボソリと呟いた。

「ま、葉宮は昨日ので男上げたしね。実質的に指揮したのは私だったけど、皆を鼓舞してたのは葉宮だし」

真知が言うには、巧斗が伊岸と戦っている間に最も働いたのは葉宮だったと言う。

穂波が倒した二人のバンデット。これを回収したのも葉宮だったし、新たな奇襲に備えて防衛線を再構築する自警団の人間に檄を飛ばしたのも葉宮だった。

その働きぶりは、自警団に広く知れ渡っていると言う。

「やつきーが持つ、英雄って称号、葉宮に取られちゃったかもよ？」
「今のアイツになら、喜んで譲り渡すさ」

巧斗と真知、二人とも不敵に笑って、帰路を急いだ。

五分程して銭湯に到着する。今日は休みで、中にはIIIIAの人間が屯っていた。

まず、穂波と出会う。

「おかえり。やつきーはもう、大丈夫？」

心配そうに、穂波が聞く。ただし視線は巧斗ではなく、真知に向いていた。

「本人に確かめたら？」

「な、何でよ！ コイツ、誤魔化すかも知れないじゃない！」

「別に誤魔化したりしないよ、ねえ？」

全くだ、とばかりに巧斗は肩を竦めた。

「じ、じゃあ……」

穂波は巧斗に向き直り、訊こうとした。

だが一向に、じゃあ、の続きが出てこない。時間が経つ毎に、顔が赤くなっていく。

「や、やつぱやめ！ じゃあね！」

挙げ句の果て、穂波はそう言い捨て、二階にあがっていった。

思わず二人は苦笑を漏らした。次に女風呂に入った。中には道治と藍とが座っていた。

「~~~~ッ！」

だが藍は、巧斗を見るなり顔を真っ赤にして、出て行ってしまった。

「何だかややこしい事になってるみたいだな」

「全くだよ。男子よりもむしろ、女の子の方が重症みたいだ」

真知も、二人をどうにかしてくる、と言って出て行っていた。残された男子二人は、苦笑するしか無かった。

ため息一つ吐いて、夜津季は呟く。

「まだまだ、死にたくないなあ」

「うん」

その言葉が身にしみた。

死にたくない。何があっても死にたくない。

そういう思いが、巧斗の心を強く揺さぶっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8302i/>

ヒトハネ

2010年10月8日10時39分発行